

BLACK★ROCK SHOOTER —Wishing on a STAR—

アカ狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王政の時代を終わらせ、十年間続いた軍事政権が革命戦争によって倒幕し、革命政府による政治体制に移行した国で、

国境沿いに作られた長く巨大な壁に作られた街　「グレートウォール」

そこで国境警備兵として働く少年の前に現れた左の目に青い炎を宿した少女。

「ブラックロックシューター」と名乗る彼女は少年に告げる。

「10年後のあなたを守ると命令を受けた」

少女の真意も分からないまま、民兵隊に追われることとなった少年彼に待ち受ける運命は…

注意!!

この作品はhuke氏の創作キャラクターである「ブラック★ロックシューター」を独自の解釈とオリジナル世界観とオリジナル設定で執筆しております。

お読みになる際はそれをしっかり留意の上、見ていただけると幸いです。

目 次

三章	三章	三章	三章	三章	三章	三章	65	二章	56	二章	49	二章	43	二章	33	二章	27	一章	一章	一章	一章	序章
Under	Under	Under	Under	Under	Under	Under		INDUSTRIAL		INDUSTRIAL		INDUSTRIAL		INDUSTRIAL		INDUSTRIAL		STARTING	STARTING	STARTING	STARTING	
Water	Water	Water	Water	Water	Water	Water		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		DESTINY	DESTINY	DESTINY	DESTINY	
Wanderer	Wanderer	Wanderer	Wanderer	Wanderer	Wanderer	Wanderer		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		METROPOLIS		DESTINY	DESTINY	DESTINY	DESTINY	
7	6	5	4	3	2	1		6		5		4		3		2		4	3	2	1	
111	105	98	91	85	79	71												21	13	9	5	1

序章

風の強い肌寒い日のことだった。

吹き付ける風が国境に沿うように立てられた巨大な壁にぶつかり、風切り音があるの上に造られた通路の手すりに、紐で結びつけられたラジオをカタカタと揺らしている。

ラジオからは民衆の反乱によって起きた革命によって10年続いた軍事政権が倒れてからもう1年が経つというのに、未だ混乱が続く様子を伝えている。

今日は隣の街で工場の作業員がストライキを起こしているというニュースを国境警備兵の少年に届けた。

背は大人達よりも一回り背が小さく、持っている自動小銃が大きく見えた。

ストライキの煽りでまた少し市場の物価が値上がりしてしまうかもしれない。

少年は思った。

彼の名はトト。国と国とを隔てる巨大な壁の内側に、寄り沿うように造られた壁の街“グレートウォール”で老夫婦と暮らしている。

トトは白い息を吐きながら時折吹き付ける冷たい風に目を細めている。

「トト！少し早い交代だ！お前に面会の客人が来てるぞ！」

「あ、はい！すぐ行きます！」

壁の下からの呼ぶ声にトトは答えてラジオを回収すると、階段を降りてすぐの場所に立てられた小屋に入る。寒さをしのぐための休憩所で、小屋の真ん中に置かれた薪ストーブがこんこんと音を立てて燃えていて、そこに数人の男が兵装のまま暖をとっている。

「今日も寒いですね……」

何気なくトトは彼らに声をかける。

「コーヒーをすすって一人にお前もどうだ？とすすめられたが、トトは遠慮した。」

「お前さんの待ち人は俺たち以上に寒そうだ。早く行ってやれ。」

「はい。」

トトは銃を毛布で包んで隅に立て掛けると一礼してその場を後にした。

向かう途中で彼の一年先輩に当たる兵士、ヴォルに声をかけられる。

「トト、お客さんはあそこだ。お前どこで引っかけたんだよあんな美人。」

「勘弁してくださいよおっ……。」

トトはヴォルの茶化しをあしらいつつ、彼の指差した方向を見る。

黒い髪を二つに結び、その髪の色と同じくらい黒いコートを着た少女が、国境を守る壁を見上げている。

歳は彼とさほど変わらなさそうだった。

トトが思わず見とれていると少女が気づいて歩み寄ってくる。

透き通る青い瞳と、眉一つ動かさない無表情にトトは思わずうろたえる。

彼の数歩手前で少女は足を止め、口を開く。

「トト。」

「……へ？な、何で僕の名前を……？」

「貴方に危険が迫ってる。私は貴方にそれを伝え、守るためにここへ来た。」

「そ、それってどういう……。」

少女の突然すぎる言葉をさらに動揺したトトだったが、少女の後ろに自分のものと違う制服に身を包んだ兵士達が歩いてくることに気づき、その姿に思わず身構えた。

濃いグリーン軍服に赤い腕章。革命政府の民兵達だ。

街の住人や警備兵達が何事かと彼らを見つめ、辺りが異様な雰囲気にも包まれる。

「いたぞ。アイツだ。」

先頭を歩いていた男が写真を片手にトトか少女のどちらかを指差した。

後ろにいた民兵達が突撃銃をこちらに向けて構える。

街の住人達がうろたえ、動揺し、警備兵数人がそれを見て咄嗟に銃を民兵達に向ける。

「何をしに現れた！」

トトの後ろから怒声が聞こえる。

振り返るとヴォルがピストルを民兵達に向けている。

「やれやれ……大人しくしてもらいたいのだが……」

車が更に走ってきて停まり、民兵達が降りてくる。

その時点で銃を構えた警備兵よりも民兵の数が多くなってしまう。

「いいか国境警備兵の諸君……ここで血を流したくないのなら大人しくすることだ！我々は君らには用はない！」

無関係な住人を巻き込みそうなりスクを抱えている分こちらが不利だとトトは思った。

他の警備兵達もそれは同じだったようで銃を少しだけ下ろす。

「分かればよろしい……さて、トト・ヘレナ・クレスト君。我々と来てもらう。」

「……え？」

「そう、君だ。拒否権はない。抵抗するならば、この場で身柄を拘束する。バカな真似はしないことだ。」

突然の出来事にトトは訳が分からずに狼狽える。

しかし黒髪の少女は彼の前に庇うように立ち、彼らを阻んだ。

「やれやれ……まだ話の分からない者がいたとは……」

男は腰のホルスターから拳銃を素早く抜いて引き金をひくが、吹き飛んだのは男の体だった。

少女がそれよりも早くどこからともなく身の丈ほどの巨大な大砲から青白い炎をまとった岩石のような弾丸を撃ち出し、男を吹っ飛ばしたのだ。

その場にいた全員が言葉を失う。

「君は……一体……」

「すぐに撤退してもらいたい。退かないのならこちらもただでは済ま

さない。」

彼女の左目に、青白い炎が灯る。

トトの疑問に答えないうまま、民兵達を見つめている。

「ッ……！退け！退け！」

民兵達はすぐに吹っ飛ばされた男を回収し、車に乗り込んで去っていった。

少女が大砲を下ろす。

「い、行った……？」

「……退いただけ。またやって来る。あなたはもうここには居られない。すぐに街を離れるべき。」

少女の冷たい言葉にトトは思わず声を荒げる。

「そんな！いきなり現れてそんなこと言われても困るよ！君はいったい何者なんだ？」

「……いきなりではない。命令を受けて、私はここにいる。」

「！……命令……？」

「10年前、私は命令を受けた。10年後の貴方を守るようにと。」

淡々と答える少女にトトは狼狽える。

「トト！あとの事は俺達にまかせろ！お前は家に戻ってすぐここを発つ用意をするんだ！」

ヴォルがトトに言った。彼は悩む。

「とりあえず、あの二人には話をしないと。街を出るのは、それからです。」

「……分かった」

トトの言葉に少女は頷く。

そういえば名前を聞いていなかったことを彼は思い出して問いかける。

「君、名前は？」

「……ブラックロックシューター。」

少年と少女は、こうして出会った。

そして、運命の歯車はゆっくりと動き始めたのである。

一章　　＼STARTING　DESTINY＼　　1

トトの自宅は壁から少し離れたところの住宅街の一角にあった。規格を合わせているらしく、どれも同じ形の家で道路に面している部分に番号が振られている。

トトはその中のG-24と書かれた家の扉を開けて中に入る。

「君も入る？寒いでしょ？」

トトは訪ねる。少女はこの真冬にホットパンツという丈の短いズボンを履いていたからだ。

「寒くは無い。でも、入る。」

少女は小さくうなずく。眉一つ動かさない反応は、心理を一つも読ませない。

中へ入ると、暖炉で火が燃える音と、ラジオの音が聞こえてくる。

「あら？トトですか？えらく帰りが早いじゃないの……。」

奥の部屋から老婆の声が聞こえてきた。

声は優しいものだった。

トトは部屋へ向かうと、紅茶をすする老婆と、車椅子の老夫がいた。

老婆はヘレナ、老父はクレスという名前で、トトが4歳のときに彼を引き取って世話をしていた里親だ。

「ただいまお爺さん、お婆さん。ちよつと大変なことになって。

ニユースは聞いた？」

「いいえ？先程外が少し騒がしかったのは聞きましたけどねえ。そちらは？」

老婆はトトの背後に立つ少女に気づく。

「あつと……ステラさん、僕の、おきやくさんです。」

「あらまあ。」

ややたどたどしい言葉でトトは答えた。

ステラという名前は彼の咄嗟の思い付きで、着ているコートの胸元に、星のマークが描いてあったからだだった。

トトは老夫婦との会話を続けた。

「それで、その外の騒ぎのことなんだけど……その、僕……急いでこの

街を発たなくちゃいけなくなつたんだ。」

部屋が静まり、部屋はラジオの音と暖炉で燃える火の音だけになる。

老夫は静かにトトを見つめ、老婆はラジオを止めた。

「トト、何があつたかを説明してちょうだい。いきなりそう言われても、私達はうなずけない。貴方の身に何があつたの？」

「実は……」

トトは経緯を話した。

話を終えると、真つ先に老婆が口を開いた。

「トト、これは私達……いいえ、貴方の手にも負えない問題だと思うわ。でも貴方の助けになるかもしれない人がいる。その人に手紙を書くからそれを渡しにグランドセントラルまでお行きなさい。」

そういうと老婆は棚の引き出しから便箋を取り出すと椅子に座つて老眼鏡をかけ直しペンを走らせ始めた。

老夫は少し待っていないさいと言つて部屋を後にする。

少し待ち、ぱきんと音を立てて薪が爆ぜたとき、老婆が立ち上がつて便箋とメモを渡した。メモには住所と名前が書かれている。

「トリユー、ゲオルク……」

「この人なら貴方の助けになつてくれると思うわ。」

ちやうど老夫が戻つてきた。回転式拳銃と、中折れ式の猟銃を持っている。

「何かの役には立つだろう。持つておきなさい。」

老夫はさらに弾を20発ずつ、金貨10枚と銀貨15枚を渡してくれた。

「お爺さん……」

「家の裏にお前が直していたバイクがあつただろう？アレはもうお前のものだ。乗つていくと良い。」

「……ありがとうございます。」

「トト、急い方がいい。」

ステラの声にトトが振り返ると彼女が窓の外を見つめている。民兵のトラックが家を一件一件回っているらしい。

「此処に居るのは危ない。裏口から出て行きなさい。無事を祈っているよ。」

トトは自分の部屋に行き、身支度を整えると最後に老夫婦に深々とお辞儀をして裏口から家を出た。すぐのところにとめてあつたバイクに掛けられた布を取り、エンジンを掛ける。

日頃の整備と手入れの賜物だったのか、軽快な音を立ててエンジンが回り始める。

そのとき家の表側から民兵達が家の中に入ってくる音が聞こえ、トトが行こうとするが、彼女に止められた。

「行つてはダメ。」

「でも……」

トトは歯を食い縛つて気持ちを押さえ、バイクに跨がりアクセルを開けた。

ステラもその後ろに乗り、バイクが通りに出たその瞬間だった。

「居たぞーっちだ!!」

男の声が響いた。そしてそのすぐ後に

バン！バン！バン！

銃声が響き渡り、弾丸が空気を切り裂いてトトとステラの横を通り抜けた。

彼はよせばいいのに、あと頭一つ分横にずれていたらという想像をしてみ、全身の血の気が一気に引いて、嫌な汗が溢れだした。

「止まったらダメー！彼らから逃げてー！」

ステラが強い語気で言った。その言葉にハツとしたトトはアクセルを開けて更に加速させる。

後ろからは車数台とトラックが列になって追いかけてきた。

バン！バン！

後ろから銃声が聞こえる。地面に当たり弾けたり、彼の横をすり抜け、トトの耳に風を切る音が響く。

思わずひいと声を出して、彼は更にアクセルを開けバイクを加速させる。

「トト、そのまま。」

ステラに言われ、トトは姿勢を低くしたままバイクを走らせる。次の瞬間、ステラは大砲を抜き、車の一台を吹き飛ばす。

「見るのは前だけ。」

トトはミラー越しに後ろの光景を見たのだが、ステラに言われすぐに視線を戻す。

やがて、街の区画、つまりは街の外に出る為の関所が見えてきたが、そこも民兵達によって塞がれている。

「絶対に止まったらダメ。」

トトは首を縦に振った。心臓が飛び出そうなほどに息が詰まり、声がでなかったのだ。

その背後でステラは立ち上がり、大砲を発射する。

青白く燃える岩の弾丸が関所を固めている兵士達を吹き飛ばし、煙で見えない場所をそのままバイクで駆け抜けた。

関所を抜けた先は広い道路と、何もない荒野が視界に広がる。

トトは自分のこれからの運命に不安を感じながらも、この少女を頼りに首都へ向かう以外に残された道が無くなってしまったことを思いながら、バイクを走らせ続けた。

一章　　＼STARTING　DESTINY＼　　2

町を出た二人は道なりにバイクを走らせていた。辺りには何もなく、浅く雪が降り積もった原風景と、電信柱と、一本道があるばかりであった。

風は冷たく吹き付け、手袋をしていてもハンドルを握る手がかじかむ。地図は持っていたが、首都までの道なんてトトには見当もつかず、

「これからどうしよう」

という気持ちをただただ誤魔化すために、目の前の道を走っていた。そうしてしばらくバイクで走っていると一件のガソリンスタンドが見えた。

トトはガソリンの残量が少ないことに気づき、一旦そこで休むことにした。

スタンドに入ると、無人らしく、中の売店に小さいテーブルが二つと椅子が二つずつあるのが見えた。バイクを停めて降りたところでステラに声をかけられる。

「トト、どうかした？」

「ガソリンがもう無いんだ、給油しないと」

「がそりん…？きゆうゆ…？」

ステラは不思議そうに首をかしげる。

「燃料のことだよ、エンジンを動かすための」

「ねんりよう？…えんじん…??？」

ステラが顎に手を添えて首を捻る。

「え、えつとね…このバイクはガソリンっていう燃料で動いてるんだ。だから定期的にこういうところに来て燃料を補給しないといけないんだよ。」

「…？…？…そう…。」

「す、すぐ済むから少し待ってね…。」

「分かった。」

トトは給油機に銀貨を入れて燃料タンクの蓋を開け、給油ノズルを

差し込み、ガソリンを入れる。

5分ほどで燃料タンクは満たされ、トトは蓋をする。

「ちよつと中で休まない？少し考えを整理したいんだ。」

トトの問いかけに、ステラは小さくうなずいた。売店に入ると、中に置かれたガスストーブのおかげでかなり暖かい。

レジカウンターに置かれたラジオからは音楽が流れている。妙なことに店員の姿はなかったのだが、トトはそれ以上に部屋の暖かさに安堵していた。

「はあああ…寒かったあ…」

トトはそう言いながらストーブの前にしゃがみこんで、暖を取りはじめ。

「…？トト。」

ステラに声をかけられ、トトは彼女に聞きたいことが山積みなことを思い出す。

「あ、その…ステラ、ずっと聞きたかったんだけど…その…」

「何？」

「君はいったい何者なの？」

トトの質問にステラは口を開く。

「私は、試作量産型人造バイオロイド、ブラックロックシユーター。10年後、つまり現在の貴方を守るようプログラムされている。」

「だ、誰がそんなことを…？それに、僕が民兵に狙われる理由だってわからないし…」

「…それは私も詳しくは分からない。プログラム以外のことは分からない。」

「…でもそれじゃ僕は君のこと信じられないよ…。もつとこ
う…」

「信じて。」

ステラのその真つ直ぐな瞳と言葉に、トトは思わず答えに詰まる。そうして参った、と言いたげに頭を掻いて

「分かった、信じる。」

と言ったのだった。

「とはいえ、こういう形でしか貴方を助ける事しか出来なかったことや、説明が不十分なことに關しては申し訳ないと思っっている。」

「そ、そんなこと……？」

「……トト？」

トトはそんなことはないと気を遣おうとしたが、ようやくこの部屋の違和感に気がついた。

部屋にはステラと自身だけ。

それ以外の音はストーブの火とラジオの音楽だけ。

「……お店の人、どこ？」

そう、ここには二人以外誰も居ないのだ。

そう思った矢先、キイトドアが音をたてて少し開いた。

その隙間から荒い息遣いと、唸り声が微かに聞こえてきて、ステラの目付きが変わる。

「……トト、下がって。奥に“何か”がいる。」

「な、何って」

トトが口を開いた次の瞬間だった。

勢いよく戸が跳ね開けられ、その音に驚いたトトの前に“何か”が現れた。

赤い目を光らせレジカウンターを飛び越えたそれは体を捻って向きを変え、獅子の如くトトに飛びかかる。

「うわあああああっ!!」

「ギャウツ!？」

ステラは大砲を出し“何か”がトトにその爪と牙を立てる前に撃ち抜いて吹き飛ばす。

何かはガラスを突き破って地面に転がり、仰向けに倒れて動かなくなった。その体からは撃ち出された岩石の炎が燃え移って揺らめいている。

そしてその正体はつきりと分かったとき、トトは戦慄した。

“何か”は全身を毛で覆われていて顔はよく分からなかったが開かれた口から覗く歯には血がベツトリとついていて、骨格は肉食獣のそれに近い。奇妙なことにそれは人間の服を着ていて、胸元には今二

人がいるスタンドの名前がかかれた名札を付けていた。

「ひ、…人…？」

「私にも何かは分からない。でも、人間だったのは確か。」

ステラは静かに答える。

どちらにしろトトはこんなところにもう居たいと思えるわけがなく、慌てて店を出ようとして、一度立ち止まる。

「…トト？」

「…」

トトはガスストーブを止め、売店の棚から飲み物とチョコレートを取って、カウンターに銀貨二枚を置いた。

そしてそれを鞆にしまい、ステラを見る。

「行こう。」

ステラは頷く。

二人は店を出てバイクに跨がり、トトはエンジンをかけ走らせ始める。

誰も居なくなつたスタンドの割れた窓から風が吹き込み、カウンターに置いてあつた新聞がめくれる。大きい一面の見出しにはこう書かれていた。

“各地でクリーチャーが出現！原因不明、現在調査中”

バイクを道なりに走らせていると、かなり遠くに煙をあげる何本もの煙突を見つけた。

もう少しで街に着くとトトは思った。

だが時刻は日の入りで、空が少し暗くなり始めており、疲れを感じていたトトは何処かで休息を取りたいと思い始めていた。

そんなとき、道路の脇に分かれ道があり、その先には建物が見えた。

トトは分かれ道の前でバイクを止めて、ステラの方を向く。

「ねえ、ステラ?」

「トト、まだ街には着いてない。」

「いや、うーんとね、もうそろそろ夜になるし、休みたいんだ…えっと…」

「……、トトがそういうのなら、私はそうする。」

「うん、ありがとう…じゃあ、ちよつとあそこに行ってみようよ!」
ステラは頷く。トトはゴーグルをかけ直して進路をその建物に向けた。

そしてその建物の前に着いたとき、そう思ったことを後悔した。

バイクのライトで照らされた白い壁やガラスは長い間放置されているらしく、黒く汚れていて、ツタが絡み付いていて、まるで建物を飲み込もうとしているように見えた。

そこは所謂廃教会というもので、薄暗い空と相まって不気味さを醸し出していた。

「え、えーっつと…」

トトはどうしようか悩んだ。

だんだんと周囲も暗くなり出しており、今更引き返すわけ気にもなれない。

そんなトトを横にステラは扉に手をかける。

「わぁー!?!?待って待って待って!」

「?」

ステラは不思議そうな目でトトを見つめた。

「…でも、トトが言い出したこと。」

「うっ…それは、そうだけど…。」

「??」

トトの様子にステラは首をかしげる。

しかしトトには迷っている猶予は無い。

それでもトトはこの教会の中に入るのは嫌だった。

「誰だ？」

建物の影から黒い服のフードを深く被り、ランタンを持った男が出てきて二人に言った。

ステラは反射的にトトの前に立つが、トトは待つて！と彼女の肩を掴んだ。

「ご、ごめんなさい！人がいると思ってなくて…。」

「…それはそうだろうな。ここに何の用だ？まさか迷い込んだ訳はないよな？」

ランタンの明かりでフードの奥の男の顔が照らされる。無精髭と長い前髪の隙間から赤い眼がギリリと光る。

「すみません…その、一晩泊めていただけたらと…。」

「…着いてきなさい。」

男はそう言っつて裏手側へ歩いていく。

トトはバイクを押しながらそれに続いた。

教会の真裏に出ると、小屋が見えた。

「まさかここに足を運んでくる人がいるとはな…。」

「えっ？」

「いや、こちらの話だ…。」

小屋に入るとストーブのおかげで暖かく、テーブルとソファが置かれていて、その奥にはキッチンが見えた。

「茶でも出そう。かけて待つててくれ。」

「あつ、僕はトトって言います…、彼女はステラ…です…。」

「…アレスだ。」

男は二人にそう名乗るとキッチンに立ち、ケトルに水を入れて火にかける。

トトは言われた通りにソファに座る。

ステラは部屋を見渡してから、トトに視線を向けた。

アレスは裾の長いコートをかけると口を開いた。

「…見たところ君は北の国境警備兵のようだな。着の身着のままあの街をバイク一台、それも女と出てくるなんて、何をやったんだ？脱走兵もいいところだぞ。」

アレスからのいきなりの質問にトトは面食らう。

「え、ええっと…。」

「…まあ、答えられないことならそれでも構わないさ。だが街へ行くならその外套は取らない方がいいぞ。軍服は目立つからな。」

「はあ…………。」

「…まあ、俺にはあまり関係がないから強制はせん。だがこれから何処へ行くつもりだ？君は若そうだが、この国の情勢をよく知らないわけではあるまい。」

アレスはそう言って、紅茶が入ったカップを二つテーブルに並べた。

彼の問いにトトは一応の事実を伝えることにした。

「その…実はグランドセントラルに行かなきゃいけないくて…………。」

トトの言葉にアレスの表情が変わった。

「…………今は止めた方がいい。革命政府の連中があそこで市民に何をしているか、君も知らないわけではないだろう。」

「…。」

彼の言葉にトトは言葉を詰まらせた。

その間をステラが割って入る。

「彼らは何をしている？何故彼らは国境警備兵達からも嫌われている？」

その言葉にトトもアレスも少し驚いた。

彼女は本当に何も知らないのだ。

だがトトは答えない。

口にするのも嫌だったのだ。

「…知らんのか。革命政府に雇われている民兵達は片っ端から罪の

無い市民を不当な理由で逮捕しては拷問にかけているんだぞ？」

アレスはステラにそう言いながら三人分のお茶を淹れ、さらにこう続けた。

「民兵達の権力は日増しにするばかりだ。それでも、行くのか？」

アレスはトトの目を見る。

トトは拳をぎゅつと握りながら、口を開く。

「……どうしても会って、話をしなきゃいけない人がいるんです……。その、グランドセントラルへ行って……。」

「……誰だ、そいつは？名は何と言う？」

「…… トリユー・ゲオルク」

トトの言葉にアレスは一瞬驚いたような顔をした。そして、

「……なるほど……。彼の家なら知っているから、そこまでなら案内してやろう。」

と言ったのだ。

「えっ……？」

アレスからの思わぬ提案にトトは驚いた。

ステラは首をかしげる。

「なににせよ今日はもう遅い。明日の朝、グランドセントラルまで行く抜け道を教えてやろう……。私はもう休ませてもらうよ。そっこの戸を開けると風呂場がある。戸棚にはパンやなんかもあるし、まあ、好きに使ってくれ。」

アレスはそう言って奥の部屋へ引っ込んでしまった。

トトは閉じられたその扉をしばらく見てから、鞆に視線を写して、そこからチョコレートを取り出した。

トトはそれを半分に割って、ステラに差し出す。

「…… 食べる？」

「……？それは何？」

差し出されたチョコレートを見て、ステラはまた首をかしげた。

「食べ物だよ……、えっと……。こう」

トトはそう言いながら、チョコレートの角をかじってみせる。

ステラはそれを見て同じように一口かじる。

ぱきりと音を立ててチョコレート欠片がステラの口の中へ運ばれる。

そして、ステラはその味に目を丸くした。

「…甘くて…苦くて…。」

「…、おいしい?」

「…?おいしい…?」

ステラは不思議そうに繰り返す。

「え、えっと…口に、合うかなって…」

「…そういう意味なら、これはおいしい…とても。」

「…そっか、よかった…」

トトは微笑む。

その様子を見て、ステラは戸惑う。

彼の微笑む表情が、自分の記憶の何かと重なったのだ。

「…ステラ?」

「…なんでもない。」

ステラは首を横に振って、チョコレートをもう一口食べた。先程よりも大きな一口だった。

~~~~~

ステラはチョコレートをいたく気に入ったらしく、トトが二口で留めたのに対して、もらった分を全部食べてしまった。

トトは、ステラの脚や頬に砂ぼこりや、泥がついているのが気になった。

「ステラ…その、随分汚れているけど…?」

「貴方の居た街まで、歩いたから。」

「…疲れないの?」

ステラは頷く。

「…えっと、シャワーとか…入る?」

「必要は無い。が、トトが必要だと思えば、入る。」

「うん… そうした方がいいと思う…」

ステラはもう一度頷いて、上着を脱ぎ始め、ズボンのベルトに手をかけ始めた。

「うわああああっ?!?! 待って待って!!」

「？」

トトが慌てて止めに入り、ステラは手を止めてトトの様子に首をかしげた。

「そ、その部屋入ってからにして！お願いだからっ！」

「… わかった。」

そう言ってステラはシャワーのある部屋へ入っていった。

「… はあ。」

トトはソファの上に横になる。

好きに使って良いって言ってたし… 別に良いよね。くらいの軽い気持ちでそうしたのだった。

そして、ふと思いついたトトは携帯ラジオを鞆から取り出してスイッチを入れ、チャンネルを合わせる。

そうして合わせたチャンネルでは音楽番組をやっているらしく、拍手と共に司会の声が流れ始めた。

「ッざあ、それでは一曲歌っていただきましょう！シンングラブで、『赤いリボン』！」

大きな拍手と共に音楽が始まり、女性の歌声が聞こえてきた。

トトはシンングラブの名前に聞き覚えがあった。

革命政府による新体制が発足して間もない頃に突然現れ、瞬く間に人気になった女性歌手で、

美しい容姿と歌声で聴衆を魅了し続け、歌姫として君臨している存在だった。

そんなことを思い返しながら、トトはテーブルにラジオを置いて、流れてくる音楽に耳を傾けながら、目を閉じた。

~~~~~

トトは夢を見た。

どこかの部屋の中において、そこで慌ただしく走り回り、椅子やテーブルを扉に固めていく人達を、トトは見つめていた。

「トト。」

声をかけられ振り向くと、自身よりずっと背の高い青年が立っていた。

トトはそこで自分の体が小さく、幼くなっていることに気がつく。

青年に駆け寄って手を握った。

彼が誰なのかは、トトには分からない。

青年はそのままトトの手を引きながら部屋の奥まで歩き、置いてあった本棚に触れ、グツと押し込む。

それは隠し扉でゆっくりと開き、長いらせん階段が見えた。吹いてきた弱い風に青年とトトは目を少しだけ細める。

「さ、行くよ。」

青年の言葉にトトは頷き、二人は歩き始める。

「若様、どうかお気をつけて。」

部屋にいた一人の女性がそう言って、隠し扉の戸を閉めた。

その音にトトは一度振り返るが、すぐにまた前を向いた。

これから何処へ行くのか。これから自分はどうなってしまおうのか。という漠然とした不安が、トトの心を蝕みながら、二人の歩く音だけがそこに響いていた。

~~~~~

「トト、トト。」

呼び掛けられ、トトは目を開ける。

髪を濡らしたステラがトトの顔を覗き込んでいて、ポタポタと垂れ

る水滴にトトは顔を右手で覆う。

トトはいつの間にか自分が眠ってしまったのだと思った。

ラジオは放送が終わっていたらしく、「サー」というノイズだけが流れている。

トトはラジオを止めて、ステラの方を向く。

そこにはタオルで濡れた髪の水気を取る全裸のステラが立っていた。

「っ！うわあああああああああ?!?!?!」

トトは驚きと動揺が混ざった声をあげて、後ずさる。

ステラはそんな彼を見て、「何をそんなに慌てることがあったのか？」とでも言いたげな顔をする。

「…？トト？」

「ふっ、服！服着て！早く！」

トトは顔を手で覆いながら叫ぶ。

顔はみるみるうちに耳まで赤くなり、煙が出そうなほど体温が上がっていく。

「…？そこまで言うなら…」

ステラは不思議そうな顔をしながらそう言って、また部屋へ引っ込んだ。

ボタンと音を立てて戸が閉まったのを確認してから、トトはようやく手を離す。

「……………はあ。」

トトは深いため息をつき、項垂れる。

そして、ステラの身体が頭に浮かんでしまい、また頭を抱え煩悶としました。

(続く)



ゴトツ。という音でトトは目を覚ました。

そしてすぐにその音の正体が、暖炉の薪が燃え尽きて落ちた音だということに気がつく。

「目が覚めたか？」

「あ、はい。」

直ぐにアレスの声が聞こえ、トトは目を擦りながら体を起こす。

まだ夜明け前のようなだった。

「顔を洗ってくるといい。直ぐに此処を出るぞ。じきに民兵達が君を探しにここまでやってくるはずだ。」

「…？、なぜ分かるんですか？」

トトの問いかけにアレスは「分かるさ」と言って更に続けた。

「君らの服は目立つからな。彼らも探しやすいだろう。あのバイク一台で来たんだ。簡単に割り出せる。」

そう言われたトトは、これからの不安を感じながら洗面所へ向かった。

自分はいつたいたいなるのだろう。

無事にグランドセントラルへたどり着けるのだろうか。

ステラは…ホントに信じていいのだろうか。

民兵たちはどうして自分を追っているのだろうか。

顔に何度も冷たい水をかけるその姿は、まるで不安も一緒に洗い流そうとするかのようにだった。

洗面所から戻ると、ステラはテーブルの上に置いてあったトトの鞆からちらりと見えているチョコレートのパッケージと見えていた。

「…」

トトはカバンを肩にかけ、チョコレートをステラに差し出す。

「食べる？」

「…それは、トトの分…」

「また買えばいいから。」

「……」

トトが笑いかけると、ステラは少し考えてからチョコレートを一欠片だけ割って、それを口に運んだ。

「……美味しい？」

「うん。」

トトの問いかけに、ステラは頷く。

「さあ、準備を済ませろ二人共。日が上ってしまう前にな。」

アレスはそう言って肩に銃をかけ、剣を腰に携えると、パンを千切って口に放り込み、残りは布にくるんでトトに投げ渡した。

トトはそれを受け取り鞆にしまって、身支度を済ませて念の為に猟銃と拳銃に弾を込めた。

撃つこと無く街まで辿り着くことを願いながら。

~~~~~

トトはゴーグルをかけると民兵が近くに居ないことを祈りながらバイクをキックスタートさせてエンジンを軽く吹かす。

アレスは小屋の隣にあった納屋から古ぼけたバイクを出してきて、トトの横でエンジンを始動させた。

エンジンがかかったことを確認したステラは当たり前のようにトトの後ろに跨る。

腰に手を添えられる感覚に、トトは顔を赤らめた。

「遅れるなよ。」

「はい。」

アレスの言葉にトトは頷く。

民兵隊は日の出が起床時間でその30分後には兵務を始めるので、日が登りきる前にあの煙突が並ぶ街へ向かう必要があった。

「奴らに見つかりたくはない。ライトを消して、薄明かりを頼りに進む。」

そう言ってアレスはバイクを発進させ、トトはそれに続く。

ライトを点けずにバイクを走らせることは運転に慣れていないトトにとっては不安でしかなかった。

東の空を見ながら、遠くに見える長い煙突を目指して走る。

二台のバイクのエンジン音が響くだけの道路、しかしステラは口を開いて言った。

「…トト、何か来る。」

「えっ?」

トトはミラーで後ろを確認する。

はるか後方に何やらユラユラとゆらめく黒い影が見えた。

そしてだんだんそれは大きくなってきている。

「……!」

近づいてくるにつれ、その形が鮮明になった。 民兵隊のトラックだ。

それはライトも点けずに猛スピードで追い上げてきていた。

ゆらめいていたのは荷台の幌が破れてバタバタとたなびいていたのだ。

「うそ…!?!」

「いくらなんでも早すぎる…?!飛ばすぞ!」

アレスは先に気づいていたようでトトに叫ぶとバイクの速度を上げた。

トトもそれに続くように速度を上げる。

だがトラックは遠のくどころかどんどん近づいてくる。

トトは走りながらも、ある疑問が頭から離れなかった。

民兵隊のトラックに見つかったこともそうだが、ライトも点けず幌が破れたまま走ってこれたのが、トトには分からなかった。

幌が破れていたら後ろに乗る民兵達が雨風に晒されていることになる。そのまま走ることはいえない。

トトはスロットルを全開にしているが、だんだんとトラックは迫ってくる。

「トト、絶対に振り返ってはダメ。」

後ろからステラの声が聞こえ、そのすぐ後に砲撃音と、トラックに

直撃し爆発する音がほぼ同時に聞こえた。

グレートウォールを出るときも、不思議と反動でバイクが揺れないことにトトは疑問に感じながら、反射的に後ろをチラっと見てしまった。

そしてすぐに見なければ良かったと後悔した。

燃え盛るトラックの運転席、割れた窓ガラスの中から赤く光る巨大な目をトトは見てしまった。

そして目が合った瞬間、それが笑ったように感じて、トトは恐怖を感じ前を向き直す。

「なんなんだアレ……!」

トトは思わず口走る。答えるものは居ない。

トラックは徐々に速度を落としていき、バイクとの距離が開いていく。

だが直ぐにけたたましい音がトトの背後から聞こえ、トトは何かと思いまた振り返ってしまい、トラックの車体を突き破って這い出てきた人の上半身と蜘蛛の胴体が組み合わさったような姿の8本脚の怪物が物凄い速さで追いついてくるのを見てしまった。

ステラは怪物に狙いを定めて砲撃を行うが、怪物は止まるどころか物ともせずに突撃し、

長く伸びた腕で二人をバイクごと叩き飛ばした。

トトの右わき腹に強い痛みが走ると同時に、二人の体は殴られた衝撃でいとも簡単にバイクから引き剥がされて宙を舞った。

トトは視界が一回転したかと思ったら地面に叩きつけられ更に二回転半転がった。

身体中が痛んだが、今自分の身に迫っている危険を考えたら、それどころではない

「少年!!」

アレスがバイクをターンさせ、怪物に銃を向けるのが見えてトトは慌てて起き上がるが、怪物は既に眼前に迫っていた。

耳まで裂けた口と、そこから幾つも不揃いに生えた歯、そして真っ赤に血走った目がトトの顔を覗き込む。

喰い殺される

トトの頭にそんな思考がよぎったその時、トトはその怪物の体、特にその顔に見覚えがあることに気がついた。

「あ、……………、この人は……………」

だが気づいたときには怪物が口を開いてトトの喉に食らいつくところだった。

次の瞬間、トトの目の前を青白い閃光が駆け抜け、それは怪物を吹き飛ばした。

トトはそのあまりにも強烈な光に目が眩んでしまい、何が何だか分からなくなっていた。

ステラはバイクから転げ落ちて直ぐに立ち上がり、トトの目の前にいた怪物めがけて砲撃したのだ。

しかし怪物は起き上がり、再びトトの方へ向かおうとする。ステラは大砲とは別に右手に黒く細身の剣を出現させた、

彼女はその刃を振りかざし、怪物に向かって一直線に走り出す。

怪物は腕を振り横薙ぎに払おうとするが、ステラはそれを刀で受け、ぶつかり合う瞬間に火花が散る。

そしてその腕を蹴って怪物の頭上に高く飛び上がった。

「少年！無事か？」

アレスの声にトトはハツとした。

「い、今のは……………」

「君の連れのお嬢さんがやったのさ。」

「ステラが？」

「ああ……………まだ存在してたなんてな。」

「ど、どういうことですか？」

トトの疑問に、アレスは一呼吸置いて口を開く。

それと同時に、怪物の断末魔がその場に響き渡った。

ステラが黒い剣を怪物の目に深く突き立てたのだ。そこから吹き出る血飛沫が、ステラの白い肌を赤く染める。

怪物はもがくように身をよじっていたが、遂に崩れ落ちて絶命した。

ステラの持っていた剣は怪物から引き抜かれると直ぐに黒い影と
なつて消えていった。

トトは痛む体をなんとか立ち上がらせて怪物に歩み寄る。

「……………やっぱり……………」

「知ってるのか？」

トトの言葉にアレスが疑問を投げかけた。

「……………僕を捕まえようとした、民兵隊の指揮官です……………」

その怪物は、あの時トトに銃を向けステラに撃ち抜かれたあの男
だったのだ。

そしてトトはガソリンスタンドで起きた出来事を思い出す。

「馬鹿な……………民兵隊の指揮官がなぜこんな……………」

アレスの疑問に答える者はいなかった。

トトもステラも、その疑問の答えを持っていなかったからだ。

「…行こう、もう日が明けている。」

ステラの言葉に、アレスとトトは目を合わせて頷いた。

トトは倒れているバイクを起こして再び跨り、エンジンをキックス
ターゲットさせる。

彼の後ろにステラが乗り、腰に手を回す。

それを確認したトトはバイクを発進させ、進路の先にある煙突を目
指した。

先ほどとは違い、トトの中にはステラにそうされることに安心を感
じている自分がいた。

二章　　INDUSTRIAL METROPOL ISS 1

長く伸びる煙突に向かって舗装された道を二台のバイクが走っている。

その煙突が遠くからでも見えたのは、その煙突がまるで何本も聳え立つ塔のように高く作られているからだ。トトが気付いたのは、遠巻きに関所が見えてきたときのことだった。

「アレが工業都市ルールだ。」

前を走っていたアレスがバイクを止め、トトもそれに合わせて停車させる。

トトは考えた。

革命政府の作った政策によって都市間の移動は通行許可証によって管理されている。

しかしそれにも穴はあった。

民兵隊が行う夜の見張りも日の出には終わることはトトも知っていた。

つまりルールへの入る為には、警備が最も手薄になる夜明け前の見張り交代のときが最適だったのだ。

しかし先ほどの襲撃を受けたことで、その目論見は失敗してしまっ

た。煙突からももうもうと出る排煙がさきほどまで晴れていた空を雲の様に覆い、日の光を遮って辺りが薄暗くしている。心なしか、雨もぱらつき始めていて、地面は少し湿っていた。

トトは懐中時計を見る。10才の誕生日に祖父に時計屋で買ってもらったものだ。

午前10時前。民兵隊は当に兵務を始めており、彼らがトトたちを簡単に通すはずがないのは明らかであった。

「さて、あそこをどう抜けるか…」

「……」

「その様子では、君も何も浮かばないようだな」

「…すみません……」

トトは少し頭を下げた。事実、なにも浮かびはしなかったからだ。アレスは顎に手を当て、無精髭を撫でた。

彼の深紅の瞳が静かに関所を見つめている。

「トト」

「何？」

ステラがトトに声をかけた。

トトは振り返り彼女と目を合わせる。

「なぜ、夜中に移動しようとはしなかったの？」

「それは……」

当然の疑問にトトは言葉を詰まらせた。

「夜はクリーチャーの活動が活発になる。奴らは光を避けて暗いところでしか行動しないんだ」

トトの代わりにアレスが答えた。

夜中にバイクを走らせて、今朝襲ってきたモノや、ガソリンスタンドで襲いかかってきたモノに襲われる事をトトは恐れていて、それはアレスも同じだった。

「それは何故？」

「私を知るか」

アレスの言葉にステラは「そう」とだけ答えるとコートのフードを深くかぶった。

アレスは顎から右手を離してバイクのハンドルを握り直してこう言った。

「…仕方がない、付け焼刃の浅知恵でしかないが、正面から突破しよう。」

「ええええ!？」

~~~~~



都市の関所には先へ通さないための簡易的なゲートと、武装した数人の民兵で簡単には通しそうもないのは明らかであった。

トトは自分たちより先に車を押しながらゲートを通過した二人組を見つつ、民兵たちの前でバイクを停車させた。二人がトト達の前にやってきた。

その内の一人は言った。

「身分証と通行許可証は？」

トトは二人が持つている機関銃を見た。

弾倉が横向きに取り付けられていて銃身が短い。所謂短機関銃と呼ばれるタイプの銃だ。

「道すがらクリーチャーに襲われて、失くした。ここには出稼ぎで来ただけさ。」

アレスはきつぱりと答えた。もちろん嘘である。

トトは帽子を目深に被り直した。民兵たちが少しでも自分の顔を覚えておかないことを祈りながら。

「失くした？そちらも？」

「は、はい……」

「その銃は？」

民兵がトトのライフル銃を指さした。

「ただの猟銃だ。それもどこで買って買えるような。クリーチャーが都市の外で徘徊してるんだぞ？」

アレスは何の問題も無い事だと説明するが、民兵は疑り深く彼らを見た。

それが彼らの仕事だし、こうなるのは当然かとトトは思った。

「怪しいな、バイクから降りろ。身体検査をする。その二人も降りろ」

民兵の一人が銃口をトトたちに向けた。

「おーい！ちよつと待ってくれ！」

ゲートの向こう側から男の声が聞こえた。

その声の主は、トトたちの前方で車を押している二人組の一人、トレンチコートとテンガロンハットを被った男はトトたちの方に体を向けていた。

「そいつらは俺らの連れだ！後で追いつく約束だって話をするのを忘れてた！」

男の言葉に民兵は振り返り問いかける。

「…その話、嘘偽りはないな？」

「ああ、ない！」

「……」

民兵がトトたちに向けていた銃をおろす。

一人がゲートの前に立っていた兵士に手をあげ、開けるように促した。

「ようこそ、工業都市ルールへ」

民兵の一人がそういうと、ゲートが開けられた。

アレスは兵士に一瞥するとバイクを発進させ、トトもそれに続く。

そうして車に追いついた時にアレスがバイクを停めた。

「おかげで助かった。礼を言うぞ」

「良いってことよ、困ってる人は見過ごせないんだ」

アレスの言葉に、男は笑って答えた。

そして右手の親指で車を指してこう続けた。

「代わりと言っちゃなんだが…：車引っ張ってくれないか？」

「……」

トトはなんとなく、そんなことだろうなと思っていた。

~~~~~

「用意はいいか？」

「はい……」

「よし！吹かせ！」

アレスの声に合わせて、二台のバイクで一台の車を牽引する。慣れない作業にトトは体に変に力が入った。

「すまねえなあ！運悪くキャブレターがイカれちまってな！」

男は窓から顔を出して、トトたちに向かって声を張った。

アレスもこの手の人間の優しさには裏があるというのはわかっていたのだろう。すんなりとこの男の申し出を受け入れた。

無論トトに拒否権はなかった。

渡りに船という言葉はあっても、ただで乗るわけにいかないと思っていたからである。

ここまで付き添ってくれているアレスにさえ、何かしらの謝礼をしなくてはと思うトトであった。

「トト、何故断らなかったの？」

しかしそれでもステラだけは納得がいつていなかったようで、トトに疑問を投げかけた。

「僕らのことを助けてくれたんだ。これくらいはしてあげないと」

「でも、顔も名前も知らない」

「顔や名前を知らなかったって、人は助け合える。元々僕らは顔も名前も知らなかったんだから」

「……」

トトの言葉にステラは納得がいくようないかないような、不思議な感覚を覚えながらもそういうものなのだと頷いた。

トトはふと街の景色に目をやった。

巨大な工場が幅の広い道路の両側に並び、巨大な煙突が雲まで伸びているように見えた。

途中で車とすれ違うことはなかった。

貨物用のトラックはそのほぼ全てが、民兵隊の兵員輸送車にするという目的で接收されてしまい、工業製品の運搬を貨物列車に頼らざるを得ない状況なのだ。

ただトトの住んでいるグレートウォールとは違い、高架橋が存在し、その上を列車が走っていた。

自分の街とは何もかもが違う光景。トトは思わず目を奪われた。

「そういえば名前を言ってなかったな！俺はアンドレ！アンドレ・マクミリアだ！」

三人の後ろからその男、アンドレの声がまた聞こえた。

「こっちはユナってんだ！顔はいいが性格がはあ!？」

「え?？」

「…いま、ユナと呼ばれた人がアンドレという人を蹴った。」

「ええ?？」

アンドレの苦悶の声と、直後にステラに何が起きたかを伝えられたトトは、思わず困惑した。

「トト！速度を合わせろ！」

「あつ！は、はい！」

アレスの声にトトは前を向きなおす。

市街地の中心部に行くに連れ、雨がよいよ本降りになり始めていた。

(続く)

二章　　INDUSTRIAL METROPOL
ISS 2

「ここで止めてくれ！」

「アレスさん！」

「聞こえている！」

アンドレの声を聞き、二人はブレーキをかけた。

彼の車を停車させ、トトとステラはバイクから体を降ろした。

彼らがやってきたルールの市街地、その中心部にあるゼーフエナル駅にたどり着く頃には雨は本降りになっていた。

トトはゴーグルをかけ、外套のフードを被っていないくは運転もままならなくなっていた程だ。

駅の大きな時計を見上げながらトトはバイクから降りると、手袋でゴーグルについた水滴と顔を拭い、ペツと唾を吐く。

雨粒は工場排煙の煤がまざっているのか黒く濁っており、口に入るとえぐみがあった。

「トト、大丈夫？」

「う、うん、平気…ってうわっ!？」

「？」

ステラは自分の顔を見るなり驚いたトトに首を傾げた。

彼女もまた黒い雨に濡れ、顔が黒く汚れてしまっていたのだ。

トトは慌ててポケットからハンカチを出してステラの顔を拭う。

こそばゆさからか、ステラは目を細めた。

「気にならないの？」

「うん」

「…そっか……」

「私には、雨の冷たさは分からない。ただ、この雨水は飲用には適さない。」

「…そっか、あんまり飲み込まないようにしてね。」

トトはステラの顔を拭い終えて、黒く汚れたハンカチをポケットに

押し込むと、アレスにこれからのことを尋ねることにした。

「あ、アレスさん！とりあえずどうしたらいいんでしょう…？」

「… 私は宿を探してくる。君たちは、それまで民兵に悟られないようにしていてくれ。」

「ええ!?それなら僕らも行ったほうがいいんじゃない？」

「トト、彼らにはその人たちの連れという名目で私たちはこの街に来たことになっているんだ。すぐに離れては、怪しまれるだろう？」

アレスの言葉にトトは確かにと思った。

「それに、君の連れはかなり世間に疎い。目を離すと何処かへ行ってしまうぞ？」

ステラはその言葉を聞いてトトの腕を掴んだ。

トトは急に掴まれてステラの顔を見た。

「それは問題ない。私はトトからは離れない。」

「ははは、無用な心配だったな。十二時にここで落ち合うとしよう。ではな」

アレスはそういうとバイクに跨り、走り去っていった。

駅の前の広場は雨のせいか、人がほとんど出歩いてはいなかった。

トトはアンドレがいた場所に目をやるが、姿が見えない。

アンドレの車のそばでユナが一人、タープを立てて何かを用意しているだけであった。

「あ、あれ？アンドレさんは？」

「アンドレなら部品探しに行ったよ。キャブがイカれたって言ってなかった？」

ユナは目もくれず、てきぱきと椅子や小さなテーブルを用意しながら答えた。

中性的な声で、トトとさほど年の差が感じられない。

シャツにベスト、ネクタイをつけた姿は、まるで貴族に仕える執事のようなトトは思った。

「雨に濡れて寒くない？入りなよ」

「あ…すみません、失礼します」

「礼には及ばないよ。その代わり靴磨きをさせてほしいな。一足銀貨

五枚で」

タープの中に入ったトトとステラにユナは笑顔でそう言った。

「ご、五枚!？」

トトはあまりの高値に驚きの声を上げた。

板チョコレート一枚と瓶ジュース二本の倍の値もする靴磨きは聞いたことがなかったからだ。

「初回でサービスしてる方なんだ。今磨いとけば五年は持つよ？」

「うう…」

「磨かないなら、客だと思われたくないからタープから出てほしいなあ」

「お、おお、お願いします！払いますから！」

「毎度ー」

トトはしてやられた。と思っただがもう遅い。

泣く泣くユナの靴磨きの客人として銀貨を五枚渡すこととなった。

国境都市の冷たい風には堪えられるトトでも、黒い雨に降られるのは堪えられないのだった。

「ではお客様、こちらにおかけになって、台に足をのせてください」
「…」

ユナに言われたとおりにトトは椅子に腰掛け、足を磨き台の上に乗せる。

「トト、何をするの?」

「あ、ええっと…靴磨きだよ」

「?」

トトの言葉にステラは首を傾げた。

「えっと、靴を磨くんだけ。革靴って手入れしないとすぐダメになっちゃうから」

「かわぐつ…?ていれ…?」

「あはは、まあ見ていれば分かるよ」

ステラの様子に頭を抱え始めたトトを見てユナが助け舟を出した。

ステラは小さくうなずくと二人の間にしゃがみ、トトの革製の半長靴に目をやった。

ユナはブラシを取り、慣れた手つきで靴の汚れを落としていく。トトはそういえば昨日は色々ありすぎて靴の手入れを忘れていたことを思い出しながら、その様子を見ていた。

「靴磨きは初めて?」

「いえ、…月に一度くらいは…やってます」

トトは一瞬口が滑りかけたがどうにか踏みとどまることが出来た。うっかりと国境警備隊の習慣で毎日汚れ落としをやっていることまで言ってしまうところだったと、冷や汗が出そうになる。

「なるほど、どうりで綺麗なわけだ。履きジワに汚れがほとんど無い。」

「結構長くやられてるんですか?靴磨きは?」

「街にも寄るかな?靴磨き以外なら包丁研ぎなんかもやってるよ。靴磨きは去年始めたばかり」

ユナはそう言いながらブラシを置いて指に布を巻き、汚れ落としをつけて、靴を拭いていく。

「トトさん、でしたっけ?何故この街に?貴方が来た道は、国境都市がある方角だと思っただけだ」

「え、ええつと……」

「別に言いたくないならそれでも構わないよ」

ユナはそういいながら、ブラシに靴墨を付けて靴に塗っていく。思わぬ質問にトトはどきりとした。

「…色々あって、民兵に追われる身になってしまった」

トトは言う。ユナは「ふうん?」と相槌を打ちながらブラシを置き、磨き用の布を取って靴を磨いていく。

「なるほど。でもどうして女の子を連れて逃げようと思ったの?」

「それは……」

「私が彼にそうするべきだと言った、彼を守るために私は此処に居る」
トトよりも先にステラが答えた。青い瞳がまっすぐユナを見つめている。

「君が?…君は彼の何?なんだか君たちに興味がわいてきた」

ユナはステラを見る。

トトは何を聞かれるのかと内心ではヒヤヒヤしていた。しかしユナはクスリと笑って布を置いた。

靴磨きが終わったらしく、トトの靴は綺麗に艶がかかっていた。

「でもまあ、君たちばかりが話すのは不公平か」

ユナはそう言ってブラシについた靴墨を落としながら話し始めた。

「僕は元々グランドセントラルの生まれなんだ。父さんが刃物研ぎの仕事をしていてね。それほど裕福ではなかったけど、いい家族に恵まれてたと思う。母さんと妹と、犬と暮らしてたんだ」

「……ご家族は？」

「… 君も一年前、この国で何が起こったかは分かるだろう？」

「あ、す、すみません…」

トトは軽く頭を下げる。

彼が何故謝ったのかがステラには分からなかった。

「一年前…？」

「そちらさんは知らないようだね。一年前、この国の軍隊… 王国軍と、民衆の間で内戦があったんだ。軍事政権のやり方に国の人達が決起して反乱を起こした『革命戦争』…。戦争の結果、軍は降伏の後解体され、革命政府が発足された…。そしてその戦争で戦った人達が、今の民兵達なんだ。」

ユナは語る。その顔はどこか悔しさを滲ませていた。

「僕は家族に買い出しを頼まれて商店街に居た時だった。突然どこかから鳴り響いた銃声で、皆パニックになった。僕は慌てて家に戻ろうとしてるときに革命軍の兵士達に捕まってさ。あいつ等に従わない奴らは、皆裏切り者扱いされた…」

トトもその話は聞いたことがあった。

軍事政権倒伏の為に革命軍に参加せよ。

戦わぬものに未来はない。

その言葉を合言葉に革命軍は勢力を拡大し、最終的には軍事政権を倒すことに成功した。

それはトトが国境警備隊に入隊したばかりの頃で、そのとき国境警

備隊の間では軍事政権側に加勢すべきという意見が大多数だった。

しかし王国軍側から国境警備隊に街から一步も動くなと、待機命令を出したのだ。

その結果、民兵隊からは「壁の向こうを見ながら亡命の機会を伺っていた腰抜け共」と揶揄され、国の都市の長の位もグレートウォールが最も低い扱いを受けることとなったのだ。

死んでいった首都防衛隊や国教騎士団の者たちからも、「国の有事に駆けつけなかった裏切者」だと思われても仕方がないことだったと嘆くものも多かったという話を、上官達から聞かされたことをトトは思い出していた。

「で、革命軍の兵士に捕まったところをアイツ…、アンドレに助けられてさ」

「アンドレさん？」

「そう、アイツさ。アイツに連れられて僕は街から街へ旅に連れまわされて…で、今に至るってわけ。」

「え？え、でもそれじゃご家族は…」

トトがそういうとユナは顔を下げた。

「アイツと逃げ回ってるときに、見ちゃったんだ。僕の家が燃えてるところ…あの日は店は休みで、皆家にいるときだったから…多分……」

「ご、ごめんなさい…」

「いいんだ。長々とすまなかったね…、これは君が話をしてくれたお礼だよ」

頭を下げるトトに、ユナは銀貨を二枚手渡した。

「え？でもこれ、僕が払ったやつ…」

「いらんないならいいんだけど」

ユナはそう言つて銀貨を戻そうとする。

「や、やっぱり受け取ります!!」

「うん、ありがとう。それで彼女に何かを買ってあげるといい」

ユナの言葉にトトは頷いた。

しかし少ししてユナは思い出したようにこう言った。

「あ、そういえば、彼女の名前を聞いてなかったね？」

「…ステラ。トトはそう呼んでくれた。だから私もそう名乗る。」

ステラは静かにそう言った。

眉一つ動かさないその表情は、まるで心理を掴まなかった。

~~~~~

「よおユナ、儲かってるかあ?」

少し離れたところからアンドレの声が聞こえてきたのは、トトが空模様を見ながら時計に目を落としてみると、あと15分で12時になるところだった。

トトは声のした方向に顔を向ける。

アンドレがガラクタにしか見えない物を両手に抱えながら歩いているのが見えた。

彼が着ていた雨合羽は黒い雨に打たれ、煤けたように黒く汚れてしまっている。

「まだ客足は全然だよ、よりにもよって雨と来てるからね。」

ユナは退屈そうにトトが座っていた椅子に腰掛けて、ナイフを研いでいた。

ステラはトトの横にしゃがみ込み、砥石の上を滑っている刃物を見ている。

「しかし妙な雨だ……」

「妙?」

ステラは車の中でガラクタを放り込んでいるアンドレの方を見た。

トトも雨のことに違和感を薄々感じてはいたので、彼の言葉が気になった。

「雨水が黒く濁っているうえに、止む様子が全くないんだ。道すがら人に話を聞いてみたらどうもここ二、三ヶ月は降りっぱなしの様だ。」  
「え？そんなに??」

トトもその言葉に疑問を隠せなかった。

彼の住む国境都市でも雨は降り続いて丸一日で何週間、まして何ヶ月も降り続けることなどあり得なかったからだ。

「でも… そんなに降ってるのに洪水にならないのは何故です??」

「さあてね。まったく… 雨の降らないところははないのかねえ?」

アンドレはトトの疑問に答えることなくタープの中で雨合羽を脱ぐとバサバサと大きく振って水気を飛ばした。

そして、水滴がトトやユナの顔に思い切り飛んできて、トトは顔を手で覆った。

「おい！ふぎけんオツサン!!」

「おっと、すまねえ。かかっちゃまったか」

ユナが声をあげながら立ち上がったのを見て、アンドレが驚く。

「どうやら何も考えずにやってしまったらしい。」

「顔にかかったぞ!!」

「お、おお、落ち着いてください…!」

トトは慌ててアンドレにくっついてかかるユナの腕を掴む。

ユナはトトに手を離させて椅子に座りなおすと、ポケットから煙草とマッチを出して火をつけて吸い始めた。

「おう、俺にも一本くれよ」

アンドレは手を出して煙草をねだるが、ユナはふんと鼻を鳴らして紫煙を燻らせ続けた。

くれそうにないと思ったアンドレはその手をポケットに突っ込んだ。  
だ。

ぱきりと何かが割れる音がすぐ後ろで聞こえたトトは何の音かと振り返る。

見るとステラがチョコレートを一口かじっていて、彼はその姿にどこか懐かしさを感じた。

~~~~~

12時になり駅の時計が鐘を鳴らす音と時を同じくして、アレスは戻ってきた。

戻ってきて一番に彼が伝えたのは、朗報だった。

「トト君、宿だが…条件付きで泊まれる場所を見つけたよ。」

「本当ですか？」

トトは胸をなでおろした。

「ああ、主人の好意でな。店の手伝いをしてくれれば、宿代は負けてくれるそうだ。」

できそうか？というアレスの問いにトトは迷ったが、頷いた。

しかしやはり不安もあった。

失敗したら追い出されないだろうか？あるいは顔を見られた時点
でばれてしまわないか？

トトの安心はすぐに新たな不安に変わった。

「大丈夫？」

ハツとして振り返ると、ステラが顔を覗き込んできた。

「だ、大丈夫だよ…大丈夫」

「トトに何があっても、守る。」

ステラの言葉にトトは彼女も不安なのだと思った。

そう、思いたかった。

なので彼女に向かって微笑んで、

「うん、ありがとう。」

と言ったのだった。

(続
く)

二章　　INDUSTRIAL METROPOL
ISS 3

十二時三十分

タープの中でユナはリンゴを齧り、ステラは瓶ジュースを飲み、その二人の間に挟まるようにトトはパンを小さくちぎって口に運んでいた。

アンドレは自身のバスのような四角い車のボンネットを開けエンジンに手を入れており、アレスがそれに手を貸していた。

二人の様子をタープの中の三人が眺めている形であった。

「あの人は車に詳しいの?」

「アンドレはいつもこうなんだ。車のことになると僕の話なんか聞きやしない」

「何故そんなにも車のことが大事なの? 私にはとてもぼろぼろに見える」

ステラは首を傾げたがユナも分からなかったようで、

「さあね」

とだけ言つてまたリンゴを一口齧った。

しかし種まで齧ってしまったらしく、ぺつと種を吐き出した。

「ユナあ! ちょっとエンジンかけてみてくれ!」

アンドレがユナに向かって言う。

ユナはそれを見てはあとため息を吐いて

「呼ばれた…、ちょっと行つてくるよ」

と言つて車に乗り込んだ。

重たいクランキング音が一回、二回、三回鳴ったところでエンジンがかかり、吹けあがる音と共にマフラーから出た煙が、車の真後ろにいた二人を襲った。

「うおほふっ!」

「…これは強烈だな」

アレスはエンジンをかけるときに少し離れていたが、やはり煙たかったらしく口元を覆った。

だがアンドレはもろに食らってしまったらしく何やら叫んでいる。

「ゴホッゴホー・エフツエホッ!」

アンドレが咳き込みながら煙から逃れようとトト達の方へ逃げてくる。

「おいおい。エンジンが快調だったのに随分苦しそうじゃないか」

ユナが笑いながら車から降りてアンドレに言った。

雨合羽を目の前でバサバサと振られた仕返しだろうかトトは思いながら、最後の一切れを口に入れた。

~~~~~

アレスの案内で着いて行った先に宿屋はあった。

少し路地に入ったところで、道路は車一台がなんとか通れるほどの広さしかない。

トトはバイクから降りて宿の看板を眺めていた。

少し古い石造りの建物で、外壁はこの雨のせいか黒い雨だれでひどく汚れているように見え、窓は水垢が酷かった。

この雨では外側を綺麗にすることは困難なのだろうとトトは思った。

「トト」

「え？ああ、なんでもないよ…」

ステラの呼びかけにトトは小さく首を振ってゴーグルを外す。

「なぜ彼らは着いてきたのかを聞きたかった。」

「えっ、あつ…」

トトは自分たちの後ろにいるアンドレとユナの姿を見て思わず声を漏らした。

ユナはとても機嫌が良いらしく、まるでたった今ポケットの中から金貨でも出てきたかのようにであった。

「いやあ宿がこんなところにあるなんてね。久しぶりにふかふかの



ベッドで眠れそうだな。」

ユナはしめしめといった面持ちで我先にと入っていった。アンドレは手に革製の旅行鞆を提げながら、やれやれといった様子でその後続いた。

「トト、店の主人は風変わりな人だ。あまり動揺するなよ?」

「?は、はい:。」

アレスが宿屋の扉を開けて中に入り、トトがそれに続いた。

ドアに取り付けられたベルが宿屋に來客を告げた。

「わあ:。」

中は広く、外と比べて清潔感のあるエントランスとフロントが出迎えた。

天井の照明にも埃が乗っておらず、その綺麗さにトトは思わず声を漏らす。

「あら:。」

フロントに立っていた男がこちらに気づき歩いてきた。

次の瞬間、トトは一瞬で凍りつくことになる。

「アレスキアン、おかえりなさい。ああ、くらそのコがトトちゃん?ンまア、可愛い顔してるわアくん♪」

とても恰幅の良い男性がまるで女性のようない高い声と言葉遣いでアレスに擦り寄った後、トトの方を見ると顔を近づけ、舐めまわすように覗き込んできたのだ。

トトは一瞬血の気が引くほどの悪寒で体を硬直させる。

ふと視線をやればアンドレとユナが椅子に座ってくたびれている。

どうやら自分たちが入ってくる前のわずかな時間のうちにこの男に生気を吸い取られたようだ、トトは察した。

「トト、彼:ではなくて彼女がここのオーナーの」

「ハアイ、アタシがエルンスト・クレーヴェルダールよオ。エルって呼んでくれて良いからネ♪」

エルンストはその筋肉質で引き締まった体を女性のように捻り、ウインクをして見せた。

トトはその瞬間、自分がとんでもない所へ来てしまったと認識した

のは言うまでもない。

「じゃあ、早速働いてもらおうわヨ。貴方が頑張った分のお給料を宿代として徴収するからそのつ・も・り・で・ネ♪」

「は、はひ……」

グイグイ来る彼…否、彼女の濃い顔にトトは思わず顔をひきつらせた。

その横でステラはトトが何に恐怖しているのかが分からない様子であった。

~~~~~

「はい、此処が貴方達の部屋」

エルンストがトトたちを連れて、使用人室と書かれた部屋に通した。

何故かアレスはアンドレと同室の鍵を渡され、トトとステラ、ユナの三人だけがフロントからさらに奥に続く廊下の奥の使用人室に案内されたのだ。

「あの泥棒め、僕の宿代を…」とユナが後ろでぶつぶつ言いながら着いてくるのは、トトの後ろを歩くステラにはあまり気分が良いものではなかったようで、彼女はトトの袖をつまみながら歩いた。

そうしてやってきた使用人室。

しかしそこは使用人室というよりは、半ば物置と化した空間であった。

部屋は少し埃っぽく、二段ベッドが一つあるものの敷布団だけで、毛布や何かは別で持つてくる必要があるそうだとトトは思った。

「バケツとモップと雑巾はここに置いてあるから、部屋は自分で掃除して使ってネ。1時間あげるからそれまでに仕事着に着替えてアタシのところに来ること。アタシはフロントにいるから。」

エルンストが掃除道具の置かれた場所を指さし、さらに時計を指さした。

時刻は一時を指す手前だった。

「もし時間を守らなかつたら、……そのときはファーストキスを頂くワ」

「ひい」

トトの隣にいたユナが小さく悲鳴を上げた。

しかしこんなガタイの良い男と唇を重ねるのはトトだって嫌だった。

エルンストは震える二人を見てクスリと笑いじゃあねと言って扉に手をかけたのを見て、トトが慌てて声をかける。

「あ、水はどこで組めばいいんでしょうか……？」

「部屋のお風呂があるじゃない」

エルンストはそう言って部屋をさっさと出て行った。

トトは外套と上着を脱いで、シャツの袖を捲ると、疲れた様子のユナを尻目にさっさとバケツを手に取り、風呂場の戸を開けた。

湿っぽい臭いが鼻について一瞬ひるんだが、それでも風呂場の蛇口を掴んでひねり、出てきた水をバケツに汲み始めた。

「トト」

声をかけられ振り返る。

ステラがこんなもの初めて見たと言いたげな表情で箒を持っている。

「私は何をすればいい？」

「あ、うーんと……じゃあ、窓を開けてくれる？開けたら箒の使い方教えるから」

「……わかった」

ステラはそう言って部屋の窓を開けていく。

「これは箒。あれはバケツ。あれは雑巾。」と言いながら。

「ほ、本当に掃除するのか？ココ？そんなに張り切ってやることないんじゃない……？」

ユナが水の入ったバケツを持って風呂場から出てきたトトを見て言った。

「でも、ここで宿の代金分を働いて稼がなきゃいけないんだ。言われたことはやらなきゃ。キスも嫌だしね」

「そ、そうだな…」

ユナは何とか自分を納得させ、ようやく箒を手を取った。

(続く)

二章　　INDUSTRIAL METROPOL
ISS 4

十三時十五分

アレスとアンドレは自分たちにあてられた部屋に荷物を置くなりさつさと街に繰り出し、雨にもかかわらず商店が並ぶ通りを十分少々歩いていった。

アンドレは傘をさし、アレスは黒い外套のフードを深く被っている。

通りは閑散としており、ほとんど人が出歩いていなかった。

「半年前ならまだ活気があったんだがな。この雨のせいかな」

「さあな、だがなんにせよ雨は気分がいいもんじゃない。黒い雨ともなれば尚更だろう」

二人はそんなやりとりをしながら時折目に入った歩いている人達に目をやった。

皆が皆、雨合羽や傘で濡れないようにして、そのどちらもが真っ黒く汚れてしまっている。

毎日振り続けて、ついに綺麗に手入れすることさえやめてしまったのだらう。

途中店から人が出てきたが、二人の姿を見るなり逃げるように早足で去っていった。

「…ともかく食事にしよう。何か食べておきたい」

「おっそうだな。そこに飯屋があるぞ。そこで食おう」

アレスの言葉にアンドレは頷いて、目に入った店の看板を指さした。

二人は歩くペースを崩さず扉を開け、滑るように店の中に入る。

カランカランとベルが軽快な音を響かせる。

しかし、店内は異様な空気だった。

店の中はアレスとアンドレを含めて見える限りで6人。

20人は入れそうな広さの空間に3人の客がバラバラの席で話もせずにいる空間を、傘を畳みながら見たアンドレの頭の中で閑古鳥の鳴き声が聞こえてくるほどであった。

カウンターで暇そうに立ってテレビを眺めていた店員が、二人を見るなり慌ててカウンターを拭き始めた。

店内は食事の音と、厨房から響く調理音と、カウンターの棚に置かれたテレビの音だけが響いているだけであった。

「空いてる席に適当に座ってくれ。見ての通りガラガラなんだ」

カウンターの店員が二人を見て気まずそうに言った。

アンドレはアレスと目を合わせると、誰一人座っていないカウンターに並んで座る。

「この店でオススメの料理は何があるんだ？」

アンドレは帽子を取って尋ねた。

アレスもフードを取り、テレビが置かれている棚を見上げる。

「どうやら古い映画が流れているようだった。」

「ミートパイとポークビーンズさ。最近じゃ頼む客も減ったがね」

「じゃあポークビーンズをくれ。アレスさんだっけか？アンタはなににする？」

「…私はミートパイでいい」

「ポークビーンズとミートパイだね」

店員はそういって店の奥に行く。

入れ替わりで別の店員が厨房から出てきて、新聞を読んでいる客のテーブルに料理を出してまた厨房に戻っていく。

「…アレ、なんて映画だろうな？」

アンドレはテレビを眺めて言った。

「さあ…、私も映画には疎いものでな」

アレスの言葉を聞いて、アンドレがアレスの方を見る。

そのままじっと見てくるアンドレにアレスは気味悪さを感じ、

「…なんだ？」と問いかける。

「…いや、アンタを昔何処かで見たような無いような気がしてな」
アンドレが答える。

「私もよく他人と間違われるよ」とアレスは言った。

「アンタみたいな顔が何人もいるのか…」

「ああ、不思議なことにな」

思わぬ返しに驚くアンドレにアレスは左手で髪をかきあげた。

何かを削り取ったような跡がついた眼帯が見え、降りた前髪ですぐにそれは隠れた。

程なくしてポークビーンズとミートパイがカウンターに並べられた。

アレスとアンドレはそれぞれフォークを手に取り一口頬張った。

「…ん、美味しい」

「俺のは、そうでもないな…」

二人の感想は別々だった。

アレスはそのままミートパイを食べ続けたが、アンドレはやや渋った。

そうしてアンドレは食べながら時折映画に目をやりつつ、周りのほとんど動きの無い客と外の様子を見ていた。

「カランカラン」

ドアの開く音と、ベルの音。

来客の音にアンドレは入口の方を見る。

やってきたのは、女性だった。

黒いドレスに二つ結びの黒い巻き髪、整った顔立ちに緑色の瞳が際立って見えた。

女性は傘を畳みながら窓際の席に座り、雨垂れで黒く汚れ切った窓越しに通りを眺めた。

アレスは彼女の方を見ようとしなない。

よっほどミートパイが美味しいのだと、アンドレは思った。

そんな彼の視線に知ってか知らずか、女性は外を見たまま口を開いてこう言った。

「酷い雨ね。街に来た時から思っていたけれど」

「……」

アレスは手を止める。アンドレは誰に向かって話しているのか分

からずに、窓の外を眺める彼女を見て呆然とした。

そして彼女はゆっくりと首を回して、カウンターに座るアレスとアンドレの方を見た。

アンドレは目を合わせまいとしたが彼女の緑色の瞳を見た瞬間、その強烈な殺気に思わず息を呑んだ。ひゅつと小さく声を漏らし、彼女から目を離せない。

(目を逸らせば、殺される…！)

瞬時にそう判断し、椅子からゆっくりと立ち上がりこちらに近づいてくる彼女以外を見ることができずにその緑色の瞳を見続けるアンドレ。

そうして女性は口を開いた。

「ねえ、この街に二人の子供が来たと思うのだけれど…」

一歩、また一歩と近づくと足音に店内が支配される。

アンドレまであと5歩という距離まで近づいたその時だった。

「ガシャン！」

突然陶器か何かの割れる音に女性は音の方を見た。

それと同時に、アンドレは拘束が解かれたように体が軽くなり、彼女と同じ場所を見た。

アンドレの隣、アレスの足の近くで、水が入っていたであろうグラスが割れていた。

「すまない、グラスが割れた。弁償させてくれ」

アレスは落ち着いた様子で椅子から立ち上がり店の人間に金貨を二枚手渡した。

そしてフードを被りなおし、女性の方へ体を向けてこう言った。

「それで？この街に来たばかりのさすらい人の我々に何の御用ですかな？」

「この街に来た子供が二人ほどいたと思うの。国境警備兵の服を着ているから、目立つと思うわ」

女性はアレスに動じることなく答える。

彼女からはもう先ほどの殺気は感じられなかった。

「そうでしたか。ですが私たちは知りません。何故国境警備兵なんか

を追うのです？プルートともあろう御方が」

アンドレはその名前を聞いて驚きを隠せなかった。

民衆たちを導き、政権を握っていた王国軍を討ち倒し、革命軍を勝利へと導いた12人の英傑ゾディアック

その7番の地位に就いているのが、目の前にいる女性だということ
がにわかには信じがたかったのだ。

プルート、誰であろうと容赦をしない冷酷な戦いぶりから死神
(デッドマスター)と呼ばれている存在が自分よりも若い、それも女性
であることが。

(話には聞いていたが…まさか、まだ子供じゃないか…！)

「貴方に答える義務はないわ。知らないのであれば此処にはもう用は
無い」

プルートと呼ばれた女性はアレスにそう言い切ると踵を返して店
を出ようと扉まで歩き手をかけた。

そして去り際に、

「もし見かけたなら民兵に迷わず突き出してくださいね…でないと、
貴方達も殺すわ」

と言って店の外に消えていった。

「… ったく、不気味だぜ此処は…」

アンドレは肩の力を抜くなり悪態を吐いた。

「すまないね…いっどこで民兵が見張っているか分からないから、私
たちも君達の肩を持ってないんだ…」

「なるほど、なら我々も引き上げることにしよう。ここのミートパイ
は美味かったよ」

店員の言葉にアレスはそう言って店を出ていく。アンドレはそれ
を見て慌てて代金を支払うとその後を追った。

~~~~~

十四時十分

「あ、おかえりなさいアレスさん、アンドレさん」

二人が宿屋に戻ると、シャツとネクタイ姿のトトが出迎えた。

エプロンを巻き、それなりに様になっているなどアレスは思った。

「なかなか様になってるじゃないか?」

「そうでしょオ? かんわいいわよねエ?」

アンドレがそういうとその背後から現れたエルンストがトトにウインクをした。

「あ、あはは…」

トトが苦笑いをしたのは勿論だが、アンドレはもはや苦笑いどころではなかった。

アレスに至っては気配を察した直後に右に二歩ほど逃げている。

「でもアタシ、アナタみたいな男も好きヨ?」

「あはははは…そりやどうも」

アンドレは明後日の方向を見ながら返事をするが、目も顔も笑ってはいなかった。

そんな会話をしていると、トトと同じデザインのエプロンをしたユナとステラがフロントすぐの場所にある部屋から出てきた。

ユナはバケツとモップを、ステラはシーツを抱えていたのを見て部屋の掃除が終わったのだろう。

「二階の言われた部屋の掃除は全部終わりましたよ。あと何部屋ありましたっけ?」

ユナがエルンストを見て言った。

その態度を見てあまり話をしたくないんだろうなとアンドレは思った。

アンドレ自身も嫌なのだが。

「あとは二階が2部屋だけよオ、ユナちゃん」

「うえ…、その“ちゃん”って付けるのやめてもらっていいですか?」

「え〜? いいじゃない減るものじゃない〜」

エルンストの言葉にユナは呆れたようにため息をついて二階へ上がっていった。

「これはどこに置いていったらいい?」

ステラがエルンストにシーツを見せて言った。

「それはランドリーに持って行って、貴方達の部屋の前よ。」

「…?ラン…??」

「ああつ、ぼ、僕も一緒に行くから…」

首を傾げるステラを見たトトはすぐに声をあげた。

ステラは小さく頷いてトトの後に続く。

「皆良く出来た子達ねエ」

「エルンストさん、此処に民兵かえらく怖い雰囲気の子が来なかったか?」

「いいえ?どうして?」

アレスの問いに彼は不思議そうな顔をした。

「いや何、あまり彼らに知られたくないことなのでな。特にトトのことは。すまないが民兵達が来てもシラを切ってくれ」

「大丈夫ヨ、こんな寂れた宿屋に来る民兵なんかいないわ。娼婦を連れてくることすら無いのよ?」

エルンストは笑って答える。

だろうなとアンドレが思う横で、アレスは嫌な予感を拭えなかった。

だがその前からアンドレは、エルンストの手がずっと自分の肩の上に乗っていることに嫌な予感しか感じていなかったのだった。

(続く)

二章　　INDUSTRIAL METROPOL  
ISS 5

グランドセントラルの王城内、その一室にある円卓に並ぶ13の席。

その席にはそれぞれ0から12と数字が割り振られている。そしてそれはまばらに埋まっており、6人の男女が顔を合わせていた。

内五人の姿は、異形であった。

4の席には頭に一对の角が生えた女性が、10の席には翼が生えた老人が、5の席にはすぐ隣の女性よりも小さな角の生えた女性がうつむいたまま、涙をずっと流しており、

その隣の6の席には、巨大な腕を床に着けた状態で椅子に腰掛けている小麦色の肌の少女がいた。

8の席には白い軍服に身を包んだ男が、

そして1の席には白い髪を二つに結んだ少女が自らの前に幾枚もある便箋の封を乱雑に開けて中身を読むなり、退屈そうに辺りに散らしていた。

そこに一人の男が現れ、0の席に座り足を組んだ。

整えられた髪に、卸したてのようにシワ一つ無い服を着ている。

「代表、そろそろお話されても良いでしょう？何故民兵や我々を使つてまで探させるのです？それもただの国境警備兵を」

8の席に座る軍服の男が上座で足を組む男の目を見て問いかけた。

0の席の男は答えない。

「私は既に複数名の兵を失っているとそう聞いておりますが？他の兵士にはどうご説明なさるおつもりですか？」

「あら？貴方が私の兵の心配をするのグリフィン？」

4の席の女性が噛み付く様に会話を遮る。

グリフィンと呼ばれた男は女性を睨みつける。

「随分反抗的な眼ね……、下位の分際で私の兵士の心配だけじゃなく私を睨むほど偉くなったのね？」

女性が立ち上がると右の瞳に鮮血のような真紅の炎が灯り、振り上げた右手に巨大な鋸の様な剣を顕現させ握るや否や床に向けて降り下ろし、轟音を響かせた。

その切先は床にめり込み、亀裂を走らせる。

グリフィンは動じることなく女性を見る。

1の席の少女はその様子に目もくれずに手紙を投げ捨て、また違う便箋を乱雑に開け始めた。

「よさないかヒュドラ。女帝ともあろう君のすべき振る舞いではないぞ？」

10の席に座る老人が静かに言う。ヒュドラと呼ばれた女性はふんと鼻を鳴らして剣を下げ、席に座りなおした。それを見て老人は更にこう続けた。

「それだだグリフィン、君の求める答えはキング・キルに問うものではないだろう？なあ、フリーアエ？」

老人は5の席に座る女性に問いかける。

その視線をグリフィンも追う。

フリーアエと呼ばれたその女性は涙に濡れた顔を上げ、口を開いた。「既にプルートとケルベロスが動いている。彼は今ルールに居て、明日グランドセントラルへ向けて発つ。」

「そんなことどうして分かるのよ？貴女未来でも見てるわけ？」

ヒュドラは怪訝そうにフリーアエを見つめる。

1の席の少女がまた一枚手紙を床に投げ捨てた。

「その通りだ。彼女には未来が見える。君が納得しないこともだ。だが此処で君が納得するしないはこの場において重要ではない」

老人はヒュドラにそう諭し、さらにこう続けた。

「重要なのは……、プルートとケルベロスに、キング・キルが委ねるどうかだ。……如何なさいますかな？キング」

老人は0の席に座り、キング・キルと呼んだ男の目を見た。

「……二人が良い結果を運んでくることが私は期待している。君達も彼女たちの結果を待つていたまえ」

キング・キルはそう言つて席を立ち、その場を去つた。

「こういうことだ女帝閣下。では私も失礼するよ……」

老人はキング・キルに続き、フリーアエがそのすぐ後ろを歩いて行つた。

「……覚えておきなさいグリフィン、既に死んだかつての王に未だに忠義を尽くしているアンタ如きの助けも氣遣いなど、私には必要無い」ヒュドラはグリフィンにそう言うと言つて黒い影になつて消え、それを見ていた6の席に座る少女は立ち上がり、その両腕を引きずりながら去つた。

そうして次々に去つていき、1の席に座る少女のみが残つた。

「愛しき私の歌姫よ……、貴方は夜空を照らす月の様に輝き……、ふふっ、ふふふふ……」

少女はクスクスと笑いながら読み上げた手紙を床に落とすと、立ち上がつて円卓に飛び乗り、便箋の山を蹴散らすとくるくると体を回して踊り始めた。

「ふふふふ……あはは、あはははははは……」

彼女の笑い声は円卓の置かれた部屋から、まるで王城内に響き渡らせているかのようであつた。

~~~~~

その日の夜、トトは夢を見た。

目を開けると、広い庭の様な場所に座つていた。

手入れされている綺麗な庭で、トトは背中を大きな榆の木に預けている。

「トト」

名前を呼ばれ、トトは声のした方へ顔を向ける。

小さな女の子がそこには居た。

黒い髪に、青い瞳で、黒いドレスを着た女の子だった。

ステラによく似ているが、凄く背が小さい。

3歳ぐらいの子供の背丈ほどしか無かった。

「それはなに？」

女の子はトトに歩み寄って問いかける。

トトはそこで自分がチョコレートを持っていることに気が付く。

「チョコレート。…食べる？」

トトはチョコレートを差し出す。

女の子は不思議そうに受け取り、少し眺めてから口に運んだ。

「…おいしい。」

女の子が微笑むのを見てトトも頬が緩むが、そんな自分たちを見つめる一人の女性がいることに気が付いた。

その女性はトトと目が合うとそのまま二人の前まで近づいてきた。

白い日傘をさし、白い髪と赤い瞳、白いドレスを身に纏った女性は、座っていたからなのか、はたまたトトの背が小さいからなのか、背が高く感じられた。

「貴女は誰？」

トトの問いに、女性は静かに微笑み口を小さく開いた。

「私は」

~~~~~

「う…」

右肩の重いものが乗ったような感覚にトトは瞼を開ける。

腕と肩に重くのしかかる物を見るためにトトは体を起こす。

重い、右腕の自由が利かない。

左手で目をこすり、体に乗ったものに焦点を合わせる。

「わっ」

ステラだ。

トトの腕と右の肩、どころか胸に頭を置いていたのだ。

思わず小さく悲鳴を上げたが、運よくステラが起きることは無く、小さな寝息を立てて、長い睫毛を揺らしている。

トトは起こさないように彼女の頭を枕に移してベッドから起きて肩を回す。

そこで洗面所の戸が少し空いていて、光が漏れていることに気づいた。

(電気を消し忘れていたかな…?)

立ち上がり、扉を開ける。

「っ!?!」

「…え?」

バスタブに腰掛け、タオルで体を隠すユナの姿がそこにはあった。

扉を開けるトトに驚き、咄嗟に体が動いたと言わんばかりにバスオルと両手で胸元を隠している。

その顔はみるみるうちに顔を赤くしていき、

「見てないで早く出るよお!!」

「わわわわっ!?!?ごめん、なさいっつー!」

赤面したユナの叫びに同じぐらい顔を赤くしたトトは慌てて扉を閉め、背を預けたかと思えばずると崩れ落ちるのだった。

そして彼は瞬時に理解した。理解してしまった。

ユナは、女の子だったのだ。

「…っトト…っ」

ステラがトトを見つめている。どうやら起きてしまったらしい。

「あ、ああ…起こしちゃった?ごめん…」

トトはステラの方を一瞬見るが、彼女の肢体も見えてしまっている彼は、せつかく忘れかけていたのにまた思い出してしまい、再び頭を抱えることとなった。

時計を見ると朝の6時、グラントセントラルに向かう為には民兵達の見張りを避けながらグラントセントラルを目指す必要がある。



トトは深呼吸をして、両手でぱちんと頬を叩いた。

~~~~~

七時

アンドレとユナはトトよりも早くホテルを後にしたことを二人が知ったのは、朝食を食べているときにアレスの口からそう聞かされた時であった。

あんなことがあれば無理もないと、トトはばつが悪い思いだった。食事を終えたトトは身支度を済ませ、フロントでエルンストと話をしていた。

一日だけとはいえ、自分たちが働いた手間賃で身を預けてくれたことへの例の為だ。

「お世話になりました。またいつか機会があれば寄らせていただきませう」

「いやあん、ホントに育ちのいい子だコト。トト君は将来イイ男になると思うワ」

「あ、あはは…ありがとうございます…」

エルンストの言葉に苦笑するトト。

やはりこの人の振る舞いは苦手だと、トトは思った。

「トト、アレスが待ってる」

「あ、うん。それではまた」

トトは改めて深く頭を下げて外套のフードを被ると、扉に手をかけて出ていった。

エルンストはしばらく出ていった後も扉を見つめ、そして

「ナナの言うことが間違っていないなければ、あの子が……」
とつぶやいた。

~~~~~

外ではやはり黒い雨が降り続いており、トトたちは濡れながらもグランドセントラルへ向け、バイクを走らせる。

そんなときであった。

「見ツケター！」

「見ツケター！見ツケター!!」

後ろから大きな声が聞こえ、トトは振り返る。

そこには巨大な頭蓋骨と思しき物が二つ、浮遊して二台のバイクを追いかけていた。

その頭蓋骨には緑色の瞳が燃える炎のようにゆらめきながら、トトを見つめている。

そしてその間には背中に一对の翼と角を生やし、右手に巨大な鎌を持った女性が空を飛んでこちらを見つめていた。

「プルート……!」

アレスがつぶやく。

しかし彼女が見ているのは、アレスでも、トトでもなかった。

「会いたかったわ、ステラ」

「ステラ……?」

プルトの言葉にトトは耳を疑う。

「トト！飛ばせ！振り切るぞ!!」

アレスの声を聞き、トトは慌てて前を向き直してアクセルを開けた。

瞬間、バイクの前輪が吹き飛んで、二人はバイクから投げ出された。

「うわあああああ?!?」

「なっ!?!」

アレスはそれに気づき、ブレーキを掛けるが間に合わない

トトは地面にぶつかる寸前、ステラがトトを抱きかかえる形で身を翻して、滑りながら着地したことで、大事には至らなかった。

前輪と運転手を失ったバイクはその残骸と共に道路の上を転がり、けたたましい音を立てる。

プルートはゆっくりと地面に足を着け、ドレスの裾を摘んで礼をする。

「初めまして、と言っておきましょう。私はゾディアックの7番位「プルート」……そうね……、デッドマスターと言えば、聞き馴染みがおありかしら？」

ゾディアック、デッドマスター、その言葉を聞いたトトは狼狽えた。勝てない。逃げられないと瞬間に思った。

逃げて祖母の言ったとおりに動くという行為そのものが間違いだったのかもしれないと、

自分の判断の甘さ、愚かさを悟った。

「トト、大丈夫。貴方は絶対に守る」

ステラはプルートを見据えたまま、トトに向けてそう言った。

プルートは鎌を二、三度振ってみせると、

「心配せずとも、その子は貴女を殺してからいただくことにするわ。ステラ」

そう言ったと同時にステラめがけて斬りかかる。

ステラはトトを押し飛ばすと剣を抜き、一撃を受け止める。

火花が散り、二人の距離が縮まる。

トトはゴロゴロと転がり、ステラの方を一度見る。

一度距離が開くが、またすぐに互いの刃がぶつかり合い火花を散らす。

トトはステラを助けたかったが、巨大な鎌を管弦楽団の指揮者のタクトのように振るう者と戦う術も知恵もトトには無かった。

アレスが彼のすぐ横にバイクを止め、呼びかける。

「トト、乗れ！逃げるぞ!!」

アレスがトトに呼びかける。

「で、でもステラが…」

「今の君に何ができる？いいから乗るんだ!!」

プルートはステラを押し返し、更に攻勢を続ける。

トトは迷ったがすぐにアレスの後ろに乗り、すぐさまバイクが発進する。

「逃げられはしないわ」

プルートのそう言うつてステラの服を掴んで思い切り上へ投げ飛ばすと二体の頭蓋骨に手で合図を出し、二人を追跡させる。

だが、ステラは大砲を召喚し、二体の頭蓋骨に狙いを定めて砲弾を発射させた。

凄まじい連射で撃ち出されたが、一体の頭を半分と周囲の建物を破壊するだけに留まった。

「あらあら、まだあの子の心配をしている余裕があるなんてね？」

プルートは屋根に着地したステラを見る。

左手の大砲を自らに向けられていても、不敵は微笑は消えない。

「私はトトを守るために此処に居る。だから貴女も私が止める」

「私……ふふ、あははははははは！私じゃないわ、私達よ！」

プルートはステラの言葉を笑い飛ばす。

ステラは砲弾を撃ち出し、砲弾は建物の壁や石造りの道路舗装と抉り土煙を作る。

プルートはそれを振り払うも、既にステラの姿はそこにはなく、

既に屋根伝いにあの一対の頭蓋骨から逃げるトトたちに向かつて走っていく後ろ姿が一瞬見えただけであった。

「…チツ、ケルベロスは何をやってるのかしら…？まあいいわ、楽しくやりましたよう、ステラ？」

(続く)

二章 　　INDUSTRIAL METROPOL  
IS 　　6

ステラとプルートの戦闘は、近くにいた住人を戦々恐々させるには十分なもので、巻きあがる噴煙とプルートの姿に慌てて逃げ出す者達で辺りは一気に騒がしくなった。

「逃がさないわよ」

逃げ惑う人々に目もくれることなくその場からふわりと浮き上がり、翼を羽ばたかせて飛んで行つた。

アンドレ達は自身の真上を飛んでいくその姿を走る車から見ていた。

「おいおいおいおい、なんかヤバいんじゃないかあ？」

「何が何だか分かんないけど、さっきのアレ、何か探してる感じしなかったか？」

ボヤクアンドレにユナが問いかける。

アンドレは啞えていた煙草に火を点け、一息吐くと

「どれ、ちよつとばかし飛ばすから捕まつとけよ！」

そうユナに言い放つと同時に思い切りアクセルを踏み込んだ。

~~~~~

トトが最初にバイクの前輪を吹き飛ばされた場所の、進行方向から見て2時の方角、

距離にして1000メートルも先の場所で、教会の鐘楼を陣取り、自身の身の丈の倍はある巨大な狙撃銃を構える左右で色の違う瞳を持つ少女の姿があった。

その鐘楼の屋根には鐘よりも一回り大きな、三つの頭を持つ巨大な犬のような怪物が唸り声をあげながら6つの目と耳で何かを探している。

少女の記憶ではこの生き物は「ケルベロス」と呼称される怪物の姿にとってもよく似ていた。

「……、……いた。ここからでは狙えない」

「グルル……」

「アジーン、頼める？」

「グアウツ！」

アジーンと呼ばれたケルベロスは少女の言葉に二つ返事の様に見えるほど大きく、そして素早い跳躍で屋根伝いに少女の視線の先へ向かっていった。

~~~~~

街道を走り抜けるバイクの上で、トトは後ろを確認する。

ステラが追いついてくることを願いながら。

「……ッ!?何か来た!」

「何!?もう追いつかれたのか!?!」

「いや、アレは……!」

祖父に渡された拳銃を手に、何が起きてもいいようにしていたトトだったが、現実はその予想の遥か上を行っていた。

自分たちよりも巨大な「何か」が、建物の屋根伝いに追いかけてきたのだ。

トトはその怪物の姿に覚えがあった。

まだ小さい頃、祖父母の家の本の一冊に載っていた地獄に棲まう番犬

「……ケルベロス!?!」

「何!?!」

トトの言葉にアレスも驚いた。

ケルベロスは想像上の生物のほずで、現実が存在するわけが無いのだ。

それが例えクリーチャーが国中で問題となつていゝ昨今の情勢だとしても、ケルベロスが存在する話は2人とも人伝にさゝえ聞いたこともなかつた。

ケルベロスはその3つの頭でバイクに狙いを定めると、そこへ目掛けて飛びかかる。

アレスがバイクの進路を曲げ、歩道に乗り上げたことでその牙からは逃れた。

トトは片手で拳銃を一発撃つが、反動で弾道が逸れてしまい、弾丸はケルベロスの真ん中の頭の右耳を掠めた。

しかしケルベロスとは距離をとることが出来た。

雨で手を滑らせて落とさぬように銃を握り直す。

「このまま振り切るぞ！ 掴まれ！」

アレスはバイクの速度を上げる。

トトはアレスの肩に掴み、後ろを見る。やはり三頭の怪物は追いかけてくる。

取り壊された建物の前を通り過ぎ、トトの目に教会の鐘楼が遠くに見える瞬間だった。

トトのすぐ横、何かが空を切る音がしたと同時に思ひ違ふほどの時間差で、取り壊された建物の、反対側の建物が轟音を立てて倒壊し始めた。

「狙撃か……！」

アレスはそう呟きながらもバイクの速度は緩めずに走らせる。

トトはさつき自分のバイクの前輪が吹き飛んだのは、今建物を破壊してみせた人がやったことを確信した。

アレスは恐らく狙つたのは自分であること、相手はトト以外の命に關してはどうでもいいのだと確信した。

自分が誰かのかさゝえ無関係な程にトトという少年の身柄が最優先なのだ。

「居ター！ 居ター！」

「捕マエル！捕マエル！」

無機質な声にトトは空を見上げる。

「やっきの……！」

プルートに随伴していた二つの頭蓋骨は、トトを見つめるなり声をあげて追跡を再開する。

片一方がどういうわけか頭の半分を割られていて、緑色の光る粒子を放出させている。

ステラと戦っている最中にやられたのだろうか？とまで考えたがその先を考える猶予はトトには残っていなかった。

二体の異形な存在はその大きな口を開け、光らせた両目とあふれ出る粒子と同じ色の光弾を撃ちだしてきたからだ。

「アレスさん！」

「分かってる！！捕まってる！！」

アレスは飛んでくる光弾を右に左にかわしていく。

光弾は地面や建物を抉り、その破片と爆風の熱が二人を襲う。

トトはあることに気が付いてもう一度振り返り、あの頭蓋骨の割れている方の姿を確認した。

（やっぱりだ……！）

その頭蓋骨は頭を半分砕かれながらも口から光弾を吐き出しているが、

ほぼ全体に走った亀裂から光が漏れ出しているのだ。

特に右目の下が特に光が強くなっていて、トトにはまるで目が三つあるように思わせた。

トトは拳銃を構え、その場所へ狙いを定めて発砲する。

しかし命中したものの、怯むことは無かった。

だが僅かながらその亀裂を広げることができた。

立て続けにもう二発、三発、四発。

遂に亀裂は限界を迎え、床に落としたガラスの様に大きな音を立てて頭の上半分が砕け散った。

「やった……！」

まるで魂が抜け落ちるように緑色に光る塊のような物体が頭蓋骨



から離れ宿主を失い、だらりと口をあけた頭の下半分は地面に墜落し激しい音を立てて転がった。

そしてその光の塊は二人の頭上を跨ぐように飛んでいき、進行方向の道路に着弾し強い閃光となってアレスの目を襲った。

「うっ!!」

アレスはバランスを崩して転倒し、拳銃を持っていた分片手で掴まらざるを得なかったトトは引き剥がされるように空中へ放り出され、次にトトを襲ったのは地面に体を打ち付ける衝撃ではなく、

ドボンという音と地面より柔らかく、全身を包み込む冷たい感覚、そして、息の出来ぬ水の世界だった。

~~~~~

その強い閃光はステラにも見え、彼女の目にはバイクから放り出されていくトトがハッキリと見えた。

「トト!!」

ステラは屋根を蹴って飛ぶが、何者かに勢いよく足を掴まれる。

見るとプルートの足首を掴み、捕まえたと言わんばかりの笑みを浮かべている。

「行かせないわよ、ステラ。」

「…ッ!!」

ステラは刀を振るおうとするも、プルートはステラが飛んだ方向とは逆の方向に投げ飛ばし、唇をぺろりと舐めると翼を羽ばたかせて突進し、その首を刈り取ろうと大きく振るった。

しかし、ステラは左手に大砲を呼び寄せてその一撃を防ぎ、押しつける剣も大砲も捨ててプルートに掴みかかり、空中にもかかわらず自身の体ごとグルグルと回転させ、そのまま彼女を軸に、トトが落ちた穴目掛けて自分の体を飛ばして見せた。

「トト!!」

穴の外からでも分かるほどの激流に向かってステラは飛び込み、水しぶきは一瞬にして掻き消された。

そして閃光で目をくらまされたトトは水面を見つけることができないまま水流に揉まれ、

息も出来ず、ついに意識を失った。

二章 Industrial Metropolis 了

三章 Under Water Wandering
r) 1

「トト!!」

アレスは立ち上がりトトを探すが、道路に出来た巨大な穴とその穴の中で流れる水の音が響くばかりで、彼の返答はなかった。

さっきの頭蓋骨の光弾が地下に作られた水路まで道路を深く抉ったのだ。

それで出来た穴に転落したのだろう。

アレスは穴の手前に落ちていた彼の拳銃を拾いあげる。弾は一発も残っていないかった。

「へえ…、スカルヘッドを一体やったのね」

「!」

プルトの声にアレスは振り返る。

彼の前に姿を見せた彼女は鎌を携えて、スカルヘッドと呼んだ頭蓋骨の頬を撫でていた。

「ステラもその穴に落ちていった様だし…：私のやることは無くなってしまったわねえ」

プルトが退屈そうに呟いて、鎌を二度振るうと

「貴方、どこかで会ったような気がするわ？名前を聞いてもよろしくて?」

その問いかけに、アレスは答える。

「アレスだ」

「アレス…?ッ!」

名前を聞いたプルトは突如頭を抑え、その表情を歪めた。

「…?」

思わぬ様子の変化にアレスは驚きを隠せなかった。

それはスカルヘッドというあの頭蓋骨も同じだったようで、狼狽え

るかのような素振りを見せる。

「嘘だ!!あの男は…あの人は…!!」

プルートの声を震わせる。

それは今にも泣き出しそうなほどに。

「あの人は…、死んだはずだもの…。」

そう言っただけで彼女は翼を羽ばたかせ、雨の降る空に向かって飛び上がり、スカルヘッドと共に何処かへと去っていった。

「なんだつたんだ…?」

アレスはつぶやく。

しかし彼にはもう考える時間は無いようだった。

「そこを動くな!!」

民兵達がこちらに向かってきたのだ。

アレスは振り返るが既に回り込まれていたらしく、突撃銃を向けてきている。

あれほどの騒ぎだ。むしろ対応が遅すぎるぐらいだとアレスは思った。

しかし完全に銃や剣を抜くタイミングを逸してしまい、抵抗する手段を失った。

(どうする!?)

アレスは此処をどう切り抜けるか思考を張り巡らせるが、

「うわあああああ!?!」

突然背後から聞こえた叫び声によってそれどころでは無くなってしまった。

立て続けに銃声と、目の前にいた兵達も怯えたようにアレスの後ろにいるナニカに向けて銃を撃ち始める。

アレスは咄嗟に伏せ、何事かと後ろを見た。

陥没した道路の穴の中から、巨大な蜥蜴、正確には鱈のような何かの後ろにいた民兵の方へ頭を向け、左右に大きく振りながら彼らを薙ぎ払っている。

放たれた銃弾の雨は鱗によって弾かれ、全く意に介さずにその巨大

な口で人間を屠りはじめたのだ。

「なんなんだコイツ!!」

「負傷者を連れて引け!早く!!」

民兵の叫びと断末魔が混ざり、その場が地獄と化した。

アレスは這って建物の壁に背中を張り付けて、建物と建物の間の狭い路地に体を滑り込ませた。

そうして銃を抜き、ボルトハンドルを引いて弾丸を装填する。

ライフルの銃身を短く切り詰め、拳銃の様に加工がなされている変わった銃だ。

アレスはそのまま路地の向こう側へ向かって壁伝いに走り出す。

「ま、待て!!」

「奴は後だ!今はここから離れるぞ!」

民兵の一人がアレスに気づくも、怪物を前に追跡を諦めざるを得なかった。

穴の中から這い出てきた怪物は自らが踏み殺した人間を頭から丸呑みにすると、満足したのか再び穴の中の水流の中へ消えていった。

アレスは路地の出口から街道を見るために僅かに顔を出す。

「いいか!黒服だ!黒服の男を探せ!」

ちやうど民兵達が走っていくところだったらしく慌てて身を隠す。

足音が遠のいたことを確認して再び顔を出してみると、見覚えのある車が一台見えた。

その車内でアンドレがアレスの顔を見るなり手招きを始める。

どうやら中に入れということらしい。

アレスは兵士が居ないことを確認し走って車に乗り込もうとした。が、視界の端に何かが飛び込んできて、アレスは咄嗟に横に飛んでそれを視界に捉えた。

「グルルルルル…」

ケルベロスだ。

真ん中の頭の右耳の先端が掛けており、そこから血が出ているのか、耳の毛が赤く滲んでいる。

「クソツ!こんなときに…!」

民兵達が振り向きこちらに走ってくるのが、車の中にいたアンドレやユナからも見えた。

アレスはケルベロスに銃を向けた。三頭の目が戦闘態勢に入ったことを本能で理解させる。

「アジーン・ストップ！」

しかし突如響いた少女の声に、アレスも、そしてケルベロスも驚いた。

そしてアレスとケルベロスの間割って入るかのように、一人の少女が地面に降り立った。

恐らくはステラの様に屋根伝いに飛んでここまでやってきたのだ。体の倍はある巨大な狙撃銃を肩に乗せて。

肩までしかない短い髪に右目には眼帯を着け、大きな耳あてで両耳を覆っている。

その少女は表情一つ変えることなくその紫の瞳でアレスを一瞥すると、ケルベロスの方を向いた。

それはまるでアレスに「死にたくなければ黙ってみていろ」とでも言うかのようなだった。

「アジーン、この人は狙っている人じゃない。だから、捕まえても意味はない。食べるのもダメ。わかった？」

「グルルルル…」

アジーンと呼ばれたケルベロスは少女の言葉を理解したのか、一度だけ頷いた。

少女は頭を垂れた三頭の怪物に跨ると、アレスを見て口を開いた。

「貴方があの子を庇おうが、守ろうがどうでもいい。でも、私たちの邪魔をするなら…次は殺すわ」

そう言い残すと彼女と怪物はさっと高い屋根まで一気に飛び上がり、去っていった。

「おいお前！そこを動くな！車に乗ってるお前たちも降りろ！」

民兵達が車とアレスを取り囲む。

アレスは銃を地面に置いた。

「すまないが、私はここで捕まるわけにはいかない」

アレスは手を上げて後ろに回し外套の内側から二丁の銃を引き抜く。

その銃を見た兵士たちが一瞬狼狽えた。

その銃は擲弾発射銃と呼ばれる着弾と同時に爆発する特殊な弾薬を発射するものだったのだ。

アレスは躊躇うことなく引き金を引く。

「シユポツ」

砲撃音と同時に通常のライフル弾よりも大きい弾が発射され、それを見た兵士たちが一斉に散り散りになる。

ゆるい放物線を描いて地面に当たる刹那、爆発し、音を街道に響かせた。

逃げ遅れた兵士の何人かが爆発の衝撃波で吹き飛ばされる。

アレスは素早く次弾を装填し、さらに二発、四発撃ち、彼らを追い払ったところで銃を拾い上げて車に乗り込む。

「まさかまた出会えるとはな」

「アンタを助けようと思ったのが間違いだったんじゃないかと疑いだしてるところさ…おいオツサン！いつまでビビってんだ！さつさと車出せよ!!」

ユナが頭を押さええながら身を低くしているアンドレの座る座席を蹴り上げる。

アンドレは飛び起きるなり慌てて車を発進させた。

「いやあ、派手にやったな。ところであの少年は？」

「トトは…地下水路に落ちた」

「えっ…それ、大丈夫なの??」

「分からない…」

アレスはうなだれる。

先ほど見た怪物を思い出して、トトが生きている可能性を感じられなかったのだろう。

しかし、アレスはあることを思い出した。

プルートがアレスに向かって言った言葉。

「いや…、たしかステラも穴に落ちたと、ゲッドマスターが言っていた

ぞ……」

「ステラ？あの子が？」

「はは、それなら大丈夫だな。って、んなわけがあるか!!」

アンドレが叫ぶ。

しかしアレスにはステラのトトを守るとい意志だけは本物だと、不思議と信じられるものがあつた。

それはユナも同じで、何故だか説明はできないが確かに確信できた。

「…とにかく、地下水路に侵入できる場所を探そう。彼が無事かを確かめたい」

「……まあ、アンタには助けられた恩義があるし、乗り掛かった舟だ。乗りますよ」

アンドレの言葉にユナも同意見らしく、一度だけ頷いた。

降りしきる雨の中、三人を乗せた車をケルベロスに跨る少女が遠くから見つめていた。

~~~~~

トトは夢を見た。

広くて綺麗な造りの部屋に青年と女性がいて、トトは二人から何かを教わっていた。

二人の顔はよく似ているような気がした。

「トト、今から母さんの言うことを繰り返して言つてごらん？」

すぐそばに居る青年にそう言われ、トトは頷く。

「火よ、私の手に宿り給へ」

女性が手を前に出してそう唱えると、手の上にマッチも無しに火が現れた。

トトは驚き声を上げる。

「母さん！だ、大丈夫なの!？」



「トト、言つてごらんさい。」

女性に言われ、トトは狼狽えながらも同じように手を前に出す。

「ひ、火よ…わたしの手に宿りたまえ…っ！わ、あちちっ！」

一瞬だが手の上に火が灯る。

しかしトトはその熱にすぐに手を引つ込めてしまい、炎は霞と消えた。

慌てて自分の手を見るが、何処にもやけどはしておらず、触つても熱くもなんともなかった。

「ッ、母さん。やつぱり」

「はい…トト。貴方には私と同じ力が宿っているようです…」

「かあさんと…っ!?うっ！うええっ！」

トトは突如苦しそうに口元を押さえ、口から水を吐き出す。

口の中にえぐみが広がる。

吐き出した水は黒く濁って見えた。

再び襲った吐き気でトトは一気に現実に戻される。

「うっ!!げほっ!げほっ!!おえっ!!」

溺れたときに飲み込んだであろう水を思い切り吐き出して咳き込む。

嗚咽と咳をどうにかおさめて、息を整えようとして、また嗚咽する。

「トト」

トトが隣を見ると、ステラがトトの背中に手を当てて優しくさする。

「す、ステラ?どうやってここに？」

「トトが落ちたのを見たから、飛び込んだ。それでなんとか通路に引き揚げた」

ステラの言う通り、水路の淵の通路にトトは寝そべっていて、

水路は僅かな照明の薄明りで水の流れが濁流の様に見えるほどに流れが激しい。

「ぼ、僕、助かったんだ…」

「人工呼吸をするのが遅れてたら助からなかった」

トトはステラの言葉にぞっとした。

自分が死ぬ一歩寸前であったことに、恐怖したのだ。

「トト、まだ息が荒い。もう一度やった方がいいかもしれない」

ステラはそう言ってトトに顔を近づける。

「い、いいいや!!いいい!も、もう大丈夫!」

「でも…」

「ちよ、ちよっと休めばなんとかなるかな!あはは…」

トトは笑ってごまかすが、ステラの言った人工呼吸のことを改めて考え直して、顔を赤くした。

(続く)

三章 Under Water Wanderer  
r) 2

ようやく呼吸を落ち着けて状況を飲み込んだトトは、通路沿いの電灯の下で肩に掛けていた鞆の中身を確認した。

水でほとんど濡れてしまってたが、紛失したものは無いようだ。

祖母から預かった手紙とチョコレートだけはどろいちゃった。だったらしく、濡れてすらいなかった。

トトはそれを見て少し安心したが、すぐに不安と罪悪感で胸がいつぱいになった。

祖父の拳銃を失くしたことで、アレスとはぐれたこと。

何より、ここから出られるかが全くわからないからだ。

かなりの距離を流されたらしく、自分が落ちたであろう穴のようなものは見当たらないし、

そもそもここが何処かさえ分からない。

「ど、どうしよう…!」

急に心細くなってきたトトは膝を抱えてうずくまる。

「トト」

「え?..うわっ?!」

突然ステラに抱きしめられて、トトは動揺する。

しかし彼女の胸から伝わる心臓の音は、不思議と彼を安心させた。

「大丈夫、私がついてる」

「あ…ありがと…、でも、その…」

「?」

「こ、これは、ちよつと恥ずかしいかな…?」

ステラは首を傾げた。

「?人間はこうすると安心するとプログラムにはある」

一体どこの誰がこの子にそんな知識を与えているのだろうかトト

トは心底疑問に思った。

~~~~~

自分が迷い込んだのは水路なのだろうと思うことにしたトトがま
ず行つたのは、

自分の服の水気を取ることもだった。

着ている服を全部脱いで、水気を出来る限り絞り取っていく。

ずぶ濡れで体にまとわりつく服を脱ぐのに手間取っているときに
ステラが手伝おうとしたが、

トトが必死に制止させて向こうを向くように説得し、

ステラは訳が分からないながらもそれに従った。

そうして着替えるが、まだ少し湿っぽくてトトは身震いした。

ずぶ濡れよりはずつといいと思うことにして、トトは鞆からランプ
を取り出す。

手回しのハンドル回して電気を作って点灯させる方式の物だ。

動かしてみるとしつかりと機能し、トトは安心した。

次に肩に掛けていた猟銃を持って、弾丸を装填する。

銃身が上下二連の中折れ式のライフル銃で、これはトトの祖父が猟
師だった頃に使っていたものだ。

大きなシカを狩ったときの写真を見せてくれたことが、トトの記憶
には新しい。

「ねえ、ステラ…?」

「何?」

「またあの、デッドマスターに会ったとき…僕はどうすればいい?」

トトはステラに問いかけた。

もう一度彼女と相対した時、今度はバイクも無ければ狭い水路の中
を逃げる必要がある。

前のようにいかなのは明らかだ。

「彼女はトトではなく、私を優先的に狙っていた。」

「え…?」

ステラの言葉にトトは驚く。

そして頭蓋骨には襲われたときのことを思い出す。

たしかにあのとき彼女は居なかった。

「恐らく彼女の狙いはまず私」

「ステラを…?」

「私を倒して、それから貴方を捕まえるつもりだった。そう考えるのが、自然。」

トトは思わず納得した。

確かに腑に落ちるところもあるが、疑問もあった。

「え、じゃ、じゃあ…僕がいる場所や、僕がここに落ちたことが分かったの?」

「分かる。…どうしてかは、わからない。ごめんなさい」

そう言つて頭を下げるステラにトトは慌てた。

「そ、そんな…むしろありがとだよ、君が居なかったら、危なかった…」

トトはステラにそう言うが、バイクや建物を破壊した狙撃やケルベロスのことを思い出し、

アレはもし自分が死んでしまつても別に構わないというような気がトトにはしてならなかった。

(僕の命がどうでもいいとなつたら本当は何が彼らにとって必要なんだ…?)

トトは考えているうちに気が滅入ってしまった。

「う〜ん、ダメだ…。今はここから出ることを考えよう」

「そうするべき」

ステラはうなずく

「と、とりあえずこの水の流れと逆を行けば、落ちた穴に戻れるよね…?」

「ダメ」

トトは一步踏み出す直前に肩を掴まれる。

いきなり掴まれ、トトは驚いてステラを見た。

その左目に青白い炎が灯った。

「な、なんで?」

「向こう側から、何かが来てる。近づいてる。」

「え?」

トトはもう一度目を凝らして通路を見る。

水流の中、一対の赤い光が水面を漂っている。

それを見た瞬間、トトは背筋が凍りつく感覚に襲われた。

(今すぐ此処から逃げなきゃ!)

どこに逃げるか、どう逃げるか。トトはそんなことを考えるよりも早く声を張り上げた。

「走って!!」

ステラの手を掴みトトは踵を返して駆け出した。

二人の足音が水の音だけだった通路内に響く。

しかし彼らの走る速度よりも早い速度で赤いソレは追いかけてきた。

トトは横目でソレを見て、ソレが一対の眼球だと気が付いたのは、水面から巨大な口が姿を現したときだった。

ステラは大砲を抜くが、その口が閉じる方が早く大砲に喰らいつかれてしまった。

砲身に歯を立てられガリガリと金属の削れる音と金切り音を響かせる。

ステラはトトから手を放し、

右手から刃を顕現させて怪物の体に突き立てた。

「ッ!」

しかし刃は怪物の体の強固な鱗に阻まれて、切先がわずかにめり込んだ程度で止まった。

ステラは何度も突き立てたり斬りつけようとするが、刃は怪物に傷一つつけられない。

「ステラー!」

トトはステラを助けようとライフルを構えるが、赤い目がぎよろり

と動き、それと目が合ってしまったと思わず体をこわばらせた。

目が “ 笑っていたのだ ”

考えすぎなのかもしれない。そう見えただけかもしれない。

しかし、「見つけたぞ」とでも言うかのような、

その巨大な口を持つ怪物の微笑を目の当たりにした

トトは完全に蛇ににらまれたカエルのようになってしまった。

引き金には指がかかっているのに、引けない。

怖い。

手が震えて指に力を入れられない。

怪物はそのまま頭を振るい力任せにステラを壁に叩きつけた。

彼女の体はレンガ造りの壁にめり込み、そのまま崩れ落ちる。

「ステラー！」

トトは叫ぶが、彼女は動かない。

にじり寄る怪物に目をやり、その姿に腰を抜かしてしまう。

「く、来るな！来るな！」

トトは叫ぶ。

恐怖心で、心の底から出た精一杯の抵抗だった。

「来るなあ!!」

しかしトトのその声に怪物は目を見開いてそこから一步も動かな
くなつた。

否、動けないという方が正しいほど突然動きを止めた。

「…えっ…どう？」

怪物自身も何故動けないのか分からないようなナニカをトトも感
じ、その状況に驚いた。

「ガシヤ」

水路内に響いた鈍い音。

黒い大砲を構えたステラは迷いなく引き金を引く。

撃ち放たれた砲弾が怪物の頭部に直撃し右の眼球を破壊して、水の
中に叩き込んだ。

怪物は黒い濁流の中に消え、辺りには水の流れる音だけが残った。

「はあ…はあ…」

トトは恐怖心から解放され、一気に体から冷や汗が吹き出た。

その場から動けなかったが、トトはハツとしてステラの元へ駆け寄る。

「ステラ！大丈夫??」

「…私は、平気……、自己修復機能があるから、すぐに立てるようになる。」

「……」

トトは何も言わずにステラを抱きしめ、ステラは何故トトがそうするのか分からなかった。

「…トト?」

「僕がもつと強かったら君が傷付かずに済むのに……」

「…?」

ステラにはトトの言葉の意味は分からなかったが、

抱きしめられる感覚と彼の体温は何故か覚えているような気が、

彼女の中にはかすかに、確かにあった。

(続く)

三章 Under Water Wanderer
r 3

「そういえば」

「何？」

通路内を歩いている道中で水路の経路案内図を見つけ、それに目を通していたトトはステラの呼びかけに、彼女の方を見ずに返事をした。

現在位置と最短の脱出経路を知りたかったからだ。

「さっきの怪物は、トトの言葉で攻撃を止めた様に見えた」「え？」

トトはステラの方を見た。

彼女はいつも無表情で、トトはやはり彼女の心は読めないと思う。

「うーん…僕がやめてって言ってやめてくれるような生き物には見えなかったけど……」

「…そう見えただけ、気にしないで」

ステラはそう言ってまた周囲を見張るように通路の奥に目を向けた。

トトはステラの言った言葉をあまり気にすることなくもう一度水路の図面を見た。

水路は雨水だけを溜めるためのものであること、

都市全体の雨水を処理するため、広大かつ複雑に分かれていること、

雨水を溜める貯水槽がいくつかに点在していること、

それを地上にある浄水施設へ汲み上げるための巨大なポンプがあること。

そして一番トト達の現在位置に近いのは第三貯水槽だということがわかった。

「これなら、まだ…」

トトは一縷の望みが見えたことに声色を明るくさせた。

「トト」

「え？あ、ああ…外に出られるかもって思ってた」

「そうじゃない」

「えっ？」

トトは思わずさっきの怪物がまたいるのかと身構えたが、ステラの様子からそうではないことにすぐ気づく。

ステラはトトの鞆に目を落とし、ポツリとつぶやいた。

「…チョコレート」

「あつ、ああ…ちよ、ちよつと待ってね…」

鞆からチョコレートの包みを取り出し、ひとかけらを割ってステラに手渡す。

ステラは段々小さくなっていくチョコレートを見て、貰ったひとかけらを更に半分に割ってトトに手渡す。

「トトも食べて」

「え？」

「食べて」

「…ありがと」

トトはステラからチョコレートを受け取って一口かじる。

ステラはそれを見てから小さくかじった。

~~~~~

チョコレートのおかげか心が少し落ち着いたトトはまた再び地図に書かれていた貯水槽を目指して歩いた。

そのうちに、水の音がどんどん大きくなっていったことに気が付いたトトは、ポンプのある貯水槽はすぐそこだと思い駆け足になった。

ステラもトトにペースを合わせ、通路の出口で二人は広い空間に出た。

そこはまさしく、しかしトトの予想していた以上に遥かに巨大な貯水槽だった。

その空間だけで家が何軒もすっぽりと入ってしまうとトトが思うほどに広く、通路の下すぐのところまで溜まってきている水は、黒く濁っているからか底は全く見えなかった。

中央には天井に向かって伸びる巨大なパイプがまさに水を汲み上げていく音が響き、トトが通ってきた場所とは違う水路からも流れる水の音が、巨大な空間を満たしていた。

そしてトトは自分たちが今いる通路から上に向かって上がっていくための通路と梯子が、

貯水槽の内壁に沿って備え付けられているのを見つけた。

「やっぱりだ。あそこから昇っていけそうだよ」

トトはそう言ってステラを見た。

しかし彼女の目は梯子の向こう側を見ているようだった。

「…ステラ？」

「……来る、隠れて。」

ステラに手を引かれたトトは通路から身を隠し、ステラはほんの少しだけ顔を出して様子を伺った。

梯子から誰かが降りてくる音が聞こえてくる。

濃いグリーン軍服に赤い腕章、民兵隊だとステラは思った。

民兵が五人通路に降りて、最後に作業員と思しき男性が降りてきた。

銃を掲げた兵士を前に、ひどく怯えた様子だった。

「話し声したのは本当だな？」

「は、はい…」

「ようし、お前たちはついてこい。最近動きを活発化させてる反乱分子の可能性もある」

「はっ」

隊長らしいベレー帽を被った男性が部下たちに命じる。

ステラは再び身を隠し、トトに手を差し伸べた。

「トト、手を出して」

「え?」

「早く」

言われるがままにトトはステラの手を握る。

ステラは指を絡ませてがちりと握り返し、トトは少し動揺した。

「放したらダメ」

ステラは一言それだけを言った刹那、通路から勢いよく飛び出し、手すりを蹴り上げて飛び上がった。

トトはその速さと腕を引っ張られる感覚に心臓が縮むような感覚になったが、民兵達の姿を見て本当に心臓が縮んだような気がした。

「撃てッ!!」

民兵達が二人に狙いを定めて一齐にライフルを向けて発砲する。

ステラは大砲で弾丸を防ぎ、水を汲み上げているパイプを蹴って飛び、別の水路へ続く通路の前に降り立った。

「追え!!」

隊長が叫ぶが、ステラの砲撃の方が早かった。

放たれた青白い砲弾が中央に据え置かれたパイプが 伸びる天井に直撃してポンプを破壊した。

吹き出した水に兵士達が思わず足を止めた。

その隙について二人は更に奥へ逃げ込んだのだった。

「クソ、退避しろー走れー」

これ以上の追跡は無謀だと判断した隊長は部下たちに叫ぶ。

兵士達が元来た梯子を上がっていく中、

隊長は通路の奥へ消えていく二人の背中を見ていることしかできず、舌打ちをした。

~~~~~

その貯水槽真上に作られた浄水施設はポンプの破壊によって水が勢いよく溢れ出し、

膨大な水の圧力は建物の屋根を貫いて大きな水柱となった。

それを見た付近に居た住民達は何事かと驚きを隠せずにいる中で、民兵隊の男達が事態を收拾させる為に現場へと向かっていく。

「なんだあ?!水の汲み上げ施設で事故とは珍しいなあ」

少し離れたところで、水柱を見たアンドレがリングを齧りながら水柱を見て言った。

アレスはトト達何か動きを見せたのだと思い、ニヤリと笑みをこぼす。

「アンドレ、ちよつとアレを間近で見てもたたくは無いか?」

「まさかアレとトト君とやらが関係あると思ってる?」

「賭けてみるさ」

アレスの言葉にアンドレもふふんと笑う。

「じゃあ行ってみるとしますか」

「ちよつ!ボクの見解は無視!」

ユナが叫ぶも、アンドレが彼女の言葉を耳にしたのは彼が既にアクセルを踏んだ直後で、

加速で体を後ろに持っていていかれて座席に頭をぶつけたユナはまた運転席を思い切り蹴り飛ばした。

~~~~~

「はあ…はあ……」

トトはもう追ってこないのを確認すると、その場にへたり込んだ。

走っている間は感じていらなかった疲れがどつときたようで、荒い呼吸を繰り返す。

トトは水路を流れる水面を眺めた。

地上で降る黒い雨のせいで濁った水を見て、とてもではないが飲む気にはなれなかった。

「この水が飲めればなあ…」

しかしそれでも喉の渇きを抑えられずにはいられないトトはポツリとつぶやく。

そんなトトは見ていたステラも水面を覗き込んだ。

黒く濁っていた水路の底が見えた。

「…え？」

トトは驚きの声をあげた。

あれだけ黒く濁っていた水がすっかり透明な真水になったのだ。

手で掬ってみても透き通ったままのその水を、トトは口に運んだ。

それは本当に綺麗な水でトトの喉を潤した。あのえぐみのある黒い雨水とは思えなかった。

「……トトが言ったから、水が綺麗になった…？」

ステラが首を傾げながらポツリとつぶやく。

「そんなまさか」とトトは返したが、ふとさっきの怪物に襲われたときのことを思い出した。

そしてすぐにそんなはずは無いと思い、もう一度掬いあげた水をその気持ちと一緒に流し込んだ。

(続く)

三章 Under Water Wanderer  
r) 4

首都グランドセントラルの誰にも知らない場所で、二人の男が話をしている。

一人は王城内で10の席に座っていたあの老人だ。もう一人はその彼よりずっと若い。

老人は男に問いかける。

「それで？どこまで情報は掴んでいるんだ？」

「はい。ギユスターヴと接触しまして、そこでなにやら奇妙なことが起こりました」

「奇妙…？」

「ええ、彼の言葉でギユスターヴが一瞬ですが、行動を停止してしまつたようで…あの娘に頭部半分を潰されてしまいました」

男の言葉を聞いて老人は耳を疑った。

右手に握られた杖に力が入つたのを見て、男は金縁のメガネを掛けなおす。

「ですが、ギユスターヴの追跡からは逃げられません。必ずや捕まえてみせます」

「ククク、頼むぞ……」

~~~~~

アレス達が浄水施設に着くころには見張りが付き、付近の立ち入りを完全に禁止されてしまつていた。

道路には浄水施設から溢れた水が流れ出ていてまるで川のようにだ

とハンドルを握るアンドレは思った。

ユナは先ほど急発進した際に思い切り頭をぶつけたらしく、不機嫌そうに運転席の背もたれに足を乗せている。

アレスが車内から様子を見ている中、口を開いたのはユナだった。「でっ…これからどうするんだっ…こんなところにあの子達がいるとも思えないけど?」

不機嫌そうな口ぶりだが、もつともな発言だとアレスは思った。

近づいて確認することもままならない以上、トト達の安否を確認することは不可能なのはアレスも分かっているが、

いつまでも彼と合流できずにこのままと言うわけにもいかない。

手に持っていたままのトトが落とした拳銃を懐にしまい、車のドアを開けた。

「君達まで捕まる訳には行かないしな。ここからは私一人で行こう。色々世話になった」

「お、おいおい…!」

そう言っさつさつと降りてしまおうアレスをアンドレは止めようとするが、

アレスはそれを聞かずにドアを閉め、フードを深く被り直すとさつさと雨の中を走り去っていった。

「…なんだよわけわかんねえな、どうすんだよオッサン」

「…このまま流石に締まりが悪いよな?」

「お、おいまさか付き合うつもりか?」

「お前だっあ少年が無事かどうかくらいは見たいだろ?」

アンドレの問いかけにユナは言葉を詰まらせた。

事実ユナ自身も二人の事が心配だったからだ。

「…あの子達の無事を確認しに行くだけだからな」

「あいよ」

アンドレはユナの言葉にそう答え、車を発進させた。

~~~~~



トトは道が分からないが、止まるわけにもいかず道なりにしばらく歩いてみると、通路に設けられた電灯ではない別の光を見つけた。何だろうと思いい近づいてみると、そこから雨水が流れ込んできているのだ。

トトはそれが道路の雨水をこの地下水路に流している雨水口だと気づいた。

(ここから出られるかも)

そう思ったトトだったが、出てきたところを見つかつては元も子も無くなると思え直した。

考え込む彼の背中を見てステラが口を開いた。

「トト、出ないの?」

「えっ? あ、えっと…、出ようとしてるところを見つかったらっと思うと……」

「??、私がいるから問題は無いと考える」

「え、ええっと…そうじゃなくて……ステラを信用してないわけじゃないんだけど…」

トトはなるべく先ほどのような建物を壊すような大きな事にするのを避けたいのだが、

それをステラにどう説明をしたら良いのか思いつかず、言葉に詰まってしまった。

その時だった。

雨水口の向こう側、地上で銃声が響いた。

トトは咄嗟に身をかがめ、ステラはトトの前に立ち地上の様子に耳を澄ませる。

「黒服は27番通りに逃げ込んだぞ! 挟み撃ちにして捕まえろ!」

「アイツは擲弾筒を持っているぞ! 狙撃兵は先回りをして奴を狙い撃て!」

ブーツの足音と会話の内容を聞いた二人は真上は民兵隊が居て、雨

水口からの脱出を無理だと判断し、先に進むことにした。

先に進むうち、トトはあることに気が付き足を止める。

それはステラも同じで足を止め、通路の向こう側を見つめた。

トトは耳を澄ませ、水流の音の他に混ざる『音』を探すために聴覚を研ぎ澄ませる。

『ゴツ、ゴツ』

水流に混ざって水路を歩く足音が響いている。

一人や二人ではない、明らかに複数人で歩いている音だ。

二人は壁に背中を張り付け、身を屈める。

「先発隊から報告があったというのは、この区画か？」

「間違いない。ここを通ればあの吹っ飛んだ浄水場に繋がるはずだからな」

(まづい) トトは思った。

民兵隊の捜索がここまで来ていて、自分たちが向かっている先から彼らは向かってくるのだ。

この状況を打開できる方法をトトは考える

「トト」

「な…何…？」

ステラに耳元で囁かれ、こんな状況なのは承知のはずなのにトトは思わずどきりとした。

すぐに首を横に振って平静を取り戻すも、やはりステラとの距離感に戸惑いはなくなりそうもない。

「考えがある、このまま聞いてほしい」

「う、うん……」

~~~~~

『ザブン』

通路を歩く足音が一斉に止まる。

「おい！音がしたぞ！」

「ライトを照らせ!!」

何かが飛び込む水の音を聞いた兵士たちは手持ちのライトで道を照らした。

そうして音のした方向へ走っていくうち、うずくまる人影を見つけ立ち止まる。

「おい……ここで何をしている！手を挙げてゆつくりと立て！」

先頭を走っていた一人が突撃銃を向ける。

トトはゆつくりと手を挙げて立ち上がった。

次の瞬間、水の中に隠れていたステラが大砲を撃ち、やってきた数人を一発で吹き飛ばす。

兵士達は爆風で水の中に落ちる者やその場に倒れこんでそのまま動かなくなった。

「……めんなさい、捕まるわけにいかないんです……」

トトは兵士たちに向けてそう呟いた。

ステラは水から上がって彼の手を握る。

トトは一度目を閉じて、空いている手で小さく十字を切ってからステラを見た。

「行くう」

「うん」

彼女の言葉にトトは一度頷いて、再び歩き始めた。

通路の突き当たりに出ると、【?点検用出入口】と書かれた案内表示板に見つけた。

「やった、ここからどうにか外に出られるかも」

「外に出たら、まずはどうする?」

「えっと……とりあえずアレスさんと合流しないとね」

ステラの問いにトトは答える。

その声にはようやく外に出られるという安堵があった。

しかし水流の音に混ざる水音に違和感を感じたステラは、迷わず進もうとするトトの肩を掴んで歩みを止めさせた。

「わっ！、何?」

「しっ」

トトは振り返るが、すぐにステラに制される。

左目に炎が灯ったのを見たトトは彼女が何かに気が付いたのだと思っただけと同時に、

その “何か” を目で見てしまった。

水路の向こう側に赤い光を見たのだ。

トトはすぐに先ほど出会ったあの怪物を思い出した。

「ステラ！走って!!」

トトは一目散に出口を求めて走り出す。

通路の途中に出口と思いき扉を見つけたトトはドアノブに手をかけ回すが、

押しても引いても扉が動かない。

「!?なんで!!」

「トト、離れて!」

ステラに言われたトトは扉から離れる。

彼女は大砲を出すと、扉に向けて一発撃ちだした。

「急いで!」

ステラに言われるがまま、周りの壁ごと吹き飛ばされた扉の先へトトは進む。

さらに梯子を登ってすぐに扉にぶつかり、その扉を迷うことなく開くと外に出られた。

外ではやはり雨が降り、黒い雲のせいで余計暗く感じた。

誰も居ない通りに不気味さを感じると同時に安心した。

懐中時計に目をやると午後の5時を回っている。

トトは自分が思っているよりも長い時間をあの水路の中で過ごしていたのだと思った。

「トト、まずは何処へ向かおうか?」

ステラの言葉にハツとしてトトはどうしようかと考える。

自分自身まず此処が工業都市の何処であるかさえ把握をしていないのだ。

トトは周囲を見渡す。何か現在位置が分かる目印を探してみるが、

いまいちハッキリとするものが見当たらない。

「こっちにも黒服がいたぞ!!」

トトの後ろの通りから声が聞こえ、振り返る。

民兵隊だ。見つかったとトトは思った。

「トト、こっち」

「え、うわっ!？」

ステラに手を掴まれ、勢いよく引つ張られたかと思うと、そのまま抱きかかえられてステラは高く飛び上がった。

そのまま屋根まで飛び、屋根伝いに大きくジャンプしていく。

高く飛ぶ感覚にトトは目を回すが、首を振って気を持ち直す。

しかし彼の目に不穏な白い影が映った。

見間違いかもしいれない、まさかと思ったトトはその場所をもう一度見る。

「ステラ!!」

トトの叫びにステラは大砲を抜くが、一步及ばず弾丸を弾くだけに終わった。

弾かれた紫色の光弾は高い煙突に直撃し、大きな穴を開けた。

ステラの目に炎が灯る。その視線の先には、

ケルベロスに跨る。狙撃銃の少女がいた。

「……ブラッククロックシューター。次は、仕留める」

(続く)

首都グランドセントラル王城内

ゾディアックの4番位ヒュドラは、苛立ちのあまり己の得物である鋸を振り回し、周囲の物を破壊していた。

民兵達から結果の報告が来ず、プルートやケルベロスが帰ってこない事に苛立ちを積もらせ、それが爆発したようだ。

すぐそばにいた6の席の少女は何も言わずにそれを見つめており、時折自らの方へ飛んでくる破片をその巨大な腕で防ぐことしかしていない。

しかし直後一発の光弾がヒュドラ目掛けて飛び、ヒュドラはその光弾を切り飛ばす。

真つ二つにされた弾は壁に直撃し粉塵が舞った。

「全く…君は女帝らしい振る舞いに欠けるな」

ヒュドラが睨みつけたその視線の先には、10の席の老人が立っていた。

杖をコツコツと鳴らし、彼女に歩み寄る。

「うるさいわね…首を切り飛ばすわよワイバーン…!」

「怖ろしいことだ…。だが、戦う相手を見誤らぬほうが良いぞ?」

ワイバーンと呼ばれた10の席の老人はヒュドラに向かって笑う。

その釣りあがった口角に彼女は薄気味悪さしか感じなかったのか、視線を逸らす。

少しの沈黙、そして

「…ブラックゴールドソーでもあるこの私より下位の貴方が、私に指図しようなど……」

ヒュドラはそういうとワイバーンの横を通って去って行こうとす

る。

だが彼も6の席の少女も、彼女がそう簡単に引き下がるとは思っていないかった様だ。

「ッ!!」

ヒュドラは右手に握られた金の装飾が施された鋸を古いワイバーンの頭上に振りおろそうとした。

しかしその刃は何者かによって阻まれた。

彼女の赤い炎の灯る瞳には、それよりも明るい赤に光る刃と、同じ色の瞳を持つ白い少女が映っていた。

「……うるさくて眠れやしないわ。貴女が騒々しいから」

「……ローレライ……!!」

ヒュドラはローレライと呼んだ白の少女を睨みつける。

しかしその二人を止めたのはワイバーンだった。

「ここで争いを起こすでないぞ女帝閣下……。戦う相手を見誤るなど言ったはずだ」

「クツ……」

「今ここで競り合っても君の兵士達の士気が上がるわけではない。……共に結果を待とうではないか。キングキルの様にな……」

「……」

ヒュドラは歯を軋ませると、ローレライとの競り合いを止め、鋸を床に思い切り振り下ろして轟音を響かせる。

そうして彼女は深く息を吸って吐いた。右の瞳の赤い炎が消え、辺りは静寂に包まれる。

ワイバーンは彼女を見つめる。ヒュドラの眼に最早憤怒は無い。

「……減らず口も程々になさい……」

握られた鋸は炎に包まれて消え、ヒュドラは去っていった。

ワイバーンはそれを見届けてからローレライに声をかける。

「さて、眠りの邪魔をしたようだったが……もう目は覚めましたかな？歌姫よ……」

「もう少し眠るわ」

ローレライはそう言ってタンタタンとステップを踏みながら踊る

ようにその場を後にした。

事の顛末を見届けた6の席の少女はワイバーンの背中を見つめこう思った。

バカみたい。と

くくくく

「ステラー！」

トトの声に応えるようにステラーは狙いを逸らすべく、屋根から屋根に飛ぶ。

狙撃銃の少女はケルベロスで追跡しながら次弾を装填し、ステラーに狙いを定めた。

ステラーは振り返りざまに大砲を撃つ。

「チツ」

少女は軽い舌打ちをするとその砲弾を撃ち抜く。

青白く燃える砲弾は爆発し、火花を散らして地面に落下していく。

(このままでは不利だ、トトをどこかへ避難させなくては……)

ステラーはそう考えながら、砲弾を何発も撃って距離を取ろうとするが、少女は距離を保ちながらその全てを正確無比な射撃で撃ち落とすてしまう。

トトもこれにはどうするべきかをステラーに抱えられながらも頭を回転させた。

そんなときトトの視線の先で建物の屋根が爆発した。

何が起きたのかと目を凝らす。民兵達が誰かを追いかけている。

彼らの追う先に、黒服の男が銃を持って応戦しながら走っているのが見えた。

トトはそれがアレスだとすぐに気づき、その方向を指さした。

「ステラー！あっちだー！」

ステラーは頷いて屋根に着地しようと視線を移したが、直後に感じた気配に振り向くと、

狙撃銃を大きく振りかぶった少女に思いきり背中を殴られ、地面に掛けて落下させられてしまった。

どうやら視界から外れたわずかな隙について大きく飛んで距離を詰めたようだった。

落下の衝撃でステラが苦悶の声をあげる。

「ステラ!？」

トトは幸いにもステラが咄嗟に身を守ってくれたおかげで無事ではあった。

アレスの声にすぐに反応して身を起こそうとするが、ステラがしっかりと抱きとめているせいで起き上がれない。

「ステラ！大丈夫!？」

「私は平気……!？」

そう答えたステラはやつと腕をほどいて身体を起こすと、トトの腕を引いて立ち上がらせる。

トトは少し不安が和らいだと同時に、自分のせいで傷ついていく彼女に申し訳なく思った。

狙撃銃の少女は二人の前に降り立ち、数秒遅れてケルベロスが降り立って咆哮を響かせた。

トトはそれに腰が引けながらも、どうにか打開できないかと思考を巡らせる。

「あ…貴女の目的はなんなんですか!？」

「目的?？」

トトの問いかけに少女は聞き返す。

愚問であると言いたげに笑みを浮かべる少女にトトは畏怖した。

「キングキルが貴方を連れてこいと命令したから従っているだけの事。それが私達ゾディアックの存在理由」

「ゾディアック……」

トトは彼女の言葉を聞いて狼狽えた。

ゾディアックが二人がかりな上に民兵隊まで自分を追っている事実には驚かない方が無理だろう。

少女は自身の身の丈よりもある巨大な狙撃銃を一度だけ振るい、ト

トに近づいていく。

ステラは少女の前に立ち塞がり、トトを守る様に刀を彼の前に向けながら、左手に持った大砲の砲口を彼女に向けている。

「…ブラックロックシューター……やはり貴女が邪魔ね。」

「…トトには、一步も近づかせない」

ステラが静かに、しかし真つ直ぐに少女を見つめた。

少女は紫の瞳でステラに対し明確な敵意を向け、狙撃銃を振り被つてステラに襲い掛かった。

ステラは黒の剣でそれを受け、同時にトトは横に転がってすぐさま物陰に隠れた。

少女はステラに押し返されて距離を取られてしまい、それを見たケルベロスの左右の頭が唸り声を上げた。

「ドヴァー、トゥリー。焦らないで」

少女は一言そう言ってもう一度ステラに接近する。

ステラは素早く砲撃をするが、狙撃銃の先端に取りつけられた杭打ち機のような物で砲弾が貫かれて爆発し、その爆風の中から少女はステラの眼前に飛び出し、銃を振り抜く。

「クツ……」

ステラは大砲でその一撃を防ぐが、対応が遅かったのか腕を無理のある曲げ方をしてしまい、表情を歪ませる。

少女は紫の瞳で静かに炎の灯る左目を見た。

「随分余裕が無さそうね、大人しくあの子を渡せば殺さずに済ませてあげるのに……」

「トトは、渡さない……」

少女の言葉にステラは静かに、しかし確固たる意志で言い返す。

トトは二人のそんな様子を見て猟銃を取るが、あのケルベロスがこちらの存在に気付いているのか、見張っているのか、トトを見つめたまま動かない。

目の前で競り合う二人を前に、トトは動けなかった。

(動くな。勝負が決まるまで見ていろ)

とでも言われているような気がしてならなかったのだ。

激しく金属がぶつかり合う度、火花が散り鈍い音が響く。
そして

「ぐっ……ううっ!!」

ステラは下から上に振り上げられた狙撃銃の一撃にガードを解かれ、

そこから更に横一線に振られた一撃をもろに受けて、受け身も取れぬまま道路に叩きつけられた。

「ステラ!」

トトは叫ぶ、彼女は答えない。

少女は突きの姿勢で狙撃銃を構える。

“ ガシヤツ ” という音を響かせて、銃の先端が杭のような形に変形した。

少女は立ち上がろうとするステラにとどめの一撃を入れようと右足に体重をかけた瞬間、

「やめろ!!」

トトはそう叫び、ステラの前に両手を広げて飛び出した。

狙撃銃の少女はトトの行動に一瞬驚きを見せたが、彼に問いかける。

「…なぜ、彼女を庇う?」

トトは答えられなかった。

自分でも何故そんなことをしているのか分からなかった。

今にも足がすくみそうで、気が引けてしまつて声も出ないのに。

少女はそんなトトを見て、さらに続ける。

「貴方は突然目の前に現れた彼女の言葉を信じて、言われるがまま我々から逃げているだけ。我々は君に協力してほしいだけだ。君の

“ 力 ” が必要なんだよ」

「僕の、力……?」

トトが聞き返す。

彼の背後では刀で体を支えながら、ステラがなんとか立ち上がろうとしている。

少女の後ろにケルベロスが歩み寄ってくるのを見たトトはどうす

るべきかと考える。

ステラを連れて逃げようにも、あの怪物から逃れられる気がまるでしない。

「トト、私が囹になる…その隙に…アレスと合流して……」

「え…？」

背後から小声でステラにそう言われ、トトは聞き返す。

しかし、答えたのは少女の方だった。

「ブラックロックシューター、無駄な抵抗はしないことだ。彼を引き渡せば、お前は破壊しないでおいでやる」

少女はいつの間にか外していた耳当てを付け直しながらそう言った。

しかし、ステラは最初から言う通りにするつもりはないらしく、トトの前に立って刀を構えた。

それを見た少女が狙撃銃を構える。

二人の間に沈黙が流れたが、ステラが雨の音に混じって聞こえる車の音に気が付いた。

トトや少女にも聞こえ、ケルベロスが唸り声を上げる。

それはトトたちの後ろから近づいてきていた。

トトは振り返る。

狙撃銃の少女は二人の後ろからやってくるその車を見て、眉をひそめた。

屋根の上に、人影のようなものが見えたのだ。

「二人とも伏せろおおお……！！」

(続く)

三章 Under Water Wandering
r) 6

「二人とも伏せろおおおー！ー！ー！！」

ユナの声だ。

トトがそう思った直後、彼はステラに肩を掴まれて地面に伏せる形になった。

ユナは車の天窓を開けてそこから身を乗り出し、使い捨て式の対戦車用擲弾発射器を構え、ケルベロス目掛けてそれを発射させた。

“ポンツ”という軽い音と共に弾頭が発射され、それは二人の頭上から2メートル上を通過して狙撃銃の少女目掛けて飛んでいく。

少女は巨大な狙撃銃を盾にしたところで弾頭が爆発し、辺りは煙に覆われる。

爆発を見たアンドレはブレーキをかけて激しいスキル音を響かせながら車を停車させる。

「やったか!?!」

アンドレは雨の中巻きあがった土煙を見て言った。

トトは爆発のせいで耳鳴りを起こしてしまい、ステラに支えられながら耳を押さえてなんとか立ち上がる。

しかし土煙を振り払い、狙撃銃の少女が無傷で歩いてくるのを見て、アンドレとユナは絶望せざるを得なかった。

「対戦車ロケット弾だぞ……!?!」

「化物かよ……」

「…邪魔をするなら、貴方たちでも容赦はしないと云ったはず……」

二人に向かって少女はつぶやく。

しかし、

「ツ！ダメー！」

少女が突然後ろを振り返り叫ぶ。

それよりも早く、アンドレ達の乗る車目掛けて、ケルベロスが3つの口から生える牙をむき出しにして襲い掛かった。

アンドレは慌てて車をバックさせ、逃走を図るがケルベロスが諦める気配はない。

「アジーン！ストップ！！アジーン！」

狙撃銃の少女が慌てて叫び駆け出すが、三頭の怪物は主人が自身の名を呼んでも攻撃の意思を抑えない。

ユナは咄嗟に残った発射器を投げつけるが、怯む様子も無くケルベロスは飛びかかる。

ユナは車内に逃げ込んだ為、噛みちぎられずに済んだが、車の上にケルベロスが飛び乗り、爪を立て車を歪ませる。

アンドレはなんとか振り落とそうと車をターンさせて急加速させるが、ケルベロスは爪を深く突き立てていて、振り落とせそうにはなかった。

「アジーン!!」

少女はトトのことも忘れて名前を叫ぶが、主の声は届かなかった。

ステラはこれを好機と捉え、トトを連れてこの場から離れようとするが、トトは手を引かれても動こうとはしなかった。

「トト？」

少女の背中を見つめる彼の横顔は、

ステラの目には寂しそうに見えた。

少女は膝から崩れ落ち、まるで生きる糧を失ったようにその場に座り込んでしまった。

トトは彼女の背中に声をかける。

「……あのケルベロスは、君の大切な存在なんだね……」

「……」

少女は答えない。

ステラはそんな二人を見ているしかできない。

トトは更に続けた。

「僕は、君の友達の耳を銃で撃った。自分を守るためとはいえ……」

「……」

「……こんなことを、君に言うのは、変だと思う。でも……、本当に……ごめんなさい」

「……え？」

トトはそう言つて、彼女に頭を下げ、謝つた。

少女はそれを聞いて驚いた様子で振り返る。

トトは顔を上げた。

「僕は、君の友達を傷つけた。だから、ごめんなさい！」

「……変なことを言うね。私は」

少女がそう言いかけた直後だった。

ステラが何かの気配に気づく。

それは少女も同じで、二人の様子の変化に気づいたトトは、自分たちの立っている “ 地面の下 ” から身も毛もよだつ殺気を感じた。

そしてその正体は、トトたちのすぐ前の道路の排水口を周りの路面ごと押しあげて姿を現した。

恐らくは地下水路のあるであろう場所、道路を押し上げて右目を潰されたあの怪物が再び地上に姿を現したのだ。

トトはその姿を見て怯えた。なんとという執念で自分をここまで追ってきたのだと。

ステラは狙撃銃の少女を見た。

彼女はこの怪物を良くは思っていないらしく、不快そうにその姿を見つめている。

「トト!!」

アレスの声と同時に怪物の固い外皮に何かを着弾して爆発を起した。

トトは爆風と熱に目と細める。

彼は煙を吐き出している擲弾発射銃を両手に持つて、トト達とちやうど怪物を挟んだ向かいにやってきた。

「無事か!？」

「アレスさん！僕は大丈夫です!!ステラもいます!!」

彼の問いかけにトトは答える。

怪物はトトを見て咆哮を上げた。

「私が囹になる！ステラはトトを連れて逃げろ！」

「そ、そんな……」

アレスの提案にトトは言葉を詰まらせた。

万が一自分たちが逃げきれたとしても、アレスが助かる保証が無かったからだ。

怪物が左目でアレスを捉え、尻尾で振り飛ばすが、アレスはそれを飛んで回避する。

ステラはトトを守るために彼の前に立ち、怪物を見て刀を構えた。

しかし怪物はそれを見逃さず恐ろしい速さで体を回転させ、ステラをトトや少女ごとなぎ倒そうとする。

「っ!!危ない!!」

トトは咄嗟に少女の方へ飛び出し、少女の体を伏せさせた。

トトの軍帽が尾に掠り飛ばされる。

ステラは尾の先を刀で防ぎ、火花を散らせた。

そのまま左手に大砲を出現させて撃ちだすも、砲弾は彼の固い鎧のような体に傷をつけることさえ出来ない。

アレスの銃でもそれは同様で、アレスは自分の銃の弾では鉛筆の芯で刺すようなものだと思った。

「君は……どうして……!?!」

少女がトトに問いかける。

トトは軍帽があつた場所を手で抑えながら、

「……なんでだろ、わかんない。」

とだけ言った。

怪物は体をよじつてその巨大な口をトト達に向けた。

「トト……」

ステラは走り出し、その口がトトを喰らう前に止めようとするが、怪物の動きの方が速く、怪物はトトと少女の二人を飲み込もうと大きく口を開けた。

もうだめだと思いトトは目をつむるが、狙撃銃の少女は違った。

彼女は狙撃銃を抜き、思い切り怪物の口の奥まで銃身を突き立てて引き金を引いた。

放たれた紫色の光弾が怪物の体を内部から粉碎し、影も形も残すことなく消し飛ばした。

トトは恐る恐る目を開くと、自分の目の前に立つ少女の持つ狙撃銃の機関部が動き、白い蒸気を上げていた。

「…トト、私はアジーンの事は咎めない。でも、君に敬意を払って名前を教える」

「えっ……」

「…私はマルチ、ケルベロスとか、ブラックマタギと呼ぶ者もいるけど…」

少女は狙撃銃を肩に乗せ、トトの方へ向き直りそう言った。

ステラはトトの前に立ち、彼女と対峙する。

しかし、マルチの口から発した言葉はトト達を驚かせた。

「ステラ、トトを連れて行きなさい」

「えっ!?!」

狙撃銃の少女が唐突にそう言ったことに、トトは困惑した。

自分も先ほど頭を下げた身とは言え、見逃すと思っていなかったのだ。

マルチはトトの方を見て。

「アジーンを追いかけなさいいけない。気が変わらないうちに行つて」

トトは後ろから肩を掴まれる。

驚いて振り返ると、アレスが立っていた。

「トト、急げ。民兵隊が来る前に離れるぞ」

アレスの声にハツとしたトトは彼を一瞥して頷き、その場を離れるために走り出した。

ステラは一度マルチと目を合わせ、言葉を交わすことなく二人に続いた。

止まない雨の中、夜になりつつある街の中を三人は走り抜けていった。

~~~~~

アンドレの車に爪と牙を立てていたケルベロスであったが、突然に攻撃を停止し自分の主人のいる方へ三つの顔を向けた。

「止まった!?!」

車の屋根はケルベロスの重さで潰れてしまっており、ユナとアンドレは床に這いつくばってその牙と爪からどうにか逃れているような状態であった。

三頭の怪物はそのまま車から飛び上がり、地面に降り立つと主人のいる場所へ駆け抜けていった。

「な、なんだったんだ…?」

アンドレとユナは呆然としながらその後姿をみているしかなかった。

しかしものの十秒たらずで民兵隊が発砲してきたため、二人は脱兎の如く逃走を再開させるのだった。

(続く)

雨が降る中、傘も刺さずにマルチは三人が走っていく背中を見つめていた。

遠くから銃声と車のスキール音が響いている。

「ケルベロス！ケルベロス！」

マルチは後ろから聞こえる耳障りな声に振り返る。

そこにはデッドマスター「プルート」とスカルヘッドが居た。

そんな彼女の目はマルチを軽蔑しているかのようで、降りしきる黒い雨よりも冷たかった。

「一体どういう風の吹き回しかしら？ゾディアックの三番位ともある貴女が。よりもよってステラすら取り逃がすなんて」

「……………」

マルチは答えず、狙撃銃を肩に乗せる。

「…………裏切り行為とみなして、貴女をここで殺してもいいのよ？私は」

「あなたには無理」

「なんですって……………」

マルチの一言にプルトの表情が変わる。

目を見開き、翡翠色の眼光を彼女に向け、得物である鎌の刃先を彼女に向けた。

しかし、マルチの表情は変わらない。

「ッ!!」

プルートの何かの気配を感じ、翼を羽ばたかせて後ろに飛ぶ。直後、彼女が立っていた場所にケルベロスがその爪で地面を抉った。

「あなたは私とこの子には勝てない、私は先に戻る」

「待ちなさい！命令を無視する気!?!」

「捕縛対象はトト一人のはず。なのにあなたはステラの抹殺を優先した。命令違反はお互いさま」

マルチはそう言うのとケルベロスに跨って、そのまま走り去っていった。

残されたプルートは彼女の言葉に歯噛みをした。

「チツ……！スカルヘッド、二人を探し出さない……！生け捕りでよ……！」

「サガス！サガス！」

雷が鳴り始める中を、スカルヘッドが飛んでいく。

そして、プルート目掛けて落ちてきた稲光を、彼女は鎌で二つに切り裂き、

稲光はそのまま街に落下し、辺りを停電させたのだった。

~~~~~

停電はトト達も気が付いた。

同時に夜はアレスに懸念を抱かせた。

夜はクリーチャーが活発に活動するのだ。そして停電で辺りは更に暗くなっている。

奴らにとつてこれほど都合の良い状況は無い。

「もうすぐ構内列車の車両基地だ！そこまで頑張れ！」

「ハア、ハア……」

街中を走るアレスから数メートル離されながらもトトは走っていた。

しかし息も絶え絶えで、もう目的地が見えているというところで、ついにへばってしまった。

アレスは足を止め、トトの方へ振り返る。

「トト、もう少し。走らなくていいから。」

「う…うん…」

ステラにそう言われ、トトは彼女に肩を借りながら歩いた。自分のことではあるのだが、体力の無さに情けなさを感じるのだった。

~~~~~

そうしてようやく車両基地は目と鼻の先というところまで来たトト達であったが、アレスに言われて建物の影に身を隠す。

すぐ近くに民兵隊のトラックが停まっていたからであった。

そして民兵隊達の前に、あのゾディアックの “ デッドマスター

” プルートが降り立つ。

彼女を見た兵士たちはすぐさま整列し、彼女は彼らにこう言った。

「あの子達はこの付近に来ているはずよ。7時までを探し出して私に伝えなさい」

もうここまで足取りを気づかれているのかと、トトは思った。

プルートはそう言うのと、翼を羽ばたかせてどこかへ行ってしまった。

「よし聞いたな！車両基地の守りを固めろ！列車はこれから出る便を最後に基地を閉鎖するぞ！」

民兵の話聞いたトトたちは、自分たちに残された時間も少ないことを悟り、すぐに行動に出ることにした。

本来ならばしっかりと考えるとところだが、先を急いでいく以外に進む道がないことにトトもアレスも不安があった。

しかし二人共、今まで自分たちの身に起こったことがあまりにも突飛すぎたせいか、どうにかかなりそうな気が無いわけではないことが嫌なのだ。

それはやがて慢心になり、いつか足を掬われると思ったからだ。

くくくく

トト達が最初に来た車両基地を囲むフェンスに沿って東に行ったところで、作業員用の勝手口を見つけた。

幸いにも見張りが二人しかいない。

アレスは握りこぶしくらいの石を拾うと、大きく振りかぶって片方目掛けてそれを投げつけた。

石は頭にぶつかり、もう一人がそれに気を取られた隙について剣の鞘で頭を殴り、気絶させた。

そうして、トトも意外に思うほどあっさりと車両基地に侵入することができた。

車両基地に入ったトトはステラが入ったのを確認して扉を閉めて鍵をかけた。

そして彼女を見て一つ頼みごとをすることにした。

「ステラ、お願いしてもいいかな？」

「？」

ステラは首を傾げる。

「その、列車に乗るまでは武器を使わないでほしいんだ。…いいかな？」

「それは命令？」

「ううん、お願い」

「お願い……？」

「えっと、守れたらそうしてほしいなって」

ステラはトトの言葉に二度三度首を傾けてから、縦にうなずいて、  
「……わかった」

と言った。

「二人とも、そろそろ進むぞ」

アレスの言葉にはっとしたトトは慌てて彼の後ろに続いた。

車両基地の中は様々な列車が一列に並べられていたり、コンテナが積み上げられている場所や、車両を入れるための倉庫が並んでいる。見張りの他にまだ作業している人間も多く見えた。

しかし見張りとは別に、作業員たちの監視をしているようにトトは思えた。

そしてその予想は正しかった。

トト達が人目を避けて歩く最中、遠巻きに倒れた作業員が目に入ったのだ。

それを見た民兵の一人がその人を蹴り飛ばして言った。

「おい！さっさと作業を続けろ！発車時刻を20分繰り上げてるんだからな!!」

「えっ…!?!」

トトはその言葉に耳を疑った。

民兵は最後の便の発車の時間を早めたのだ。

作業員がその作業に追われ急ピッチで使われているのだ。

しかしそんなこと以上に雨の中必死に働いている作業員を蹴り飛ばした兵士を、トトはどうしても許せなかった。

「おい」

肩を掴まれ、トトはハツとする。

アレスがトトの左肩に手を置いていた。

「君の気持ちはよくわかる。今すぐ飛び出したくなるのも無理はない。だが今は堪えろ」

「……。すみません」

トトはうなだれた。アレスが肩に置いていた手を放す。

「民兵隊は常日頃からああやって権力を日増しさせている。だが、アイツらのあんな行いは、いつか終わりにしなければな。今は先を急ぐぞ。」

アレスはそう言ってまた歩き始める。

「トト……?」

ステラがうなだれたままのトトの顔を覗き込む。

トトは目が合うなり、さっと視線を逸らして、顔を上げて歩みを進

めた。

人目から隠れながら歩いていると、かなり作業員や民兵の数が増えてきたのをアレスやトトは感じていた。

そうして、作業員達が貨物列車に荷物を運び入れているのを見たトトは、あれが自分たちが乗り込む列車なのだと確信した。

「あれで間違いなさそうだな」

「はい」

アレスの言葉にトトはうなづく。

首都グランドセントラルへ向かう為の手段にようやく辿り着いた。

残る問題はどうかやって乗り込むかというところであった。

「トト、アレは何?」

「へ?」

服の裾を引かれ、トトはステラに問われた方向に目をやる。

そうして、見たものにわが目を疑うこととなった。

「奴隷だ……」

「奴隷?」

そこに居たのは、鎖と手錠で繋がれ、民兵に見張られながら一列に並んで貨物室に乗せられていく奴隷の少年少女たちの姿だった。

歳もトトとさほど変わらない。

「あれもこの街の風景だ。貧しい家の子供をああして民兵隊に売らざるを得ない住人もいるんだ。アイツらは奴隷商と繋がっていて、首都で競売にかける気なんだろう……」

アレスは言った。同時に列車に乗り込む為に都合の良い理由だとも思った。

自分の話を聞きながら、彼らを見ている二人を隠すための、考えが浮かんだのだ

「私に考えがある。が、二人聞いても怒るなよ?」

~~~~~


「よし！閉めろ！発車前点検と確認が済み次第、発車しろと運転士に伝えろ!!」

奴隷の列の最後尾が貨物室に乗り込んだところで、見張りの兵士が作業員に指示を出す。

そうして貨物室の戸が閉められようとしていたときに、作業員がぼろ布に身を包んだ二人の子供を連れてきた。

「おーい！二人ほど置き去りにされてたぞ??こいつらもだろ?」

「何??おい！奴隷が二人逃げてただと??」

兵士が作業員に銃を突き付けて詰め寄った。

「私が見つけてなかったらおおごとだったんだぞ?発車時刻が迫っているのに揉めたくない。」

「奴隷の人数を確認させる」

「いや、そんな時間はない。すぐに発車させないと」

ガガガガガ!!

兵士が持つていた突撃銃を上に向かって撃ち、作業員を脅かせる。

それはその場にいた全員をも驚かせるには十分に過ぎたもので、空気が一気に張りつめる。

奴隷二人はその音と光に怯んで互いに身を寄せ合った。

「……この権限は俺だ。俺が決めることだ。」

「ゾディアック プルート」は認めているのですか??」

「何……?」

作業員の言葉に兵士は少し焦った様子だった。

おそらくは自らの独断で動いているのであろう。

「ここだけの話と言うことにして、この奴隷をさっさと積み込んでしまいませんか?私も面倒事は御免です」

「貴様は俺に楯突くつもりか!?!俺達が民兵だと分かってやってるのか!?!」

彼自身、とつとつこの仕事を片付けたいに違いない。

作業員……に扮したアレスは、その深紅の瞳で彼の怠惰さを見抜いていた。

「私がこの奴隷を責任もって運びます。それで手を打ちましょう」

「……なら、お前もあの貨物室に乗れ」

「構いませんとも」

そうしてトトとステラは奴隷に扮して、アレスは鉄道作業員に扮して、奴隷の詰められた貨物室ではあるが、貨物列車に乗り込むことができたのだった。

「発車しろー」

兵士の一声と共に、鉄の車輪がレールとの摩擦音を鳴らしながら、ゆつくりと動き始めた。

「へくしっー」トトは下着も身に着けずに、ぼろ布一枚で雨に打たれたためかくしやみをした。

そして間近でこの世に希望をみいだせなくなった目をした奴隷たちの姿を見て、やるせなさを感じた。

彼らを助けようにも、どうやって助ければ良いのか。

助けたとして、その先はどうやって彼らを導いていけば良いのか。

トトにそんなことを考えるだけの知識も経験も無かった。

ドン！ドン！ドン！

ガガガガガガガッ！

遠くの方から銃声と民兵達の声が聞こえる。

街にクリーチャーが出たのだろう。

トトはあの時の巨大な怪物を思い出して、肩をすくめた。

国境都市に居たときは、あんな怪物も、遡ればあのガソリンスタン

ドで出会った怪物にも会ったことは一度も無かった。

冷えか恐怖か、体が震え始める。

そんな彼を知ってか知らずか、ステラはトトの隣にぴったりと身を寄せて、彼の左手に右手を重ねた。

彼女の手から感じるぬくもりが、冷たい空間に身を置くトトの不安を和らげた。

雪原の中灯した、蠟燭の火のように。

(三章
U
n
d
e
r
W
a
t
e
r
W
a
n
d
e
r
e
r
了)

工業都市を抜けた先、山の麓に広がる樹海を縫うように開拓された獣道を、一頭の獣が走り抜けている。

否、一頭という言葉は語弊があるかもしれない。

その獣の頭は三つあり、それぞれが別々に呼吸をし、目と耳を動かしていたからだ。

その背中に跨る黒髪の少女は何かに気付き、空を見る。

獣も呼応するかのように、足を止め同じ方向を見た。

彼らの頭上に、黒い影が見えた。段々と近づいてきている。

それもかなりの速度で。

「ウラギリモノ！ハカイスル!!」

それは緑色の光を纏った黒い頭蓋骨であった。

少女は身の丈以上もある狙撃銃を抜き、片手で頭蓋骨に紫の光弾を放つ。

弾道は頭蓋骨の上半分を貫くも、その口から緑色の巨大な光を放つたまま、彼女達目掛けて落下した。

落下の瞬間、爆発にも似た衝撃が起こり、森の中の小動物たちのざわめきが響いた。

光はすぐに消え、ざわめきもやがて消え失せ、

辺りはまた静かな樹海に戻っていった。

~~~~~

工業都市ルールを脱出したアンドレは、そのまま燃料が尽きるまで峠道をデタラメに走らせて、最終的に湖のそばある木の下に車を停め

て枝を屋根に乗せて出来る限り車を隠した。

元々屋根が潰れてぼろぼろになった車だ。

見つかったも乗り捨てたと思うだろうと、アンドレは思った。

散々枝集めに付き合わされたユナはものすごく不機嫌な顔をしつつも、車から使えそうな備品をかき集めて、無事に残っていたトラックに詰め込んでいた。

アンドレもそれに手を貸しなんとか荷物をまとめ上げ、徒歩で移動が可能になる頃にはすっかり日が暮れてしまっていた。

ランタンの明かりだけが二人を照らす中、アンドレが缶詰に入った煮豆を食べながら切り出した。

「明日には歩いて此処から離れよう。このピークオード号ともお別れだ」

アンドレはそう言いながらそうして物惜しそうな顔で車の床を撫でた。

「そんな縁起でもない名前を付けっから車をダメにするんじゃないのか？」

ユナはそんな彼を見て悪態をついて、毛布にくるまり横になった。シャワーを浴びれないことに気分を少し悪くさせながら。

しかしアンドレが寝息を立て始めたころ、汗ばんだ体が服にまとわりつく感覚に耐えられなくなったユナは体を起こして車の中から手拭いを取ると、月明かりに照らされた湖の岸边に行き、水浴びの用意を始めた。

どうせぐつぐつと眠っているアンドレ一人、他に誰が来るわけでもないと思いながら。

ユナは首都からアンドレとこのツルギ山の峠道を通った時のことを思い返す。

あのときも、そしてこの前もこの森へは足を踏み入れたが、いつもこの森にはクリーチャーは来なかった。

やはり噂に聞く森に棲む精霊が何か関係しているのだろうか、ユナは考えながら水を掬っては汗でべたつく体を流した。

そうしてひとしきり汗を洗い流し終え、何も身につけないまま腰ま

で水が浸かる場所まで行き、体を水に浮かせて月を眺めているとき、ユナは気が付いた。

森の中、どこからか枝を踏む音が聞こえてくる。

ユナは一瞬慌てたが、焦らず、水音を立てないよう鼻のすぐ下のところまで体を沈めた。

そうしてゆっくり岸へ、自分の服がある場所まで戻ろうとした。

ゆっくり、あともう少し。と、そのとき、森の木々の間を抜け、足音の主が姿を見せた。

女の子だった。胸に子犬を抱きかかえ、今にも転びそうなほど足取りはおぼつかない。

そして、力尽きたのか足を取られたのか、湖を前にそのまま倒れこんでしまった。

ユナは慌てて水から上がり、走って彼女に駆け寄る。

髪は黒く、眼帯と大きな耳当てをつけた少女だ。

「ねえ、大丈夫?？」

少女は答えない。抱きかかえたままの子犬が苦しそうにじたばたともがいている。

ユナは少女の腕から子犬を取り上げて驚いた。

その子犬の頭は三つあつたのだ。

「お、おい暴れるなっ」

子犬はユナの手から逃れると少女に寄り添い、小さく鳴いた。

よほど親密なのだろうとユナは思った。

ユナはとりあえずと少女を仰向けにした。

「う…」

「大丈夫?・僕の声が聞こえる?？」

少女はうつすらと眼をあける。

視界はぼやけているが、彼女の眼には月明かりに照らされるユナの顔は、まるで天使の顔に見えた。

それに安心を覚えたのか、そのまま彼女は目を閉じた。

「あ、ねえー」

ユナが体を揺らすのが、すぐに眠っているだけだと気づき、安堵した。

子犬がまた小さく鳴き声をあげた。

「大丈夫、眠ってるだけだよ」

ユナは子犬の頭をなでるとクシユンとくしゃみをした。

何も身に着けていないことをすっかり忘れていたユナは立ち上がり、服を着るために一旦その場を離れるのであった。

~~~~~

少女はうつすらと目を開く。

誰かの上着をかけられていて、傍らには眠る自分の「家族」の寝息が聞こえる。

空が白み始めていることから、自分が最後に意識を失ってから時間が経っているのだと思った。

体を起こしてそこで初めて自分が片時も離れることなく連れていた子犬以外の、もう一人の存在に気が付いた。

白いシャツと黒いズボンという出で立ちと、整った容姿、短く切りそろえられた青い髪。

長いまつげを揺らして眠る姿では性別を判別することは難しかった。

「……」

少女は僅かに聞こえた空を切る音を察知し、周囲を見渡す。

「隠れてないで出てきなさい……フリーアエ」

少女が何も無い場所に向かってそう言うのと辺りの木々の枝葉が風に揺れ、その風の中から一人の女性が姿を現した。

黒い服を身にまとい、頭には一對の角が生え、眼鏡をかけたその目からは絶えず涙が流れている。

「……気付いていないと思ったわ。ケルベロス」

「忘れたの……？私の右目は1キロ先の銅貨を狙い撃てるし、この耳は半径500メートルのほぼ全ての音を聞き分けられるのよ？風に紛

れて近づいてくる貴女の足音くらい分かるわ」

「…そう」

フリーアエと呼ばれた女性は左手に刀を出現させた。

ケルベロスと呼ばれた少女が身構える。

「なんのつもり…?」

「別に…、今あなたを消したところで、状況は好転しない。今回来たのは、伝言のため」

「…伝言…?」

ケルベロスは左腕に子犬を抱え、体は自分の後ろで眠る彼を守ろうと立ち上がる。

フリーアエは眼鏡をはずして目元を拭って掛け直してから口を開いた。

「私の演算では今あなたの後ろに居る者は『彼』と出会う。利用価値がある」

「…信じられないわ」

「…信じる必要はない。演算で予知した未来は、必然…」

フリーアエはそう言って風に乗し、そのまま姿を消した。

「…利用価値…」

「う…ん…?」

声がして少女は振り向く。

彼が目を覚ましたようだった。

「ん…?ああ、君、もう平気なの??」

子犬を抱きかかえる少女を見て、彼は問う。

少女は頷き、まだ腕のなかで眠る子犬の頭を撫でながら頭を下げた。

「私は平気。このぐらいの怪我なら数時間休めば治る」

「そうなの? あ、でもその子の耳は手当しておいたから」

少女が子犬を見ると、頭の一つの耳のところに包帯が巻かれていることに気が付いた。

彼がやってくれたのだと思った少女は彼に上着を手渡して、もう一度頭を下げた。

「…ありがとう」

「お礼はいいよ。僕が好きでやってることだから」

彼は上着を受け取って立ち上がり、服についた砂を払う。

少女は名前をまだ聞いていないことを思い出して、問いかけた。

「あの、貴方の名前は…?」

「ユナ。ユナ・マシユーセツツ。君は?」

「…マルチ」

「よろしく、マルチちゃん」

朝日が昇って光が差し込んだためだろうか、マルチの目には、ユナの姿が物凄く特別な存在に見えた。

他者に対して、忘れかけていた感情が動き始めていることを心のどこかで感じていた。

“キャンキャン!”

少女の腕の中で子犬が吠える。

「あ、この子はアジーンっていうの、右がドヴァーで、左がトゥリー」

「アジーンね、よろしく」

ユナは子犬の頭を撫でる。

そんな二人の様子を遠巻きにアンドレは見つめ、三人分の食事が必要だと考えながら簡易コンロに火を点けた。

~~~~~

「なあユナ、煙草くれよ。俺の分が切れちゃったんだ」

「僕も無いよ」

「おい、一本残ってるだろ、知ってるぞ」

「アンタに吸わせる分がないって意味だよ」

「…ふふ」

「ワウ！」

(  
S  
i  
d  
e  
  
S  
t  
o  
r  
y  
  
1  
  
)

四章 　　The Edge of the Ride  
ge 　　1

工業都市ルールの車両基地の前に整列した民兵達は目の前に立つ女性に怯えていた。

捕縛する人間を捕まえられなかったどころか、貨物列車に乗った可能性が持ち上がったのだ。

この失態に対し、彼女、デッドマスターの二つ名を持つゾディアックの七番位プルートは鎌の刃先を地面に掠らせて火花を散らしながら目の前の兵士達を静かに見つめていた。

「で？ステラもトトも見つからなかったうえにこの街から逃がしたということでもいいのかしら？」

民兵達は答えない。

答えられないのだ。

下手な言葉を紡げば、首と斬り飛ばされるに違いないと思っていたのだ。

その場にいる兵士達全員が。

プルートは苛立ちを抑えきれず鎌を振り上げたその時だった。

“ドルルオン!!”

爆音をとどろかせながら、三台のバイクが彼女たちの目の前に現れた。

彼らの跨るバイクには数本の巨大なランス（円錐型の槍）が専用のホルスターに収められていて、まるで巨大な排気管のようにも見え

た。そして彼らは全員馬に用いる頭絡のようなものを頭に着けており、服の肩には八本足の馬と槍が描かれていた。

一人が降りてきてプルートに声を掛ける。

「自分の部下でもない民兵を相手に憂き晴らしか？デッドマスター？」

「スレイプニル…！貴方に関係ないでしょう？金で雇われているだけの分際で…」

「どうかな？ここで無駄に兵を殺せばキレるのはあの女帝だ。ノコギリ女の怒りを鎮める役はアンタも御免だろう？」

スレイプニルと呼ばれた男はそう言うと言おうとフシユウウーと大きく息を吸って吐いた。

「…覚えておきなさい」

プルトはそう言って翼を広げて飛び立つと、そのまま何処かへ去って行った。

スレイプニルはそれを見届けたのち、兵士たちに指を指してこう言った。

「お前ら、あのノコギリ女に伝えておけ。悪いが手柄はこのスレイプニルとスタングが貰い受けるとな」

スレイプニルはそう言うと言おうとバイクに跨り、後輪から白煙とスキール音を立てて引き連れた部下と共に走っていった。

道路から線路を沿うように、トト達の乗る貨物列車への追跡を開始したのだ。

~~~~~

トトは奴隷たちに囲まれ、列車に揺られている。

隙間風に震えるトトにアレスが服を手渡した。

「ここまで来れば大丈夫だろう。早く着替えるんだ。グラントセントラルの手前の駅で列車が停まるはずだ。そこで列車から降りる。そこから歩きになるがな」

「停まるんですか？」

「ああ、駅でアイツらが話していたことが正しいならな」

服を受け取るトトの問いかけにアレスは答えた。

兵士達の話聞いてる余裕が無かっただけに、アレスの存在がトトには心強かった。

服を着たトトは外套をステラに羽織らせた。

「？トト、私はべつに寒くはない」

「あ、いや、着替えるときにあつたほうがいいから…」

「？」

ステラにはトトが顔を赤くするのは何故かは分からず首を傾げた。

トトは更に肩を叩かれる。アレスが銃と弾などが入った自分の鞆と、ステラの服を渡してきたからだ。

「君の銃だ。返しておく」

「…ありがとうございます」

トトは死んだようにその場に横たわる奴隷たちを見て、彼らの為に行動できない自分の今にもどかしさを感じた。

「駅に着いたら覚悟しておけ。今度は人を撃つかもしれないからな。」

トトは拳銃のシリンダーから薬莖を出して新しい弾丸を装填した。

祖父から貰った弾丸は、これで残り14発となった。

「トト、これはどうしたらいい？」

ステラに声をかけられて振り返ると、ステラが着替えを終わっていたが、

外套とは別にもう一つロザリオを持っていた。

それはトトが物心のついた頃から、お守りとしていつも持ち歩いているものだった。

いつもそうしているから、外套の内ポケットに入れたままであったことを、

トトはすっかり忘れていたのだ。

「あ、うーん…」

外套を受け取ったトトは、そのロザリオをステラから受け取ると、そのまま彼女の首に掛けた。

ステラは意図が分からず、首を傾げた。

「?、トト?」

「君が付けてて。預かってほしいんだ。」

「それは、命令?」

「ううん、お願い」

お願いと言われ、ステラは少し考えたように俯いてから頷いた。

「…お願い、聞いた。」

「ありがとう」

「お話し中のところすまないが、あまり時間はないぞ」

二人のやり取りにアレスが割って入った。

彼は列車の走行音に混じって近づいてくるエンジンの音に気が付いていた。

「この貨車から移動するぞ。着いてくるんだ」

三人は奴隷の乗る貨車の扉を開け、前の貨車に乗り移る。

近づいてくるエンジンの音はトト達にも聞こえた。

だいぶ近い。もうすぐそこまで迫ってきている。

トトはそう感じた。

そうして物資が多く積み込まれたコンテナの中に入り、前の貨車に移動しようとトトが歩き出そうとした瞬間、トトはステラに思い切り掴まれて前に倒れこんだ。

しかしその直後、側壁から何かが突き刺さり、コンテナの内部にまで達した。

アレスも咄嗟に伏せたため、全員が無事であったが、トトはあのエンジン音の主たちの恐ろしさを思い知った。

すぐにその何かは引き抜かれ、側壁に大きな穴を造った。

今やエンジン音は無数に中で響き、もはや爆音も同然であった。

「コイツらは…!」

アレスが吐き捨てるように言った。

彼らの存在を知っていたのだ。

ゾディアックの12番位を冠する男 “スレイプニル” と、

彼に従う兵隊 “スタング”

バイクを駆り、手持ちの槍を用いて戦う騎兵部隊。

ゾディアックの位は最も下ではあるものの、その実力を国中に爆音と共に轟かせている。

トトもアレスと同じことを思い、やはりあるときマルチが言っていた、自分の持つ何かを狙っているのかとも考えた。

しかし考えてる暇は無く、トトが動く前にステラは立ち上がり、大砲を外へ向けて発砲し、壁に大きな穴を開け、

外へ飛び出して貨車の屋根に飛び乗った。

そうして彼女はそこで初めて攻撃を仕掛けた者達の姿を見た。

見える範囲だけで追跡者は7人

バイクに跨る彼らの右手には、騎兵が突撃に使う大型のランスが握られていた。

さらにバイクには予備のものであろうランスが5本も備え付けられている。

「ステラ!!」

トトは叫ぶが、彼の声は彼女には届かない。

列車の音、バイクの爆音、風切り音が完全に遮ってしまっているからだ。

そして彼女は今、彼を守るために囷になろうとしている。

「ブラックロックシューター！お前の王子様はこのスレイプニルとスタングが頂くぜ！」

スレイプニルはそう言って、バイクを加速させ貨車の上にバイクごと飛び乗って槍をステラに投げつけた。

「スレイプニル！」

ステラは飛んできたランスを大砲で弾き返し、砲弾をバイクに向けて撃つ。

しかしスレイプニルは、片手で巧みにバイクを操作し、右へ左へ鳥のようにひらりと砲弾をかわしていく。

そうして彼女を肉薄し、ランスをもう一本取って大きく横薙ぎに振るった。

しかしステラは剣を振るい、それを一度受けて押し返した。

スレイプニルは体勢を大きく仰け反らせてしまい、その隙をステラは逃さずに大砲を向けるが、

彼はそのままバイクのアクセルを全開にし、車体を大きくウイリーさせたかと思うと、そのまま前輪を振り下ろして、砲身に叩きつけた。そのままスレイプニルはバイクから飛び上がり槍をステラに降り下ろす。

ステラは後ろに転がって避け、再度斬りかかる。

バイクの上で剣と槍で火花を散らし、互いの得物が交差する。

そして鏢迫り合いの最中、スタングの一人が槍を構えた。

「手を出すな！お前らはヤツを捕まえろ!!」

スレイプニルがそう叫ぶと、その言葉を聞いた彼は槍を下ろす。

ステラにはその真意が分からなかった。

「わからない。何故そんなことを？」

「聞いてる場合か？ブラックロックシューター!!」

スレイプニルがそう言って押し飛ばすが、ステラは飛ばされた勢いを利用して大砲を引き抜いた。

スレイプニルもまた、大砲を引き抜かれバランスを崩したバイクの座席に戻りアクセルを吹かす。

「まあせっかくだから答えてやるよ。お前の実力を試してみたかったのさ」

「なら、これ以上戦う理由がない」

「いいやあるんだなこれが。お前が俺の相手をしている以上、お前はアイツを守れねえ」

「…ッ！」

その言葉を聞いたステラは分かっているとわんばかりに大砲を撃つ。

スレイプニルは槍を投げて砲弾を食い止め、もう一本を出して彼女に突撃をした。

ステラは転がって避け、更に砲弾を撃つ。

しかし列車の屋根の上と言う狭い場所にも関わらず、スレイプニルは巧みにバイクを操って砲弾をかわしていく。

「さあどうするつもりだ？ブラックロックシューター!?どう戦う!」

「ッ…！黙って!!」

「ステラ！お願い！戻ってきて!!ステラ!!」

トトはそんなステラをどうにか呼び戻せないかと考えていたが、そんな彼に狙いを定めるライダーの存在にトトは気が付いていなかった。

「トトー！」

「えっ…うわあ!？」

アレスの言葉にハツとしてトトは振り返るが、視界の端にランスを構えるオオカミのマスクが見えた直後に先が刺又の様になっているランスがトトに命中し、壁に繋ぎとめられてしまった。

「う…ぐう…!!」

トトは腕ごと体を拘束されてしまい、銃が抜けなくなってしまった。

「トトー！」アレスはトトに駆け寄り、彼を拘束している槍を引き抜こうとする。

しかしトトにはもう一度槍を構えている姿が目に入った。

今度は先が尖っている。当たればひとたまりもない。

「アレスさん!!」

トトが叫ぶが、同時に槍がアレス目掛けて投げられた。

アレスは左手で腰に携えていた鞘から剣を抜き、一撃で槍を弾き飛ばす。

トトはその剣を見て驚いた。

彼が逆手で引き抜いたその剣の姿に。

彼のそれは本来ならば片手半剣と呼ばれるはずのその剣は、中ほどで刀身が折れてしまっている。

長年使い込まれていたが故なのか、剣の鏢や柄はくたびれてこそいたが、

しかしそれでもその剣は品格を備えていた。

「私にこれを抜かせるとはな！」

アレスはそう言って銃を抜いて狙い撃つが、相手は鎧を纏っている

のか、弾丸が弾かれてしまう。

撃たれたライダーはそのまま速度を落として視界から姿をくらませた。

「敵は優秀だな。しかし…」

アレスは剣を収めてから、銃のボルトを引き更に続ける。

「しかし…、これだけの騒ぎが起きているというのに、乗務員は何をしているんだ?？」

トトは言われてみれば確かにそうだと思った。

数台のバイクに列車が追いかけてられているという状況で、民兵だつて乗っているはずなのにも関わらずだ。

この列車は何かおかしい。トトがステラにそう伝えようとした矢先だった。

更に前の車両に移るための扉が向こう側から破られたのだ。

何事かと二人が銃を向けた先には、人の姿をした人ならざる者がこちらに向かつて、フラフラと歩み寄ってくるのだ。

それらは列車に乗った作業員の服を着ているものや、見張りの民兵隊の服を着た者まで居た。

その異様な光景に、トトは震えた。

「ツ…い…トト！下がっている！」

アレスは背中に背負った擲弾銃を抜き、その怪物達目掛けて砲弾を放った。

弾は先頭を歩いていた者の胸に当たった瞬間に爆発し、後ろに歩いていた者達をも爆風で吹き飛ばした。

その爆発は列車の外、屋根の上で戦っていたステラ達もはつきりと認識できるほどの出来事だった。

しかしステラは目の前の騎兵の相手でそれどころではない。

しかしスレイプニルは仲間の様子から自分たちが思ってもいない事態が起こっていることを悟った。

部下の一人が彼に手信号で合図を出す。

スレイプニルはその内容に悪態を吐いた。

「チツ、ホムンクルスか…！誰かが “アレ” をやりやがっ

たな…?」

「アレ?」

「お前には関係無い。だが…」

スレイプニルはステラの問いかけには答えないまま、バイクから立ち上がると、

そこからたった一回の踏み込みで一気に彼女との距離を詰めた。

「お前はここで脱落してもらおうぜ? ブラッククロックシューター!」

その言葉の直後、ステラは宙を舞い、列車の外へ放り投げられた。

(続く)

四章 　　The Edge of the Ride
ge 　　2

スレイプニルによって列車から投げ飛ばされたステラは宙を舞ったが、

地面に落下する刹那、左手で大砲を抜いて地面に撃ち込み、その反動と爆風で飛び上がった。

しかし、バイク部隊の四人がそれに気がつき、車体をターンさせると槍を構えて彼女目掛けて投擲する。

ステラは右手で剣を抜き、飛んできた槍を弾き飛ばす。

バイクはステラが着地してきたところを狙って四人の騎兵たちが槍を持って突撃を開始した。

スレイプニルの騎兵部隊 　　“ スタング ” 　　の突撃戦法だ。

迫りくるバイクの轟音と車体は大抵の者は恐れおののき、逃げ惑うしかなくなる。

体勢を低くし、ステラに狙いを定めた彼らの槍の切先がステラの体を貫こうとした瞬間、

ステラは剣と大砲で巧みに全ての槍を受け流しきってみせた。

そして、大砲を大きく振って、三人のバイクを破壊する。

「ぐああああ!?!」

カウルと前輪とフォークを破壊されたことと、その反動で三人は吹き飛ばされて、その場に倒れこんだ。

「わああああ!?!」

そのうちの一人が頭上へ落下するバイクに悲鳴をあげた。

それを見たステラは咄嗟に砲撃でそれを吹き飛ばす。

最初の攻撃をかわした一人は彼女のその行動に驚き、動揺した。

「何故だ!?!何故アイツを助けた!?!今まさにお前を殺そうとしてたんだ

ぞ!?!」

「……」

騎兵はステラに疑問を投げかける。

ステラは答えた。

「トトが嫌がると思ったから」

「舐めるなよ……!」

眉一つ動かさない彼女にそう言って、

騎兵の男はフルスロットルで跳ね馬のようにバイクをウイリーさせると、

槍を構えなおしてステラに向かって突撃を開始した。

確実に心臓を突き刺して殺すことに男は全ての神経を注いだ。

眼球に血液が集まって膨れ上がるような感覚を覚えながらバイクのアクセルは一ミリも緩めることなく、ステラに突撃し槍を突き出した。

“ ガキイイインツ!!! ”

しかし男の槍は叩き切られ、その反動で男は宙を舞い、そのまま地面に転がった。

バイクは乗り手を失い、横に倒れてけたたましい音が響く

男は打ち所が悪かったらしく、立ち上がれずにその場で激しく咳き込んだ。

「……うっ、げほっげほっ……ごほっ!」

ステラはほぼ無傷で横倒しになったバイクを起こして跨る。

「な、……ま、待て!」

男の言葉にステラは一瞥して男の目を見た。

「ユイト・サーズデイ……俺の名だ!次は負けんぞ!ブラックロックシューター!!」

「……」

ステラはその言葉に答えることなくバイクを発進させた。

引き離された列車に追いつくために。

そしてユイトと名乗ったその男の目の前を、三両編成の列車が通り過ぎた。

ステラは線路を沿うようにバイクを走らせ、列車に追いつきはじめてたときであった。

後ろから追い上げてくるもう一つの列車に気が付いて振り返る。彼女の目に映った列車の姿は異形であった。

先頭車両には黒く塗られた鋼鉄のラッセルがまるで船の船首を思わせた。

全ての車輛が鉄板で覆われ、砲塔に取り付けられた機関銃の銃口は彼女に向けられていた。

「見つけたぞー！黒服!!」

列車に取り付けられたスピーカーから声が響く。

それは民兵隊が保有する装甲列車だった。

工業都市からステラ達を追跡するために猛スピードで追い上げてここまでやってきたのだ。

「ガキの前にまずはお前からだ!!」

列車の屋根から民兵隊がライフルで発砲してくる。

ステラはさせまいと大砲で列車の破壊を試みる。

しかし、

“ ガンツ!! ”

「弾いた…!?!」

「無駄だ！たとえ17ポンドの砲弾でもこの装甲は貫けん!!」

砲弾はラッセルに弾かれ、遠くの方で爆発した。

後ろの車輛に取り付けられた機関銃がステラの乗るバイクに狙いを定めた。

けたたましい銃撃音と弾丸の雨霰が彼女に襲い掛かる。

ステラはバイクを線路の上に乗り上げさせて銃撃から逃れる。

しかし列車は更に加速して、彼女ごとバイクを轢き潰そうとする。

ステラはバイクの上で立ち上がりそのまま高く飛び上がった。

バイクがラッセルに弾き飛ばされ、破壊されてしまう中、ステラは空中で自らの足先に魔法陣を展開した。

「浮揚術式、展開」

ステラはそう言うとそのままその魔法陣を足場にして蹴り上げる

と、列車に向かって一直線に飛んでいった。

装甲列車に乗った兵士達は、一連の動作の速さに呆然とした。

「隊長、今のは…!？」

「あのガキ…魔術も使えるのか…これは面白い。列車を加速させろ！あの貨物列車は破壊しても構わないと通達が来ているからな！」

「は、破壊…ですか？」

一人の民兵が狼狽えた様子で部隊長に言った。

部隊長は彼のその態度に苛立ちを見せた。

「聞こえなかったのか！早くしろ!!」

「しかし」

“ズドンツ!!”

車内に響いた銃声。

部隊長に思いとどまらせようとした民兵は、

頭から血を流し、その場に倒れてピクリとも動かなくなった。

兵士達は怯えた。

部隊長が自分の部下の頭目掛けて鉛弾を叩き込んだのだ。

怯えるなどという方が、無理な話だ。

「早くしろ!!」

「は…はっ!!」

(続く)

四章 　　The Edge of the Ride
ge 　　3

「ステラ？」

トトはふと直感的に、しかしどこか確信めいたものを感じた。ステラの身に何かがあったような気がしたのだ。

しかしそんな彼が置かれた状況は良いとは呼べなかった。

目の前から現れる人の成れの果てのような見た目の怪物達を退けた直後だったからだ。

吹き飛んだ貨車から流れ込んでくる走行風は、トトに強風の日に国境の壁に立ったときのことを思い出させる。

吹き飛ばされた人の姿をした人ならざる者達は、体がバラバラになってもなお動いていたが、びゅうびゅうと吹き込んでくる風に這いずることしか出来ない。

先へ進もうとアレスと二人でなんとか歩いていくが、寒さで体力を奪われていくのを感じていた。

しかし進まなければ、今バイク部隊の攻撃が来ればアレスでもどうすることも出来ないかもしれない。

トトは祖父の猟銃を持ち、自分の手元に今はないロザリオを思い浮かべながら祈った。

「ステラの無事と、ここを切り抜けるための勇気を僕に貸してください……！」

「トト！早くここを抜け……ッ！」

アレスはトトの方を振り返り、言葉を詰まらせた。

彼の背後、目と鼻の先に、バイクの轟音と共にスレイプニルが現れたからだ。

目標を見つけたスレイプニルだったが、その目の前の少年がまとう空気に眉をひそめた。

先ほどまでは感じられなかった闘志のようなものがそこにはあった。

そしてそれはアレスも肌で感じていた。

列車を並走していた騎兵達も、わけがわからずにうろたえてしまうほどだった。

「…トト？…君は…」

アレスが言葉を漏らす。

トトは顔を上げて、拳銃を向けた。

「僕は逃げない。貴方と戦う。」

「…くくくつ、くははははははははっ!!」

スレイプニルは声を上げて笑う。

彼の口から出た言葉に面食らい、思わずあふれ出た笑いだ。

「ガキが…何を言い出すかと思えば!」

スレイプニルはバイクから飛び降り、槍を構える。

「いいだろう、その勝負乗ってやろう!」

アレスは剣を取り、彼の部下もまた槍を投げる姿勢を取る。

……が、

「妙な気を起こすなよ黒服。うっかり貴様ごと刺し貫くぞ。」

「……。」

「お前らも手を出すな。コイツは俺が相手してやる。」

スレイプニルのその一言に部下は止まった。

「アレスさん、大丈夫です。僕は、負けません。」

そのトトの言葉に、アレスは剣を収めて一步下がった。

何故そうしたのかは彼自身にも分からない。

ただ、トトが本当にこの勝負に勝てる確信が心のどこかにあった。

「行くぞお!」

スレイプニルはそう叫ぶと同時に地面を蹴り上げトトに突貫した。

トトは一步もその場から動かずに、彼の目に狙いを定める。

スレイプニルはトトが引き金を引く前に彼の銃を弾き飛ばせる確

信があった。

彼の槍が銃口にぶつかる刹那、突如上空から降ってきた何かによつ

てその先端が破壊された。

「何っ!？」

眼前に現れたその存在に、スレイプニルは目を見開く。

彼の目に映る、青白い炎を宿した左目。

トトの前に背中を向けて、彼を守るように立つそれは―

「トト、大丈夫？」

「ステラ……！」

「バカな……!？」

二人の言葉に、ステラは答える。

「トトは、私が守る。」

右手に握られた黒い剣を振るい、叩き折れて先端を失った槍を弾く。

スレイプニルは焦っていた。

あの時線路外へ放り投げたステラがどうやって目の前にやってこれたのだと。

「ブラックロックシューター! どうやってここまで来たかは知らねえが……！」

スレイプニルは槍を投げ捨てると、並走していた部下が槍を彼に向かって投げ渡す。

それを掴み取り、再度構えた。

ステラはトトの前に立ち、剣を構える。

スレイプニルは右足で力強く踏み込み、突撃を仕掛けた。

一気に彼女との距離が縮まり、槍の先端が彼女の体を貫かんとするも、

ステラは剣でその先端を止めた。

互いの得物がぶつかり合い、火花が散る。

勝負に負けたのは、スレイプニルだった。

彼の槍はステラの刃に切り裂かれ、先端が床に転がる。

しかしスレイプニルは止まらない。

「シィイツ!!」

まるで空気を切り裂く音にも似た声を上げながら、切り落とされ、

突く能力を失った槍を振り回し、ステラの持つ剣を激しくぶつけ合う。

鏢迫り合いになり、彼女はトトを一瞥した。

「トト！私はいいから貴方は先に前へ行つて！」

「えっ!?でも…!」

「信じて！」

言葉に詰まるトトにステラは言った。

その言葉に彼はハツとする。そして返事はせずに頷いて、アレスと共に前の車輛へ進む。

ステラはスレイプニルに押しつけられ、壁に叩きつけられる。

そして先が切り落とされた槍であるにも関わらず再度突撃をした。

ステラはそれを交わし、槍が壁に突き刺さる。

スレイプニルはそのまま壁を抉りながら横に槍を振るう。

鉄製の壁がメキメキと引き裂き、貨車を破壊しながら、ステラに向ける攻勢を一切緩めない。

ステラは後ろに飛んで距離を取りつつトトの方へ向かっていくが、車輛を破壊するように突き進むスレイプニルの攻勢はむしろ激しさを増していく。

そしてスレイプニルは地面に折れた槍の先を押し当てそのまま上に振り上げた。

次の瞬間斬撃が強烈な閃光と共にステラに襲い掛かる。

“ 斬刃 ” と呼ばれる刀剣に魔力を与えることで光弾を刃で放つ魔術だ。

扱えるのは魔術剣士と呼ばれる剣を扱える魔術師でなければ使うことが出来ないはずだが、

スレイプニルはこれを槍で行ったのだ。

ステラが彼の真上目掛けて飛び上がり、大砲を構えた。

スレイプニルは上を見上げた。ステラは引き金を引く。

直撃した砲弾が爆発し、青白い炎を上げた。

ステラは着地してスレイプニルを見た。

まだ倒れていない。二本の足でしっかりと立っている。

着弾の直前にスレイプニルは折れた槍で砲弾を防いでいたのだ。槍は完全にひしゃげてしまっていて、たしかに強烈な一撃なのは明白であった。

「これではこれ以上彼は戦えないとステラは思った。

「まだ……だ……い……」

「……い……」

ステラは驚いた。

スレイプニルはまだ闘うつもりなのだ。

彼が槍を構えてステラに向かって踏み出そうとしたとき、

「つぐう……い……があ……い……」

スレイプニルは膝から崩れ落ち、その場で手を付いた。

体へのダメージまでは防ぎきれなかったようだ。

全身から雨の様に血のしずくが垂れている。

咳き込んだ口からは血を吐き、荒い呼吸を繰り返す。

「もう貴方は戦えない。それ以上動く……」

「ハア……ハア……!!」

ステラは言う。

スレイプニルは答えずに彼女の目を見た。

未だ闘志の消えぬ瞳を、ステラは静かに見ていた。

何故この男はこうなつてまでも戦おうとするのだろうか、そう考えていた。

彼と彼女の間に沈黙が訪れかけたときだった。

「隊長!!装甲列車が……グあ?!」

騎兵の声と、機関銃の銃撃音、その直後に彼の断末魔が響いた。

スレイプニルは痛む体を引きずってなんとか立ち上がろうとしたそのときだった。

“ベキベキベキベキツツ!!”

列車の進行方向とは逆方向、即ち後ろの車両から何かを破壊する音が聞こえたのだ。

思わず全員がその方向を見る。

「わあああああああ?!?!?!」

真つ先に声を上げたのはスレイプニルの部下だった。

彼の、否、彼を含めた部下たちの目には、大砲や機関銃で武装した装甲列車が貨物列車の貨車に激突し破壊しながらなおも加速していた。

そして、

「奴隷が乗ってようがお構いなしに轢きつぶしていやがります!! 私以外みんなやられて…ギャア!」

そしてその装甲列車は、味方であるはずのスレイプニルの騎兵部隊をも攻撃していた。

槍しか持たない彼らは機関銃に抗えず、隊長であるスレイプニルを残して全滅してしまつたのだ。

「そんな…あの人たちは味方なのに!!」

騎兵の言葉にトトが叫ぶ。

その蛮行という言葉ですら足りないほどの行いにステラでさえも不快感を覚えた。

民兵隊が味方である騎兵や自分たちが乗せた奴隷の命も構うことなく装甲列車を突っ込ませてきたことに憤りを隠せなかつたのは、トト達だけではない。

今まさに彼を捕らえようとしていたスレイプニル自身が、怒っていた。

彼は完全に攻撃力を失つた槍で体を支えながらなんとか立ち上がり、トトに背中を向けたままこう言った。

「行け、小僧。気が変わった」

「えっ!？」

「早く行け!!」

スレイプニルが叫ぶ。満身創痍の彼から放たれた覇気にトトは気圧された。

まるで見えない腕で突き放されるように後ろに下がるトトの体を、後ろから誰かが支えた。

アレスだった。

「行くぞトト」

「…はい」

促されて、トトは先の車輛に向かって歩く。

ステラはスレイプニルの背中を一瞥して、彼に続いた。

スレイプニルは追い払った邪魔者達の背中をチラリと見る。

その直後、装甲列車のラッセルが壁を破壊して遂に彼の前に姿を見せた。

「ノコギリ女!!俺の手柄だと言ったのによオ……!!」

スレイプニルは嘶く。そして地面を蹴り上げ、折れた槍を装甲列車に向けて突撃をした。

槍が突き立てられた瞬間爆発が起こり、その爆風はトト達が驚いて振り返るほどだった。

それはアレスの判断で先頭車両から後ろを切り離れた直後の事だった。

燃え盛る装甲列車はだんだんと小さくなり、やがて見えなくなつた。

(続く)

四章 　　＼ The Edge of the Ridge
ge 　　＼ 4

「！」

「ワウ！」

「…」

マルチが足を止め、ある方向を見たと同時に、アジーンが吠えた。それを見て、ユナが彼女の方を見た。

「マルチちゃん？」

「…なんでもない」

マルチは静かに首を横に振った。

ユナは首を傾げたが、すぐにアンドレに声をかけられて前を向きなおす。

そして彼らはツルギ山の麓にある霧の森に入ろうとしていた…。

＼
＼
＼
＼
＼

「まさか君が彼女に負けるとはな。アルベルト。」

スレイプニルは自身の本名で呼ばれ、はっとする。

血の海の中、仰向けに倒れたまま直前の記憶を思い出す。

装甲列車に魔力を伴った突撃を行い、車輛を破壊したが、

自身がその爆発に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのだった。

全身の痛みで意識が朦朧としている。

両脚はちぎれ、左腕は折れ、右腕もひどく痛んで動かせない。それでも彼は槍を握る手に僅かに力を入れた。かすかに動いた槍の音に、声の主は驚いた。

「…まだ生きていたのか？」

「……」

スレイプニルは声の主を見た。背中に白い翼を生やした一人の老人。

朦朧とする意識の中、ぐちゃぐちゃになった記憶の引き出しを引っ掻き回して、

ようやく彼の名を思い出した。

アンゲル・オクトバー。ゾディアックの10番位。

兵士達からは “ワイバーン” と呼ばれている男だ。

「ゴボ……」

スレイプニルは声を出そうとしてゴボリと血を吐いた。

折れた骨が肺に刺さっていたようだ。

息ができずに咳き込む。

「ククク……息も出来ないか…、無理もない」

アンゲルはそう言ってしゃがみ込み、スレイプニルの目を覗き込み、またしても驚いた。

彼の眼は、未だに闘志が潰えていなかったのだ。

アンゲルはニヤリと笑う。

「…気に入ったぞスレイプニル……。また戦える体にしてやろう…クククク……」

~~~~~

山を貫く長いトンネルを抜け、トト達を乗せた列車は首都グラウンド



セントラルの手前、

アイゼンという小さな村に着いた。

グランドセントラルがすぐ見えるほどの距離に位置していて、トトもようやくかと今までの疲労が押し寄せられるほどだった。

しかし駅には駅員も民兵もおらず、どうやら無人駅の様であった。

アレスは都合が良いと思う一方で、油断は出来ないとトトに言つて、彼もそれに同意した。

列車を駅のホームに停車させ、周囲を確認するが、本当に誰も居ない。

駅員すらいないう無人駅ということにトトは薄気味の悪さを感じた。

トトの住むグレートウオールでさえ、駅に必ず一人は駅員が居て、切符を売っていたからだ。

切符はどうして売買しているのかという疑問もほどほどに、トト達は駅を出て、街の方へ向かった。

全員列車の中でトトの持っていたチョコレートを一ひとかけられしか食べておらず、喉も渴いていたため、どうしても飲み水を確保する必要があった。

先ほどまでアレスのチョコレートの方が微妙に大きいとゴネるステラをなだめるのに苦労したと思いつつ、トトは街の様子に驚いた。

誰もいないのだ。

日が高く上り、クリーチャーも出ないこの街には、民兵すらいなかった。

人の気配すらしない、誰も居ない無人の街。

初めて見る光景に、トトもアレスも気味の悪さを感じた。

「どうしたの??」

ステラは二人に首を傾げながら、どんどん先へ進んでいく。

そんな彼女の手を掴んでトトは止めた。

「??、トト??」

「なんか、変だよ?ここ……」

「……?、どこにも人が居ない以外はおかしいことは無い。民兵がいないのなら安全に通過できる。」

だから気をつけるんだとアレスが口を挟んだ。

「民兵すら寄り付かないのは人間が居ない以上に厄介なものがここに居るか、そもそもこの街全部が罠かのどちらかだ。用心して進むぞ。」  
アレスはそう言って銃を抜いた。

工業都市の黒い雨も、山を超えたこの街には届かない。

トトは日に照らされる暑さに外套を脱いだ。

歩くうち、三人は井戸のある広場に着いた。しかしそこにも誰一人としていない。

「井戸は……枯れては無いようだな」と、アレス。

「もう少し辺りを見て回りますか？それとも……」

トトはアレスに問いかけた。ステラは日光を浴びて自らの体表面の温度の上昇を感じ、トトのチョコレートが溶けるのではないかと彼の鞆を見つめていた。

トトはアレスとこれからのことを話していて、ステラが自分の鞆に手を伸ばしていることに気が付いて彼女の方を向いたときだった。

「あれ？」

突然背後から声が聞こえ、三人同時に振り返る。

井戸の傍に、一人の女の子が立っていた。

トトは驚いた。アレスも驚きを隠せない。

そこに人はいなかったんだから。気配さえも。

しかし銃を向けるわけにはいかなかった。

10歳くらいの女の子に見えたからだ。

「旅の御方ですか?？」

アレスは警戒した。トトは警戒こそしたが、思わず返答をしてみなかった。

すぐに口ごもったが、ステラが続けて言ってしまった。

「グランドセントラルに向かうだけ。すぐだからこのまま歩く。」

「えっ!?グランドセントラルに?！」

少女は驚いてそう言うとはたばたと小走りでステラに近づいた。

にぱっと微笑むその表情は無垢そのもので、トトは可愛いと素直に思った。

「でしたら少しでいいので休んでってください！私の家がすぐそこなので！」

少女はステラの手を握る。

屈託のない笑顔と、純粋な瞳が、ステラの無感情の眼を見つめた。ステラはただ眼を見つめた。そして、トトの方を見た。

「トト、どうする？私は貴方に任せる」

「え？ええと…」

トトはアレスとステラの顔を交互に見た。

アレスは君の好きにしたらいい。と言いたげに手を広げてみせた。それを見てから少女の顔を見て、

「じゃあ、お言葉に甘えて」

と言ったのだった。

「ねえ、君の名前は？」トトは尋ねる。

少女はまた屈託のない笑顔で、

「ルミー」と元氣よく答えた。

「僕はトト。こっちはステラ。あの人はアレスって言うんだ。よろしくね」

着いてきて！家はすぐそこなの！と言ってステラの手を引いて、ルミはさっさと歩いていく。

慌てて後をついていくトトの背中を見て、アレスは一度、周りを見渡した。

自分たち以外の人の気配を感じたのだ。

しかし、誰も見当たらず気配も消えてしまったため、アレスは気のせいだと思うことにして、ようやくトト達の後続く為歩き出した。

~~~~~

「ここが私の家だよ！」

ルミの家はそれほど大きくない平屋の小さな家だった。

妙に丸みを帯びた形の家を見てトトは思わず全体を眺めた。

同じ規格で等間隔に同じ形で並ぶ家しか見たことのないトトに、この家の形は新鮮味があったのだ。

「さ、入って入って！」

「おじやまします」

ルミは扉を開けて、客人を迎え入れる。

ちりんちりと扉に付けられた鈴が小気味良く家の中に音を響かせる。

トトは帽子を取って家に上がりこんだ。

家のなかは綺麗に整理されていて、棚にはいくつも写真やちいさな置物が飾られていた。

家具の一つ一つもトトが自分の家で見た質素なつくりのものとは違う、おしゃれなものが揃えられていて、思わず家じゅうを見回してしまうほどだった。

「わたしのおうち、きれいでしょう？」

「うん、とっても」

ルミの言葉にトトはうなずく。

そんなトトの笑顔にルミもにんまりと微笑んだ。

「ねえねえ、お姉ちゃんは何のおうち、綺麗だと思う？」

「え？」

ルミの問いかけに、ステラは首を傾げる。

ステラは棚に置かれた小物も、扉の鈴の音も気に留めていなかった。

答えに困ったステラはトトに視線を投げかける。

ステラの答えを待っていたトトは彼女が困っていると思い、彼女に伝えた。

「ステラ、家の中、どう思う？」

「…初めて見る。私が今まで見てきた建物のどれとも違う。不思議な形」

「ほんとお!？」

ステラの言葉にルミは喜ぶ。

扉の鈴が鳴り、遅れてアレスが入ってきた。

「アレスさん」 トトが声をかけた。

「綺麗な家だ。ご家族は？」

「グラントセントラルに用があつて一日いないの!だから私がお留守番!」

「ほう…小さいのに立派だな」

「えへへへ」

アレスはそう言つてルミの頭を撫でた。

ルミが嬉しそうに微笑む。

「…君のような小さな子供とちゃんと話をしたのは、何年ぶりになるだろうな」

「そんなに昔なんですか？」

トトがアレスに問う。

ルミはくつろいでいてステラに言つて、パタパタと家の奥にかけていった。

「ああ…」

アレスはそう言つてマントを脱いでコートハンガーに掛けた。

飾り気の無い黒服であつたが、軍服や礼服に似たしつかりとした作りでどこどころ何かを引きちぎった跡がトトの目に映った。

「アレスさん、服…直さないんですか？」

「ん?ああ…必要が無いからな」

アレスの返答にトトは首を傾げた。

しかしそんな疑問はすぐに消えた。

「三人とも!お茶だよ!飲んで飲んで!」

ルミがお茶を持って来たのだ。

トトはルミに礼を言つて椅子に腰掛けてお茶を飲んだ。

(続
く)

四章 　　＼ The Edge of the Ridge
ge 　　＼ 5

~~~~~

首都グランド・セントラル 北区

この区画のほぼ中央に位置する場所に建てられている歴史ある  
ホーリー・ウッド大学校。

広い講義室の教壇で、一人の教員が教鞭を振るっていた。

男の名は、トリュー・ゲオルク。

この学校の非常勤講師であり、言語学を担当している。

そして黒板には二種類の文字が合わせて76個書かれている。

トリューは手に持った指示棒で一方の文字を指した。

「我々の国では、アルファベットという26の文字を使い、それらを組み合わせて言語や文章を作るのは皆知つての通りだろう。」トリューは指示棒でもう一方の文字を指す。

「…その一方で、東洋の倭ノ國ではひらがなというものを用いており、その数は50文字、アルファベットの二倍だ。その語学の内容の複雑さは恐らく世界でも類を見ないだろう。」

そう言つてトリューはチョークで更に文字を走らせた。

そうして二種類の単語を作る。

アクセントの記号を添えて、話を続ける。

「この二つの言葉。まったく同じ文字だが、イントネーションで意味が変わってしまう。これは同音異義語と呼ばれるモノだ。ここに倭ノ國では漢字とカタカナが織り交ざり、更に交易が盛んな諸外国の言葉を率先して取り入れる傾向がある。これらは外来語と呼ばれ―」

トリューの講義内容に一人の生徒が手を挙げた。

「先生、何故倭ノ國にはアルファベットは普及しなかったのですか？」

「いい質問だ。……では倭ノ國の “ かな文字 ” の歴史についての説明もしておこう。元々倭ノ國と交易があつた華ノ國から伝わつた漢字がその語源と言われており、それを」

そこまで言つたところで、発言を遮るように講義の終了を知らせる鐘が鳴つた。

トリューは「おつと」と一言言つて、左目に掛けたモノクルに指を添える。

「すまない。この話の続きは次の講義にするとしよう。来週は休講になるから、皆忘れないように！」

そう言つて教卓に広げた教本をまとめて、トリューは脇に抱えた。

「ゲオルク先生また休講だつて」

「そろそろクビになるんじゃない？」

ヒソヒソと聞こえる噂話に耳も貸さずにトリューは講義室を後にしようとする。

そんな中一人の青年が机から体を起こしてあくびを漏らす様子が彼の横目に映つた。

「ホーエンハイム君！」

トリューは足を止めて青年の名前を呼んだ。

名前を呼ばれた彼は驚いて目を丸くした。

「あとで私の部屋に来るように」

~~~~~

トリュー・ゲオルクは大学の非常勤講師でもあり、言語学を研究している助教授でもある。

彼の研究室は大学の4階北側の角部屋に位置し、その部屋の中には

様々な言語の蔵書や資料、世界中の調度品やアンティークなどが所狭しと置かれている。

その部屋の真ん中に構えられた大きな机の前で、トリューは椅子に深く腰掛けて一枚の羊皮紙を眺めていた。

机の上にどんと広げられた大きな蔵書のページの一枚で、そこにはアルファベットとも違う奇妙な文字で文章が綴られている。

“ コンコン ”

軽快なノックの音が部屋に響く。

「開いているよ」 トリューは答えた。

「失礼します」という男の声と共にドアが開く。

声の主は先ほどトリューに来るように言われていたホーエンハイムと呼ばれた青年だった。

トリューは羊皮紙を机の上に置いて彼に言った。

「ホーエンハイムくん。君は私の講義で居眠りしたのは今回で7度目だよ？」

「すみません」

「たしかに、睡眠は人間の生活において重要な休養時間だ。食事の次に重要な休養と言える。しかしそれは私生活に限った話であり、大学構内の講義中の話ではない」

「…」

「まあ、私の説教はおいておくとして、君は講義の内容を把握しているのかね？」

ホーエンハイムは顎に手を当て、一度目をそらした。

トリューは彼が講義中に居眠りをし、全く頭に入っていないものだと思っていた。

そして彼は口を開く。

「アルファベットの26文字に対し、倭ノ國の平仮名は50文字、更にカタカナを合わせて100文字、そのどちらも漢字由来の文字であり、その起源は華ノ國より伝来した漢字を読もうとした倭ノ國の人達の独自文化だと言われており、最初は振り仮名や送り仮名と呼ばれているものだったものがー」

「結構」

トリューは左手を挙げてホーエンハイムの言葉を制止した。それを見た彼は言葉の流れを止め、トリューはひじ掛けに手をついて立ち上がる。

「それだけ出来ていれば大したものだ。君は勉強熱心なんだなあホーエンハイム君」

「あ…、そのことで、先生に質問があるのですが…」
「ほう？言ってみたまえ」

ホーエンハイムの質問にトリューは耳を傾けた。

「倭ノ國には言葉に意味をあてる文化があると聞きました。一つの言葉に複数の意味を持たせることがあるのだと。何故そのようなことを？」

「それはとても良い質問だ。では君に面白いものを見せよう」

トリューはそう言って先ほど机に置いた羊皮紙を手にとって見せたときだった。

遠くの廊下からバタバタと足音が響いてくる。

その足音は二人には聞き馴染みがあるらしく、特にホーエンハイムは慌ててショークースの影に隠れるほどだ。

その足音は部屋の前で止まり、ノックもせずドアが開かれる。

一人の少女がセミロングの髪と肩を揺らしてツカツカと部屋に入り、トリューに一瞥した。

「先生…ここにナミマは来てませんか!？」

「居ないよ」

ナミマとはホーエンハイムの名前だ。

ちなみに居ないよと言ったのはトリューではなくホーエンハイムだ。

声のした方向を見た彼女は彼の前に立ち、その耳を引っ張った。

「ナミマ！アンタまた居眠りしたんでしょ！」

「講義は聞いてたよ…」

「言い訳しない！そうやってまた先生のこと困らせて！」

ホーエンハイムの弁解を遮り、彼女は彼をがみがみと叱った。

彼女の名前はマイ。

ホーエンハイムと同じ学部生徒であり、彼の元交際相手だ。

彼女は最初こそ彼のことを放っておけないと言って交際を始めたものの、

彼にデートをすっぱかさされた50と8回目にして彼女が愛想を尽かして別れたのだが、

未だに彼を放っておけずにこうしてやってきて彼の手綱を引く様子は、もはやトリユーにとっては日常茶飯事であった。

そんな彼女のお説教に対して彼は聞いているんだか聞いていないんだか分からない顔をしていた。

しかしトリユーは思う。

(あ、もう話聞いてないな。)と。

「聞いている!?!」

「うん」

マイの言葉にホーエンハイムもといナミマは二つ返事で答える。

その真意は彼のみぞ知るところだが、どんなものか。

トリユーはそう思いながら、二人の痴話喧嘩を仲裁することなく椅子に深く腰掛けた。

「今日一緒にレポート書く約束覚えてる?」

「あ、忘れてた」

「ほら見なさい!先生!ナミマを連れてつても?」

「構わんよ」

トリユーはマイの言葉への返答に、更にこう付け加えた。

「ホーエンハイム君、シャツの襟が曲がっているから後で直しておきたまえ」

それを見たマイは「ああもう!」と言ってナミマの襟を直すと、彼の手をとって部屋のドアをボタンと閉めた。

バタバタバタと二人分の足音。やがて静寂が部屋に満ち、ようやく彼は落ち着いた。

「ドアは静かに閉めて欲しいものだが、やれやれ…彼らのような夫婦は実に賑やかで楽しそうだ……」

「独り言をポツリと呟き、窓の外を眺める。
秋晴れの空に白い雲が一つ浮かんでいた。

“カチャツ”

ドアノブに手を掛ける音が聞こえ、トリューは視線をドアに移す。
しかし立っていたのはナミマでも、マイでもなかった。

白いセーターに、ピンクのスカート、花の髪飾りに、大きな白のキャ
スケット帽、

整った容姿に赤縁のメガネと赤い瞳が印象的な少女だった。

そしてトリューはその少女の顔に覚えがあった。

先ほどの講義で一番後ろの席に一人で座り、頬杖をつきながら自分
の講義を聞く彼女の姿を、彼は見ていた。

「君は…さつき講義にいたね？何か用かね？」

「ええ、トリュー先生。私も質問があるの」

「ほう？盗み聞きはあまり感心しないが…、いいだろう、聞かせたま
え」

少女の問いかけの内容は先ほどのナミマとのやり取りをトリュー
に想起させた。

しかし彼の興味はそれ以上に彼女に注がれ始めていた。

彼女は「フフ」と不敵な笑みを浮かべてトリューに改めて問いかけ
る。

「言霊の魔法、って御存知？」

「…いや、初耳だ」

トリューの返事に彼女は「あら」と言っけて口元を押さえた。

そしてまたフフと笑いながらトリューに言った。

「魔法というのは、大気や大地、水や木、火や雷なんかの自然の力を扱
うわよね？」

「ああ、その通りだ」

「でもそれは杖を用いる必要があるし、人間に生まれ持って備わって
いる魔力の強さも違う。それに呪文の詠唱があつて初めて魔法が使
える。でしよう？」

「ああ、魔術の原則だ。」

「呪文の詠唱は訓練を重ねればこそ省略して無詠唱魔法として使うことも出来るけれど、それでもやはり杖…、あるいはそれに準ずるものが必要。例えば…剣とか？」

「よく知っているな…、感心するよ」

トリユーは彼女の造詣の深さに驚いた。

同時に気味の悪さも覚えていた。

彼女は靴音をコツコツと響かせながら話を続ける。

「でも先生、私はこう思うのよ。…杖を用いずに、普段私たちが使う言葉、言霊も魔法にすることが出来るんじゃないか。って…」

「ほう？」

「言葉そのものを魔術として、それは時に暴力装置として、時に人々の心を掴むため、時に何かを封じ込めたり、解放したりするための鍵として使うことが出来たとしたら…」。私にはそんな魔法がどこかに存在するような気がしてならないのよ、先生？」

「実に興味深い話だ」

少女の問いにトリユーはそう言ってモノクルを掛けなおす。

「そうでしょう？と言う少女を一瞥すると、トリユーは椅子から立ち上がって彼女の前に立つ。」

「本当に勉強熱心な子だ。名前を聞いても？」

「ジャンヌよ。よろしくね？トリユー・ゲオルク助教？」

「ありがとう。詳しい話はまた今度聞かせてもらってもいいかね？入り用を思い出した」

「もちろん。またね、先生？」

ジャンヌはそう言って微笑むと、さっさと部屋を後にしてしまった。

言霊の魔法、その言葉がトリユーの頭に残った。

言語学を研究している自分にそれを向けてくることにも。

恐らくは既に何かを知っていて、敢えて自分に声を掛けてきた。

トリユーは少女の心意を自分への挑戦だと、そう結論付けた。

「ふふ、良いだろう。受けて立つ。一言語学者としてな」

トリユーはそう言って、大学を後にして帰路に着いた。

グラウンド・セントラル東区ヴルカーノ通り22番地307号室が彼の住居だ。

部屋の中には彼の大学の研究室の比じゃない量のコレクションの数々が所狭しと並べられており、ただでさえそこまで広くない廊下やリビングを圧迫してしまっている。

そして彼のリビングの隅、一人掛けの椅子に膝を抱えて座っている小さな女の子が顔を上げてトリューの目を見た。

金色の瞳。枯草色の長い髪、そして口を開いて彼に言う。

「て…：：：、と…：：：」

「ああ、ただいまウオクス」

彼女の名はウオクス。

トリューは生まれて間もなかったこの女の子をたった一人で育ててきた。

しかしこの少女はトリューの言葉を全く覚えず、彼も全く知らない言語を用いて会話をするのだ。

それが自分の生まれ育った国の言葉であるかのように。

トリューが言語学の研究をしているのは、ウオクスの使う言葉を完全に理解するためである。

四章 　　＼ The Edge of the Ride
ge 　　＼ 6

夜は十時を回った頃。トリユーの住むアパートメントの前に数台の車が停まった。

濃い緑色の制服に身を包んだ民兵隊が降りてきてゾロゾロとその場に整列する。

建物からメガネをかけた背の低い男が一人、彼らを出迎えた。

隊長が彼の前に立つ。

「ゲオルク氏は今部屋に？」

「えええ、ええ、ええ…！今まさに」

隊長の質問に、男は何度も首を縦に振って答えた。

「案内しろ。全員私に続け」

男を先頭に兵士たちがぞろぞろと階段を上がっていく。

そして307号室の前で立ち止まり、隊長がドアを叩いた。

“コンコンコン”

「ゲオルクさん？よろしいでしょうか？」

…。

返事は無い。

「開けろ！民兵隊だ！」

…。

やはり返事が無い。

「構わん、ぶち破れ」

隊長の言葉ですぐ後ろに居た兵士がドアを蹴破った。

銃を持った兵士達が部屋に入り、部屋中をくまなく探すが誰も居ない。

最後の一部屋に銃を向けて扉を開けた兵士は椅子に置かれたマネキンと、その頭に貼られた紙を見た。

“ Run away!! ”

そう書かれた紙を見た兵士はいきなり肩を掴まれた。

「走れ!!逃げるぞ!!」腕を引つ張られた兵士が見たのは、部屋の棚、壁、天上、小物類に紛れてそこら中に置かれた爆薬の数々。そして次の瞬間―。

“ ドオン!! ”

307号室が爆発を起こし、それは部屋の前の扉や窓を吹き飛ばし大きな爆炎を噴き出させた。

その音と衝撃に通りに居た人はおろか、周辺にいた人が驚きを隠せなかった。

「なんだなんだ?!」と言いながら人だかりができる。

民兵達は人が人の救助と消防を呼ぶ為慌ただしくなり、その場は騒然となった。

そこから少し離れた道路脇に停まる側車付バイクに跨り、望遠鏡でその様子を眺めていたトリューはすぐにそれをウオクスが収まる側車に放り込むと、バイクのエンジンをかけ、静かに走り出した。

途中何台もの消防車とすれ違っても、トリューだとは気づかれないまま走り去っていく。

そうしてトリューは自分の住む東区から首都グランドセントラルを脱出しようとしていた。

そんな彼の頭上から声が響いた。

「そう簡単に行くと思った?」

「!・!!⊠⊠⊠⊠⊠⊠αα!」

ウオクスが上を見て声を上げた。

一対の角、黒い長髪、赤い瞳に宿した真紅の炎。

そして右手に握られた巨大な金の鋸。

「ゴールドソー!!」

「あら?私を知っているのね?教授」

ゾディアックの四番位、 “ 女帝 ” “ ” ブラックゴールドソー

“ 等、複数の異名を持つヒュドラがその得物である鋸を上段に振りかざしていた。

トリューは急ブレーキを掛け、鋸の刃先は道路に突き刺さる。

そのままスロットルを全開にしてハンドルを切り、彼女の横をすり抜ける。

「時速80キロに着いてこれるとはな…!!」

トリューがそう言ったのも束の間、ゴールドソーは跳躍で高く飛び上がり、足元に魔法陣を作るとそれを足場に更に飛んで追撃を掛けた。

私から逃げ切れるとでも思ったの？とでも言いたげな表情で。

トリューはそれをミラー越しに見るや否や、すぐさま左手で銃を抜いて、

進行方向に見えた一本の街灯目掛けて一発発砲した。

放たれた弾丸は街灯に命中して跳ね返り、間合いを詰めたゴールドソーの頭に生えた右の角を掠めた。

その痛みにゴールドソーの右目に真紅の炎が灯る。

「やはり簡単に行かせてはくれないか!」

「当たり前よトリュー・ゲオルク!ここで死になさい!!」

ゴールドソーの鋸は再び上段に構えられ、トリュー目掛けて降り下ろそうと腕に力を込めた。

「ウオクス!」

「!·ЦЯЯααし☒!」

トリューに促され、ウオクスが吠える。

その声、言葉にゴールドソーの体は一瞬電撃に当てられたような痛みと、痺れに襲われた。

彼女はそれを振り切り鋸を振るうが、動きが遅れていたようで刃先は空を切った。

「チィッ!」

ゴールドソーは舌打ちをしてもう一度大きく踏み込んだ。

突貫の最中、鋸の切先が地面を掠め、鈍い金属音と共に火花が散る。

しかし彼女は標的をトリューからウオクスに切り替え狙いを定めた。

ウオクスは彼女の目を見てそれを確信し、彼女に向けて両手を開いた。

「妙な小細工が私に通じるとでも!?小娘!!」

ゴールドソーは鋸を二度振るい風を切り裂く。

トリューはもう一度銃を向けて撃つが、ゴールドソーは飛んできた弾丸をあろううことか、目で見て避けてみせた。

「なんと!?!」

「ハンッ!そんな玩具じゃ止められないわ!!」

驚くトリューに視線を移すことなくゴールドソーは吐き捨てる。

バイクが歩道橋を抜けたとき、ゴールドソーは足を止め、勢いよく飛び上がり歩道橋の上を通った後、落下の速度と剣の重さに任せて回転しながら斬りかかった。金の鋸の刃先がまさにウオクス目掛けて降り下ろされようとした瞬間、

「!Σてαβ!」

“ バチツ!! ”

ウオクスの言葉と同時に鋸がウオクスの手からわずか数センチのところまで停止する。

ゴールドソーは突然の出来事に目を見開き、動揺を隠せない。

彼女の意思で止めたのではない。止められたのだ。

ゴールドソーは炎の灯った真紅の瞳でハッキリと視認した。

ウオクスの前に張られた青白い防御魔法の壁の存在を視認した。

「この子…この力は…!!」

「!Σてαβ!」

“ ドグオオオオオオン!! ”

ウオクスの言葉で二人の間に爆発が起こり、ゴールドソーは吹き飛ばされて歩道橋に激突し、トリューは

「おおおおおおっつ?!」

爆風でバイクが急加速し、その速さに悲鳴を上げていた。

メーターが一瞬ではあるが120を指して思わずハンドル操作が乱れに乱れる。

激しいスキル音を立てながらもなんとか姿勢を立て直し、吹き出した冷や汗を拭う。

ふと横に目をやると額を押さえて目に涙を溜めたウオクスがト

リユースを睨んでいた。

どうやら頭をぶつけたようだった。

「ごんごんごん……」

「おお!? す、すまなかった! 頼むから泣かないでくれ! レディーを泣かせては家族に顔向けが出来ん」

「ヒー」

「うわわわわっ!? 本当に申し訳ないと思ってるぞウオクス!」

ウオクスの叫びと共にトリユースの眼前で “ボワツ” “つと” 小さな爆発が起こり、

トリユースは驚いてまたしてもハンドル操作を乱した。

再び姿勢を整えたときには満足したのか、ウオクスはサイドカーの座席に収まりふんすと鼻を鳴らしていた。

「ΣΠδ—ΦΥΠ?」

「ん? ああ、これからのことは心配するな。ディープフォレストに知り合いが居るんだ。彼の手を借りるさ。」

「ηΠΠ〜……」

トリユースの言葉を聞いてウオクスは頷き目を閉じた。

二人を乗せたバイクはそのまま郊外へ抜ける道を駆け抜けていった。

そして吹き飛ばされ歩道橋の柵に体をめり込んだゴールドソーは地面に降り立ち、遠のいていくバイクのテールライトを見つめていた。

民兵が数人、彼女のそばに駆け寄って指示を仰いだ。

「ヒュドラ様? 追跡しますか?」

「いいわ。ほうっておきなさい。」

(第四章 了)

ルミに泊まってほしいと言われたトトは仕方なくも、そこに泊まることにした。

その日の夜、トトは違和感に襲われて目が醒めた。なんともいえない生臭さが鼻につき、たまらなくなったのだ。そこは、得体の知れない肉の壁に覆われた世界だった。

「うえっ…」

酷く臭い。トトはそう思いハンカチで口元を覆った。

そこはルミの家ではなかった。ベッドも、家具もそこには無く、生臭さと表面を粘膜が覆った肉の部屋だ。

アレスもステラもルミもおらず、トトは心細くなった。それにどういいうわけか最近見る夢とは感覚が違った。

トトにはこの肉の部屋が現実のように感じたのだ。

同時に “ この場所から今すぐ逃げださなければならない。

” という恐怖にも似た不安がトトの中にあっただのだ。

その瞬間、ゴオという音を立てて風が吹き抜けた。

生臭い臭いが否が応でも入ってきて、トトは吐き気に襲われてその場に手を突いた。

「うう…」

トトは口元を押さえながら壁に手を突いて出口を探す。手に粘つく感覚が気持ち悪い。

「トト」

「！、ステラ？」

トトは辺りを見回す。誰も居ないが確かに聞こえた。

ステラが何処かに居るのかもしれない。

そう思い声のした方向に歩き出す。

手元にランプも何も無いことと、暗さで視界が全く取れず、

トトは不安でしかない。

無理もない。ちゃんと前を歩いているかすらわからないのだから。地面はところどころ凸凹としており、ぬめりけもあるせいで歩きにくく、トトは何度も足をとられかけた。

数分歩くだけで息が上がる。何度もむせ、嗚咽しながらも歩く。

「おえっ…どこなんだここ…?!」

「トト?」

「えっ?」

声を掛けられ振り返ると、ステラがいた。

トトは彼女がそこにいることに安心のあまり彼女に抱きついた。

「ぐすっ…よかったあ…!大丈夫?」

「トトの方が心配」

ステラに冷静に言い返されて半ベソをかいていたトトは顔を赤くした。

そんな彼の表情を見て、ステラはなんとなく頭を撫でた。

何故そうしようと思ったのかステラは理由を探すが、みつからなかった。

「ココは臭いも、周りも全部が変。すぐに出た方がいい。」

「う、うん…アレスさんは見なかった?」

「見てない」

ステラは首を横に振った。

トトは出口も大事だが、アレスを探すことにした。

とはいえ、何処に繋がっているかも分からない肉の壁に覆われた場所で、アレスを見つけられるかは分からなかった。

けれども探さなければとトトは思った。

なんとか口元を押さえながら壁伝いに歩く。

普通に歩いているステラに臭いが平気なのかと問いかけたが、

ステラも正直不快感があるらしい。

彼女は自らをバイオロイドと呼んだが、どこまでが機械の体なのかトトの想像では計り知れなかった。

そうしてしばらく歩くうち、トトは広い空間に出た。

しかしまるでそこはまるで暗い海のような空間が広がっていたが、海のような潮の香りではなく、強烈な酸のような臭いが目と鼻を襲った。

トトはいるだけで息苦しく、ステラは顔をしかめた。

「なんだ……まるで胃液みたいだ……」

「胃液？」

「うん……」

トトにはどうもこの臭いが胃液くさく感じてたまらなかった。

あまりの顔色の悪さにステラはトトを休めるために一度この場から離れようと来た道の方を向いたときだった。

「ザバア」

「……？」

二人は水音に反応し思わず振り返る。

身体が半分以上溶けた何かがちらに向かって這ってきている……

！

トトは「うわあ!?!」と悲鳴を上げた。

ステラが近づいてきたソレを大砲で殴り飛ばした。

殴り飛ばされたそれはうめき声のようなものを発しながら酸の海に落ちた。

トトとステラには今の化け物の正体が分からない。

しかし「一刻も早くここから脱出しなければならぬ」ということだけは確信になった。

「トトさん」

「！」

トトは声のした方を振り返る。

二人は驚きを隠せなかった。

ルミがにこにこ笑顔で立っていたのだ。

周囲を肉の壁に覆われた生臭いこの空間でその笑顔は不気味でしかなかった。

「起きたらダメじゃないですか？ちゃんと眠っていただけかないと」

「貴女、誰？」

トトに歩み寄るルミの前にステラが立って問いかける。
彼女の問いかけにルミは首を傾げた。

ステラを映す無垢な瞳が、今のトトには物凄くおぞましい。
ステラの右目に炎が灯る。

ルミはステラに手を伸ばすが、彼女はそれを叩き、ルミの体を掌打した。

小さな体が宙を舞い、肉の壁に叩きつけられる。

ステラは間髪入れずに大砲を出してルミに向けるが、ルミの右腕が異形に姿を変えておぞましい速さで伸び、ステラの首を掴むや否や壁に押し付けた。

「ぐう……あ……い！」

「ステラ!!」

トトはステラを掴む手のようなモノを引き剥がそうとするが、力が強く引き剥がせない。

このままではステラが窒息してしまうとトトは狼狽した。

ステラは目から生気が消えたかと思うと腕をだらんとさせて虚脱した。

腕が離れるとそのまま膝を着いて倒れ込む。

「ステラ！しつかり！」

「魔力を少し奪っただけ。小さな女の子をいじめたんだから。このくらいはね？」

トトはそう言われ彼女を見ると、やはりニコニコと笑顔のルミが立っていた。

トトは怯えた。

この小さな怪物はまるで提灯鮫鰐のようだと思った。

この女の子は獲物をおびき寄せるためのワナで、本体はあの家であり、この肉の壁は胃袋の中といったところなのだろう。

ルミはトトに歩み寄り、そして突然立ち止まり、首を傾げた。
そしてスンスンと鼻を鳴らして言った。

「……の匂い……」

「え？」

突然の出来事にトトも驚きを隠せない。

匂いという言葉もトトにはピンとこなかった。

しかしこのルミだった何かは何かの匂いを感じ、うろたえ、頭を抱えてうめき声を上げた。

「あ……あ……あ……」

その何かの周囲を黒い霧が覆い、そして、

「あああああああああああああああああああ!!!」

ついに何かは絶叫したかと思うと、黒い霧は肉の壁にぶつかり霧散した。

そしてそこに古びた木の扉が現れた。

扉がドアノブを捻ることなくギィィとひとりでに開くのをトトは見ている。

開いた扉の向こう側から青白い月の光が差し込んでいる。

トトには今自分が目の当たりになっている出来事の全てが理解できなかった。

否、唯一つ、少なくとも自分の想像の及ばない何かが起こっていることは理解できた。

ステラの様子を見るが、彼女は意識を失っているようだった。

トトはステラの肩を借りて、扉の中へ行くことにした。

肉の壁の中よりマシだと思ったからだ。

中に入ると薄暗い。完全に中に入ったと同時にひとりでに扉が閉まった。

トトは一瞬振り返るが、部屋が急に明るくなり、トトは目が眩んだ。

「あ、父さん。私ちよつと市場に出てくるよ。すぐ戻るから。」

「え?」

すぐ聞こえた快活そうな女の子の声。

トトはそう言ってパパパパと扉から飛び出していく女の子の長い髪の毛が見えたかと思っただけなのに扉が閉まった。

「あ、あの……」

「やれやれ、俺の返事も待たねえで。」

長椅子に腰掛けた男はトトを見ることなく、扉を見ながらつぶやい

た。

トトは何が起きているか分からなかったが、男には自分の姿が見えていないということだけはわかった。

そんなとき、ステラが顔を上げた。

「う…、トト…？」

「あ…ステラ、大丈夫?！」

トトはステラを座らせた。小さくうなずくステラを見て溜飲が下がる。

ふと家の中を見回してトトは気が付く。家の作りに見覚えがあったのだ。

思い出そうとして、すぐさま家の外が騒がしくなった。

家の中にも響いてくる銃声、ざわめきからやがてパニックになる人達の声と足音、

彼らを追い立てる靴の音。

男性が窓の外を見て慌ただしく家の奥に向けて声を張り上げた。

「マリアー・ルミを連れて裏口から逃げるんだ！早く！」

そう言った直後の事だった。

「バキイツ！」

家の中に緑色の制服に身を包んだ民兵達と、スーツの男が入ってきた。

男は金縁のメガネを翔けて、男性の目を見てこう言った。

「ジャック・マシューセッツ、家族を連れて私と来い。さもなければ」

「断る！」

「じゃあ仕方ない」

スーツの男の言葉と同時に民兵が男性に向けて銃を撃った。

他の何人かは奥へ押し入り、女性と子供の悲鳴が聞こえた。

トトは何も言えなかった。そして同時に思い出した。

この家は

「トト…」

ステラの声にトトはハッとす。

気が付くと道の真ん中にトトは立っていて、日の出が近づいている

のか、空が白み始めていた。

「ステラ!? ここは…?」

トトが周りを見ると、そこには何も無い。
後ろから走ってくる音が聞こえてくる。

振り返るとアレスがひどく心配した様子で駆け寄ってきていた。

「トト! ステラ! 無事か!? 目を覚ましたら外だし、二人は居ないしで、
民兵に捕まったのかと思ったぞ!」

「アレスさん、それが僕にも何が何だか…」

トトの言葉にステラも頷く。

ステラの表情で、嘘はついていないと納得したアレスはとりあえず
安心したように胸をなでおろした。

「荷物は持つているみたいだな。…時間が無いから急ぎたいが…少し
休もう、頭の整理もしたいしな…」

「…そうですね…」

そうして彼らは情報を交換し合い、朝が近いこともあって先を急ぐ
ことにした。

そんな彼らの背中を、一人見つめる少女が居た。

金縁メガネのスーツの男と共に。

男は少女に問いかけた。

「何故そのまま飲み込まなかつたんだ?」

「…おねえちゃんのおいがしたから」

「匂い?」

少女の答えに、スーツの男は顎に手を添えた。

(もう少し調整が必要なのかもしれない…)

そんなことを考えながら。

m a w 了

ユイト・サーズデイはグラント・セントラルの王城に戻り、状況の報告を行っていた。

彼はキング・キルに直接報告することを申し出ていたが、それは受け入れられず、代理としてゾディアック十番位のワイバーンが彼の報告を受けていた。

椅子に座る老人は、報告を聞き終えると、深く息を吸って椅子に体を沈めた。

「ふむふむ…なるほどそうであったか…、部隊とスレイプニルのこととは残念だったな。サーズデイ君」

「いえ、かえって覚悟が固まりました。散っていった同志達の為にも、彼らはスタングの手で捕らえるつもりです」

「フッフフ…流石は騎兵だ。実直だ」

ユイトの言葉にワイバーンは笑みを浮かべた。

~~~~~

アンドレ達は森の中を進むうちに道に迷ってしまった。  
というのも一寸先すら見えないほどの濃霧に見舞われてしまったのだ。

彼らのいるツルギ山の麓には “霧の森” と呼ばれる場所がある。

半径数百メートル規模の大きな森で、そこは常に深い霧に覆われて

いる場所だ。

何故か日が高く上っていても霧が晴れることのない場所で、何人も人間が帰ってこれなくなつた為に、人々はよほどのことが無い限り寄り付くことの無いようなそんな森であつた。

そしてアンドレ達もまたそこで道に迷つたのだ。

正確には迷つたというよりは、方向感覚が分からなくなつたというのが正しいだろう。

しかし無理もない。

一寸先が見えないのだから。

「ユナ！着いてきてるか〜？」

「オツサン離れすぎるなよ！あつという間にはぐれちまうぞ！」

アンドレの言葉にユナは答える。彼らとの間には三步半の間隔があつた。

「そこのお嬢ちゃんはちゃんというるか？」

アンドレがもう一度声をかける。お嬢ちゃんとはマルチのことだ。

此処に来る前の池のほとりで出会つて以降、行動を共にしている。

彼女は頭が三つある子犬を腕にしつかりと抱きかかえながらユナの隣を歩いていた。

「マルチは僕の隣にずっといるよ！ちよつと休もうぜ？だいぶ歩いただろ？」

「この霧の中休めるか〜？俺はこの森を抜けるまで行きたいぞ？」

「疲れを知らないのかアンタは!？」

濃霧の中、ユナとアンドレの声だけが響く。

そして、

「いたっ!？」

「大丈夫？ユナ？」

ユナは突然目の前の何かにぶつかり、そのまま尻もちをついた。

マルチはしゃがみ込んで、ユナの様子を伺つた。

「いてて…って」

ユナが腰に手を当てながら見上げると、アンドレが立っていた。

「おいオツサ…！」

文句の一つでも言おうとユナが立ち上がった瞬間アンドレは軽く右手を上げた為、ユナは思わず押し黙る。

アンドレが言わんとしていることに気が付いたのはマルチだった。彼女は周りを見て、ユナに言った。

「ここだけ霧が晴れてる…?」

「え…?」

アンドレにそう言われたユナが辺りを見回すと、先ほどまであった霧はすっかり晴れていることに気付く。

否、正確には踏み込んだその場所のみが霧の無い空間になっていた。

まるでこの場所を隠す為に周囲を霧で覆い隠しているような、そんな場所であった。

そしてユナに目もくれず、依然として立ち尽くしているアンドレの視線の先、

そこには一本の大木と、その枝に留まる無数のフクロウ達。

そしてそれをまとめ上げているであろう、ひと際大きなフクロウが一羽、その大木のちょうど真ん中の枝の分かれ目に深く腰掛けていた。

否、フクロウというよりは、フクロウのような出で立ちの人間であった。

フクロウの様に見えたのは羽毛で作られたローブで、その布の隙間からは白く細い腕と脚がすらりと伸びている。

「珍しいお客さんが来たものね。こんなところまで人間が足を運ぶとは。本当に珍しい…」

フクロウは静かに、それでも厳かに三人にそう言った。

透き通るような女性の声だった。

彼とも彼女ともつかぬ彼の者の表情は、深くかぶったフードに隠れて全く見えない。

「ここはフクロウ達の森よ、迷ってしまったと言うのであれば、早々に立ち去りなさい。名も名乗れぬ人間達よ」

「え、あ…」

言葉を発そうとするユナを制し、アンドレは帽子を脱ぐと口を開いた。

「突然の来訪、失礼した。私はアンドレ・マクミリアと言う者だ。旅の道すがらこの森に入り、此処に辿り着いた次第」

「へえ…？ケルベロスを引き連れて？」

ユナは気づく。マルチはとうに気が付いている。

フクロウたちの視線は三人ではなく、マルチの腕の中に収まるアジーンに向けられている事に。

そしてアジーンは三つの頭を寄せ合ってその沢山の眼に怯えていた。

小刻みに震える小さな体を、マルチはしっかりと抱き寄せる。

しかしアンドレは、物怖じすることなく言葉を返す。

「ケルベロス？この子犬をケルベロスと仰いましたか？私には主人の腕の中で怯える子犬に見える」

「…アンドレと言いましたね？その子犬とやらがこの森で粗相を犯さぬと、我々に危害の及ぶ厄災を招き入れぬと、約束が出来ますか？果たせぬ場合は如何なる罰をも受け入れる覚悟を、我々は求めています」

「……お約束いたします」

アンドレは胸に手を当て頭を下げた。

その背中を見て、ユナとマルチも揃って頭を下げる。

三人の様子を、フクロウは見つめる。

どれほどの時間が経ったかというとき、フクロウは言った。

「いいでしょう、貴方の覚悟に免じて、此処にそれらと踏み入ったことを不問といたします」

「御寛大な御心に感謝いたします。私めは貴方様をなんと御呼び致しますでしょう？フクロウの長よ」

アンドレの問いにフクロウはフードを脱いで素顔を見せた。

整った顔に不釣り合いという印象のぎよる目を見て、ユナは思わず背筋が凍えた。

あまり目を合わせたくないと、失礼だと思いながらも思ってしまった

たのだ。

「わたしのことはホルンで構いません。アンドレ。」

ホルンはそう言って目を閉じた。

アンドレは素朴な疑問を彼女にぶつけた。

「ではホルン、一つ聞かせてくれ。ツルギ山に棲むと言われている精霊とは、貴方の事なのですか？」

ホルンは目を開き、アンドレを見て二回、三回瞬きをした。驚いているようだった。

「…人間の世界では、わたしは精霊になっているのか……？」

「…？、人間の世界とは…どう言った意味で？」

アンドレはホルンの言い回しが引つかかった。

ユナも同じくそこに違和感を覚えた。

まるでかつて人間の世界に昔いたような、そのような口ぶりであった。

「いえ…貴方には関係ない話ね。取り乱してごめんなさい…」

ホルンは首を横に振って謝罪した。

謝るほどの事ではないとアンドレは伝えたものの、彼女はすぐにもその話題からは離れたがっているようだった。

そんなとき、アジーンが、ワンと一声吠えた。

マルチが視線を追うと、アンドレ達のいる場所からは見えない場所、

ホルンが腰掛けている大木の根元の近くに小さな泉があった。

マルチは泉に駆け寄り、水面を見つめる。ユナもなんとなくそれに続いて、そんな彼女を見つめた。

そこまで大きくもなく、深くも無い。大人一人が仰向けに寝そべったときに全身が水に浸かるほどしかない泉だった。

「それは記憶の泉…その泉の水の中に潜ると、僅かな時間の間だけ、自分の過去を見ることができます」

「過去の…記憶…」

マルチはホルンの言葉を反芻する。

潜っている間の僅かな時間のみ見ることの出来る記憶。

「それは、誰でも入っていない場所なのか？」

アンドレは疑問を投げかける。

確かに霧の森の奥深くに隠すように存在するこのフクロウの森の中で、

こんな小さな泉があっても、使うどころか、辿り着くことすら困難なはずだ。

ユナはそう思いホルンを見た。

「信じるか信じないかは、貴方達次第。私は貴方達が泉に入ることを邪魔はしない」

ホルンの言葉を聞き、アンドレはコートと帽子を脱ぎ始めた。

ユナは慌てて彼を止める。

「お、おいオッサン！本気なのかよ!？」

「水の中に潜っている間だけなんだろう？それに見れるものなら見てみてえ」

アンドレはそういうとザブザブと泉に足を浸けて、ちようど真ん中の辺りで腰を下ろした。

その様子をホルンは静かに見ている。

アンドレは彼女を一瞥してからユナを見て言った。

「何かあったら叩き起こせ。んじや」

そうして彼は仰向けになり、完全に全身を水の中に沈めた。

こんなことをするだけで見れる己の過去の記憶がどんなものかを確かめる為に。

息なんてそんなに続くはずもないし、すぐに終わるだろうと思いついてアンドレは目を閉じる。

しかし次の瞬間、アンドレの身を包んでいた水の感覚が消えた。

(続く)



アンドレが目を開くとそこは薬品の臭いがツンと鼻につく部屋のベッドだった。

　　どうやらそこで寝ていたらしい。

　　体を起こして迷うことなく部屋の扉を開けて廊下に出る。

　　アンドレは頭の中で自分が何処に居るかを知っていて、

　　そして誰かに会いに行こうとしている感情が確かにあった。

　　しかし同時に、自分が過去の記憶を追体験している感覚もあった。

　　どうやらホルンが言っていたことは本当だったらしい。

　　しつかりと泉の中で記憶を見ているようだ。

　　だがどうやって現実世界に帰るのだろうか？

　　アンドレはぐるぐると思考を巡らせるが、そんな考えに辿り着く前  
　　にある部屋の前で立ち止まり、ドアをノックした。

「どうぞ…」

　　部屋の中から女性の声が聞こえ、アンドレはドアを開ける。

　　自分が眠っていた部屋と同じつくりの部屋で本を手にこちらを見  
　　つめる黒髪の少女の姿があった。

　　ペリドットのような透き通った緑色の瞳の少女。

　　彼女はアンドレを見てクスリと微笑む。

「おはよう、アンドレ」

　　アンドレもそれに応えるように口を開いた。

「おはよう、——。」

　　“　　ざばあ　　”

　　突然胸倉を掴まれて水面に引きずり出される感覚でアンドレは目  
　　が覚めた。

　　同時に強烈な息苦しさに襲われて、むせて咳き込む。

掴んだ手の主は、ユナだった。

「テメエふざけてんのか!?五分も水の中で寝こげやがって!!」

ユナの言葉にアンドレは驚く。

体感的には一分も経っていないと思っていたのだ。

そんな彼のただならぬ様子を見て、ユナも思わず手を放した。

「…本当に見たのか?過去の記憶を……」

「…ほんの少しだけだな」

アンドレが残念そうに答えた。ユナはその様子に思わず戸惑った。

懐かしそうでもあり、少し寂しそうに見えたのだ。

池から上がる二人にホルンが言った。

「記憶の泉で見ることの出来る過去は…貴方の心残り、或いは後悔、或いは禍根…或いは…幸福」

「……教えてくれ、アンタは精霊なのか?」

「…私は、ホルン。このフクロウの森と、記憶の泉を守る為に、此処に居る。それが貴方達に教えられるすべてです」

「……」

ホルンの言葉と、少しの沈黙。

またホルンが口を開いた。

「…貴方がまた過去の記憶を見たくなくなったら、此処に来ると良いでしょう。次からは、フクロウがここまで導いてくれるはず……」

ホルンが言い終えた瞬間、周囲が霧に包まれた。

突然の出来事に三人は狼狽える。

「お、おい!どうなってるんだ!?!」

「ユナ、落ち着いて…離れたらダメ……」

「俺まだずぶ濡れ……」

しかし霧はすぐに晴れ、三人は森を抜けていた。

遠巻きにはあるものの、首都グランドセントラルが見える。

「なあ、ホルンって一体なんだったんだ?」

「いや、僕が知るかよ……」

「ワウ!」

そんなやりとりをしながら、三人は歩き出した。

マルチはふと視線を感じ立ち止まる。  
振り返るとフクロウが見つめていた。

「またきてね」とでも言いたげに。

~~~~~

トト達はあれからしばらく歩き、ようやく首都グランド・セントラルに辿りついた。

手荒な手段を使うことなく街の関所を抜けることが出来てトトは内心ほっとしていた。

ここまで長い道のりだったと思うトトであったが、まだやることがある。

ここからトリユー・ゲオルクの自宅があるとされるグランドセントラル東区まで行かなければならないのだ。

「しかし、さっきの民兵は一体何かあつたんだろうか？」

「え？」

「いや、あれだけ怪しんでいた割に、随分あっさり通したと思ってな」「気になるなら、私が確認しに行こうか？」

アレスの疑念にステラはそう言つて来た道を引き返そうとしたのをトトは慌てて止める。

ステラは少しむすつとしていたが、トトがまたどこかでチョココレートを買うと約束して、ようやくステラは収めてくれた。

「トリユー・ゲオルクの家は東区にある。そこまで案内しよう。」

「あ…前から気になっていたんですけど…」

そう言つて歩き出すアレスをトトは呼び止めた。

アレスが足を止めて振り返る。

「…なんだ？」

「アレスさんは…彼のお知り合いなんですよね…?」
「まあな」

トトはここまでの道のりの中、トリユーという男がどういう人間なのかもそういえばよくわかっていなかった。

アレスは顎に手を当て少し考えてこう答えた。

「…酔狂な男だよ」

その言葉に首を傾げながらアレスの案内で向かったトリユーの住む東区ヴルカーノ通り22番地でトトが見たのは、

3階部分が吹き飛んだアパートメントだった。

~~~~~

「何を考えていらつしやるのですか?」

彼にはその笑みの理由が分からなかった。

ワイバーンは椅子から立ち上がり、杖をついて歩き出した。

「報告はキングに伝えよう。…だがその前に、君に見せておきたいものがある。着いてきたまえ」

そう言つて歩いていく老人の言葉に疑問を持ったユイトだったが、その背中に着いていくことにした。

向かった先は地下の研究施設で、ワイバーンとユイトをエンジンの爆音が出迎えた。

ユイトの視線の先で彼を待っていた “ソレ” は八本の脚を持つ幻獣スレイプニル。

と、呼ぶには遠すぎるほどの異形だった。

脚とは別に三本のタイヤが体から生えており、腹には巨大なエンジンを提げ、馬の呼吸に合わせてエンジンが唸り、マフラーから火が吹き出る。

その馬とは言い難い怪物は荒い息を繰り返しながら、何本も繋がれた鎖を激しく揺らして暴れていた。

怪物の目を見て、ユイトはポツリとこぼした。

「……………隊、長…?」

「一目見て気が付くとは、いやはや勘が鋭いな。」

呆然と立ち尽くすユイトの背後にワイバーンが立つ。

「君の隊長は君が捕えるべき者との戦いで肉体が完全に破壊されてしまつてな。こうする他なかったのだ。」

「……………」

「…肉体を失つてもなお我々に尽くそうとする彼に応えたいとは思わないか?」

「……………」

静かにその異形を見つめるユイトにワイバーンは続けた。

「彼らへの復讐に、君にはこのスレイプニルを与えたいと考えている。…どうかね?」

ワイバーンがユイトの表情を覗き込むが、ユイトの眼は目の前にいる己の上官を異形の怪物に仕立て上げた邪悪への殺意と憤怒で満ちていた。

目が合ったその瞬間、ユイトは腰に携えていた剣を思い切り彼の首目掛けて振り抜いた。

しかしその刃はワイバーンの首を斬り飛ばすどころか、彼の手によって防がれた。

ユイトの表情にワイバーンは笑みを浮かべる。

「アンタは此処で殺す!」

「ククククク…流石は騎兵だ、実直だ」

(続く)

~~~~~

トトが祖母が教えてくれた場所によく辿り着いた彼を待ち受けていたのは、

一部分が吹き飛んだアパートメントだった。

周囲をグラウンド・セントラル警察の警官が見張っている。

呆然とその光景を見つめるトトの表情をステラは心配そうに見つめている。

アレスがどう声を掛けていいか迷っているとき、トトは警官に声を掛けた。

「すみません、ここの住人の方と話がしたくて……」

「ここは立ち入り禁止だ。中へ通すことは出来ない」

トトの申し出を警官はあっさりとは断って追い返そうとする。

当然だ。道路から見える位置の三階の一部屋がまるまる吹き飛んでいるのだ。

よほどの何かがあったに違いない。しかしトトは食い下がる。

「あ、あの……せめて此処に住んでいるトリューさんの安否だけでも……」

「何？」

トトの言葉に警官は反応した。

思わず「えっ」と声を上げるトトに警官は詰め寄る。

「今トリュー・ゲオルクと言ったか？お前は奴の知り合いか？」

「え？あ、あの……」

「質問に答えろ。お前はトリュー・ゲオルクを知っているのか？」

「僕は、その……」

トトは思わず口ごもる。

警官は焦っていたのかトトの肩を掴んできた。いきなりのことでトトは体を強張らせた。

アレスは警官を止めようとするが、その場にいた他の警官に阻まれてしまった。

トトはかなり強く掴まれてしまい、痛み思わず顔を歪める。

それを見ていたステラは警官の手首を掴み、トトから引き剥がした。

「ぐお…!？」

警官は相当痛いらしく、掴まれた手をもう片方の手で掴んでいた。ステラは表情を変えることなく静かに言った。

「トトはトリユー・ゲオルクに会う為にここまで来ただけ。彼のことは何も知らない。私も知らない」

そう言っつて警官の手を放す。

やっと解放された彼は腰を抜かしてその場にへたり込んでしまった。

「彼女の言う通りだ。俺達は彼の家がここだということしか知らない」

アレスがそう言っつて警官もようやくトト達の話を信じる気になったのか、ばつが悪そうにしていた。

トトは安心からか、フウとため息をついた。

「とりあえず、トリユーさんはここにはいないみたいですね。誰か知っている人のことを探しましょう！」

トトは自分たちの徒労を無駄にしまいと二人にそう言ったが、その直後にグウとお腹の音が鳴った。

確かに空腹ではあったものの、それどころでは無く、ずっとそれを我慢をしていたトトはその音に顔を赤くした。

「まずは何かを食べなければならぬな」

アレスの言葉にトトは静かにうなずいた。

ステラはトトのお腹をじいっと見つめていた。

トトは視線に気付き、ステラに声を掛けたが、ステラはトトのお腹

に耳を近づけて

「もう一回聞きたい」

と言った。

トトはステラを自分のお腹から引き剥がして、

「恥ずかしいからダメ」

と言ったのだった。

ステラはトトの言う “ 恥ずかしい ” の意味が分からずに

首をかしげたが、納得することにした。

お腹の音を聞かれることは恥ずかしいことなのだ。と。

それはそれとして、ステラも何かを食べたくなかったので、トトの意見には賛成していた。

幸いにもグラランド・セントラルの東区は繁華街が集中している地区で、少し歩けば沢山の人が歩いている大通りに出た。

昼と夜では雰囲気ガラリと変わりそうな場所だとトトは思った。

三人はすぐに食べて移動しようということで、そのまま目に入ったレストランに入ることにした。

しかしそこは中はそれなりに人こそいるものの、その内の半分ほどは民兵隊だった。

彼らは昼間だというのに酒を飲んでいて、職務を全うしていないのは明らかだった。

その姿に、トトは表情を曇らせた。

見つかったら厄介なことになる以上に、彼らの兵士としての質の低さが気になったのだ。

客の一人が読んでいるセントラル・タイムスの記事の見出しが目に入った

“ グランド・セントラル郊外で装甲列車爆発、騎兵部隊スタング壊滅 ”

トトはそれを見てあのスレイプニルを思い出した。

彼は今どうしているのかと、立ち止まって考える。

「おい、帽子を深くかぶって外套をしつかり巻いておけ。見つかるぞ厄介だぞ」

アレスが小声でトトに言う。

その言葉にトトは少し慌てて身なりを整えた。

三人はスタスタと空いているテーブル席に座り、簡単に食べられるものを三人分頼んだ。

「チョコレート」

「はい？」

ステラがポツリと呟いたことに店員さんが首をかしげたのを見てトトは慌てて割って入る。

「あつ……ごめんなさい…… ココアとかはありますか?？」

「ココア? ああ、ココアね。おひとつですか?」

「はい……」

店員が不思議そうに奥へ歩いて行つたのを確認したトトは胸をなでおろした。

アレスは、何もそこまで必死な反応をしなくとも。 と思いながらため息を吐いた。

ステラはトトの服の袖を軽く引いてチョコレートをねだった。

トトはステラにチョコレートを割って渡したところで民兵隊の話が耳に入ってきた。

聞き流すわけにいかず、思わず耳を傾けてしまったのだ。

「聞いたか? 例のガキ逃がしたグレートウォールの件」

「ああ、G地区の国境警備隊の給与カットって話だろ?」

「それだけじゃねえ、G地区を第四軍の管轄にするって命令を、G地区の警備隊長が拒否して小競り合いになったらしいぞ?」

「まじか! 馬鹿な奴らだな国境警備兵共も」

「で、第四軍の指揮官がよ。警備隊長の息子を逮捕して人質に取ってるって話だ」

トトは民兵隊の男たちの会話を聞いていて手に思わず力が入っていた。

ギリギリと奥歯が軋むほど歯噛みして自分を抑えている。

ステラはトトに呼びかけて、肩に手を乗せるが、トトは気付かない。

「あーあー、G地区はこれから大変だな。その息子って誰なんだ?」

「たしか、ヴォル…だとか言ったかな？」

その言葉を聞いて、トトは耳を疑った。

自分に良くしてくれたあの心の優しい先輩が、民兵隊に不当に逮捕されたという事実を受け入れられるわけが無かった。

「ははは、可哀想にな。警備隊の隊長さんのところに生まれたってだけでそんな目に遭うなんてな」

「どうせ腰抜けの国境警備隊だ。底が知れてるさ」

「ハハハ、ちげえねえや」

「ハハハハハハ……」

彼らの嘲笑混じりの噂話は、トトの心を苛立たせるには十分すぎるほどに耳障りな物だった。

出されたサンドイッチに目もくれず、トトはその民兵隊の男達を睨みつけていた。

(お前たちに何が分かる！)

トトがそう思う頃には椅子から立ち上がっていた。

勢いよく立ち上がったことで周囲は静まり返り、店にいた人間の多くがトトを見つめていた。

それは噂話をしていた民兵隊の兵士とて例外ではない。

トトはツカツカと彼らの前に歩み寄った。

「なんだよ？何か用かガキ？」

「……て、さい……」

「…ああ？」

「…の、…してください……」

兵士の問いかけにトトは答えるが聞き取れない。

同じテーブルに座っていた二人が立ち上がり、トトの前に立つ。

「あゝ？聞こえねえよ？」

「ちゃんと顔見て言えや？オオ？」

兵士がトトの肩を掴み、その勢いで被っていた帽子が床に落ちる。

ステラはそれを見て立ち上がるようにするが、アレスに阻まれる。

彼を睨みつけるステラだったが、「今はダメだ」と言いたげに首を小

さく横に振るアレスの行動に納得するしかなかった。

トトは兵士達を睨みつけて言った。

「今の言葉、取り消してください……!」

「ああ? なあコイツ何が言いてえか分かるか?」

肩を掴んだ兵士はトトを指さしながら他の兵士達に声を掛ける。

トトはそんな彼らの態度に更に腹が立った。

「放せよ」

「ああ? だからハッキリ言えつつんだよコラ」

「手を放せつて、言ってるんだよツツ!!」

トトがそう叫んだ瞬間、トトの肩を掴んでいた手が、まるで見えな
い力によって引き剥がされるように離れた。

「う、おおっ!?!」

手が離れた勢いそのまま男は後ろに勢いよく倒れこむ。

その出来事に周囲はどよめいた。

“ 何が起こったのか? ” と。

それはトト自身も同じだった。

“ 地下水路で見たあの怪物といい、何かがおかしい。 ” と。

そして兵士の一人がトトの顔を見て言った。

「お、おい……コイツまさか……」

その言葉にアレスがまずいと思ったときだった。

店の扉が開き、白い軍服を身にまとった騎士が三人入ってきた。

突如現れた彼らを見て、店内は更にどよめいた。

「おいおい、国教騎士団じゃないか……」

誰かがポツリと呟いた言葉にトトとアレスは驚いた表情をした。

二人の様子にステラが首をかしげる。

騎士の一人が言った。

「何の騒ぎだ? 通報があつて駆けつけてみれば、民兵隊がこんなところ
で職務放棄か?」

「騎士団長様直々のお出ましとは思わねえよ……」

兵士の一人がつぶやく。騎士団長と呼ばれた男は兵士達に一瞥し
てからトトを見た。

目が合い、トトは一瞬狼狽える。

騎士団長はトトの次にアレスとステラを見た。

「彼は貴方がたの連れか？」

「…ああ」

アレスが頷く。

騎士団長はもう一度トトを見て言った。

「君達三名の身柄を一時拘束させてもらう。大人しくついてきてもらおう」

その言葉にステラが動こうとしたが、トトがステラを見て首を静かに横に振った。

騎士団長は部下二人に目配せをし、三人は彼らに連れられて店を後にした。

店の外で三人は手錠を掛けられ、馬車に乗せられてそのままその場を離れた。

一部始終を見ていた者たちは、馬車が見えなくなるまで、街道に立ちつづけていた。

そして、そんな様子を遠巻きから一人の男が見つめていた。

茶色のスーツに身を包んだ男は金縁眼鏡を掛け直して呟く。

「面白い記事が書けそうだ…。が、まずはワイバーンとキングに報告が必要だな……」

(続く)

王城内、玉座に座るキング・キルにスーツの男が報告を行っていた。
「つまりヒュプノスが今彼の身柄を預かっていると？」

「はい」

スーツの男は金縁の眼鏡に手を添えて頷いた。

キングキルは、なるほど笑みを浮かべると入口に目を向け、そこへ向かって声をかけた。

「では彼にもう一度体を張ってもらおうではないか。ワイバーン？」

キング・キルの視線の向けた先に、ワイバーンが現れ一瞥した。

「かしこまりました、キング…オーデインとスレイプニルを使わせませう…」

“ ドルオオン!!ドルルオオオン!! ”

~~~~~

王立国教騎士団に事実上の逮捕をされて、トト達三人は馬車でグラ  
ンド・セントラルの道路を護送されていた。

三人を覗いて車内に一人となった騎士団長の男は静かに三人を見据えている。

白と青を基調とした隊服に身を包んでいて、手に細身の剣を据えている。

「何故我々の武器を捨て置かせない？」アレスの問いに彼は口を開いた。

「君達を拘束するつもりは始めから無かったからだ」

「何？」

アレスは眉をひそめる。

今日の前に居る王立国教騎士団長、アウグスト・ヒュプノスはその肩書きと共に、

最強の12人の英傑 “ゾディアック” の8番位に就いている男だ。

トトのことを追いかけている者達の言葉とは到底思えなかった。

「手荒な真似をしてすまない。民兵隊から君達を保護するにはこうするしか無かった」

「え？」

「紹介が遅れた。私は王立国教騎士団長のアウグスト・ヒュプノスという者だ」

「あ、僕は……」

「君のことは知っている。聞きたいことがあるのは君の方なのではないか？」

ヒュプノスにそう言われ、トトは驚く。

少し考え、彼に問う。

「教えてくれませんか？トリユー・ゲオルクさんのこと……」

「分かった……では、我々が今知りうる情報を教えよう」

そうしてヒュプノスは以下のことをトト達三人に伝えた。

一つはトリユー・ゲオルクは数日前、民兵隊が押し入った自分のアパートの部屋を爆弾で吹き飛ばした直後逃走し、現在行方不明だということ。

二つは民兵隊はトリユー・ゲオルクを国家反逆の容疑で指名手配していること。

三つは逃走の際、ゾディアックの四番位 “ヒュドラ” が追

跡したにも関わらず、妨害を受けて捕縛に失敗していること。

この三つを聞かされたトトは考え、改めてヒュプノスに問いかける。

「……それで、僕はこれから何処へ連れていかれるのでしょうか？」

「君達は……」

ヒュプノスが口を開いた直後だった。

馬車は突然速度を上げて走り出し、トト達は思わず席から落ちそうになる。

ヒュプノスは慌てた様子で声を掛けた。

「どうした!?何があった!?!」

「団長!後方よりクリーチャーです!かなりデカイ!」

「クリーチャー!?!」

ヒュプノスが驚いた様子のまま窓から身を乗り出し後方を確認する。

彼の眼にはとてつもない速さで爆炎と爆音を放ちながら、こちらに向かつて一心不乱に足を動かす馬が見えた。

しかしその馬の姿は、異形だった。

八本の足と三つの車輪を持ち、巨大なエンジンとマフラーを備え、マフラーからは炎が吹き出しながらけたたましく嘶いている。

その爆音はトト達の耳にも聞こえ、トトも窓からその姿を見て戦慄した。

それはそうだ。機械と融合した怪物などという本にも記されていない存在をトトは知らない。

知らないもの、わからないものほど恐怖するものは存在しない。

馬が大きく嘶くが、その叫び声はエンジン音とマフラーから吹き出る炎にかき消される。

「アウグストさん!手錠を!」

「何?!」

トトの申し出にヒュプノスが驚く。

それはそうだ。今さっき手錠を掛けた人間から手錠を外せと言われていているのだ。

無理な相談というものだろう。

「出来るか！そんなこと！」

「〃 僕の 〃 じゃない！二人を解放して!!」

「なんだって!?!」

ヒュプノスが真つ向から否定した事に対し、トトが求めたのは自分以外を解放しろという申し出だった。

彼には今日の前に居る少年の考えが見えてこない。

「トト?」

ステラはトトに声を掛ける。

トトの真意を問う為に。トトはステラの意味を知ってか知らずか、口を開く。

「この二人は僕のことを知っている以外は何の罪もありません。貴方達の目的は僕なんでしょう?なら…」

トトがそこまで言ったところで、窓を見ると真横に並んだ機械馬の怪物が体当たりを仕掛けようとした瞬間だった。

「トト、危ない!」

ステラに覆いかぶさられて、トトは思い切り床に倒れ込む。

直後、車体が大きく横に傾き、馬車が勢いよく横転した。

引いていた馬はパニックになって街道を走り出す。

「トト、無事か?!」

「トト、けがは?」

アレスとステラに声を掛けられてトトはハツとして飛び起きる。

倒れこんだときに思い切り背中を打ちつけた痛み以外は大丈夫そうだと安心した。

しかし外ではまだあの機械馬のエンジン音がけたたましく鳴り響いている。

トトは完全に壊れた馬車の中から人が出られそうな隙間を見つけ、そこから外になんとか出て機械馬の姿を見た。

8本の足に三つの車輪を持ち、巨大なエンジンと一体になった馬の姿を。

その馬の背には黒い甲冑の騎士が巨大なランスを構えて収まって



いた。

トトはその馬の姿を見て、どういうわけか、どうしても彼の存在を思い出さずにはいられなかった。

「あ、…アレは…！騎兵の…！…」

「何だって?!」

アレスはそのような馬鹿なという表情でトトのを見た。

それはそうだ。あの騎兵部隊の隊長は装甲列車と運命を共にしたはずなのだから。

しかしその馬に跨る黒騎士はステラの姿を捕らえるなり、様子が変わった。

「ブラックロックシューター…！」

「…?!私を知ってる…?!」

黒騎士が初めて発した言葉にステラは首をかしげる。

そんな彼女のことなど構うものかと言うように黒騎士は手綱を引き、馬の上半を引き起こしたかと思うと、ステラめがけて突撃した。ステラは手錠を掛けられたまま大砲を出そうとしたが、それよりも早く彼女の前に誰かが立つ。ヒュプノスだった。

彼は剣を抜き、黒騎士の槍を剣で受け止めるとそのまま槍を弾いて、その体を大きくのけぞらせた。

黒騎士は馬を数歩後退させて体勢を立て直す。

「市民の保護を優先し、クリーチャーの対処を最優先に実行する！」

黒騎士と機械馬はヒュプノスに立ちふさがったことで、動きを止める。

戦意を失ったのか、はたまた様子をうかがっているのか、両者がにらみ合う。

機械馬が大きく嘶いた。

「俺の邪魔をしないでもらおうか?グリフィン」

黒騎士が口を開く。ヒュプノスはその声、言葉遣いに覚えがあった。

馬、槍を持つ騎士、何故気が付かなかったのか。ヒュプノスは驚いて言葉を掛ける。

「生きていたのか…!?スレイプニル！」

「生きていたさ。いや、正確には死にかけていた。だがこうして作り変えられたのだよ。体を」

「作り変えられた…?まさか…!」

「俺はそこまで答える気はない。…チツ、時間切れだ。後のことはお前に任せませう?グリフィン」

「待て!!」

ヒュプノスの制止を聞かずに、黒騎士は機械馬で何処かへ走り去っていった。

ヒュプノスはハツとしてトト達の方を振り返るが、自らに銃を向けるアレスの姿がそこにはあった。

そのすぐそばには不意を突かれたのか、完全に気を失って倒れている二人の団員の姿があった。

「すまないな騎士団長、ここで二人を囚われの身にするわけにはいかなぬ」

「手錠を…!?いつの間に…!!」

「トト!ステラ!今のうちに逃げろ!私では時間稼ぎにしかならん!」

「で、でもそれじゃアレスさんが…!」

「私の案内は此処で終わりだ!身勝手だが後は君たちの力でどうかしろ!早く行け!!」

アレスは冷たく言い放ち、目の前にいる国教騎士団長を睨みつける。

トトは少し迷ったが、ステラに肩を叩かれたことで決心がついたのか、

一度頷いて

「絶対に死なないでくださいね!!」

そう言うのとステラと二人でその場から走り去った。

「待て!!」ヒュプノスが叫ぶが足元に銃弾を当てられ、追いつく機会を逸する。

アレスは左手で折れた剣を抜き、ヒュプノスと対峙する、

「その剣は……！」ヒュプノスはアレスの持つ剣を見て驚く。

中ほどで折れた刀身、くたびれた鍔と柄、それでも品格を備えたその剣を。

アレスも彼の反応に「やはりな」と言いたげな表情で言った。

「君の前でこれを抜きたくは無かったよ。ヒュプノス」

「まさかアナタだったとは気がつきませんでしたよ……アレス將軍  
！」

(続く)

「將軍、私は　”　彼ら　”　を国教騎士団の保護下に置くことで民兵隊や他のゾディアックから守るつもりでした…、何故私を止めるのですか？」

「私は私でお前を信用できないからだよ…、私を裏切ったことでそのゾディアックの地位に就いたお前のことが…！」

「……」

アレスの言葉にヒュプノスは言葉を詰まらせる。

騎士団長のそんな様子を一つだけとなった真紅の眼で見つめるアレスは折れた切っ先を彼に向ける。

「どうしても、戦わねばならないのなら…：…今や王位を追われた貴方は逆賊。私は、私の為に戦います」

「墮ちるところまで墮ちたな。ヒュプノス」

「貴方こそ」

二人同時に踏み込み、互いの剣がぶつかり合い火花が散る。

~~~~~

トトとステラは街の中を走り抜けていた。

なるべくその場から離れる為に。出来るだけ遠くに離れるために。しかしトトは走り疲れてしまい、そこでへたり込んでしまった。

「はあ…はあ…」

「トト、大丈夫？」

ステラは荒い呼吸を整え、なんとか立ち上がろうとするトトの肩を抱いて顔を覗き込む。

トトは首を縦に振って答える。しかしトトには最早アテというアテが完全に無くなってしまった。

トリュー・ゲオルクには会えず、何処へ行ったかもわからない。案内を買って出てくれたアレスもまた自らの為に騎士団長を食い止めている。

今の自分は何処へ行き、何をすべきなのかが分からず、必死に考えるがそれもまとまらない。

そんなとき、ふとトトの頭によぎったことがあった。

彼を知っている人が他にいるかもしれない。

それはそうだ。此処はグラント・セントラル。彼が住んでいた街で彼を知っている人を探すことは出来るはずだ。

「ステラ、トリューさんを知っている人を探そう！何処へ行ったか分かるかもしれない！」

「わかった。探すの手伝う。」

トトの提案にステラは頷き、迷いなくトトを抱きかかえる。

驚く彼の言葉も聞かずにステラは高く跳躍し、建物の壁を、屋根を蹴り上げて空を舞った。

トトは帽子が飛ばないように手で押さえながら彼女が向かう先の景色を見ていた。

探すべき彼を知る人が多そうな場所へ。

「トト、知っている人が居そうな場所は？」

ステラの問いにトトは悩む。

それはそうだ。グラント・セントラルには初めて来た。

分かるはずがない。

ただグラント・セントラルが五つの区から成る都市ということを知っている。

この街の人間のことを知っている人が居る場所となると、まず思いつく場所は一つしかない。

「中央区にある役所を見つけよう。まずそこで情報を集めない」と

「わかった。どう行けばいい？」

ステラの問いに、トトは指さす。

「あのお城、あの方向に向かおう。」

トトの言葉にステラは頷き、また屋根を一つ、二つと蹴って空を飛んだ。

二人は中央区の中心に建つ王城へ向かうのだった。

~~~~~

民兵達が忙しなく連絡を取り合い、グランドセントラルの区内は慌ただしかった。

それは民兵隊を統べる女帝の神経を苛立たせた。

一对の角を生やし、その右目に深紅の炎をたぎらせた “ ヒュドラ “ は地面に鋸を突き立てる。

「うるさいわね！一体何の騒ぎか説明なさい!!」

周囲の兵士たちが恐れをなす中、彼女の前に “ フリアエ “ が姿を現した。

ざわめきの中、 “ フリアエ “ は口を開く。

「すべて計算通り。 “ プルート “ と “ ケルベロス “ がもうこちらへ来ている。アナタは待機」

「はあ？アンタ誰に口を聞いているの？」

“ ゴツ!! “

“ ヒュドラ “ はもう一度鋸を突き立てて、鈍い音を響かせた。

「この女帝の私がッ！この愚図共に全部を任せてッ！黙って座って居ろって言うのッ!?!」

右目の炎が強くなる。しかし “ フリアエ “ の眼は静かに涙を流し続ける。

「吠えても何も変わらない。これはキング・キルの判断、命令…。従うほかない…」

“ フリアエ “ はそう言い残して姿を消した。

瞬時に霞と消えた為、 “ ヒュドラ ” に反論の機会は与えられないことは無かった。

彼女はギリギリと歯を軋ませながら再び、

“ ゴツ!! ”

右手に持った鋸で地面を穿つ。

その衝撃は地響きの様に周囲を振動させ、周囲の人間は足を取られ、その場で尻もちをつく者もいた。

女帝、ブラツクゴールドソーと恐れられた彼女の怒りを表すかのように、右目の炎は燃えたぎり、消えることは無かった。

“ ヒュドラ ” 様！捕獲対象が中央区に入ったとの連絡がありました！

「！」

民兵の報告に彼女は耳を疑った。

足取りを追いかけていたはずの存在が自らの懐に入り込んでくることが信じられなかったのだ。

しかし、キングの命令だと言った “ フリアエ ” の言葉が重しとなり、彼女の判断を鈍らせた。

「…いつでも身柄を押しえられるように見張っていると伝えなさい……」

「？、了解しました！」

兵士は彼女の様子に首を傾げながらも敬礼をした後、走り去る。

“ ヒュドラ ” は兵舎に行き、自らの部屋に置かれた大きな椅子にドツカリと座り、頬杖を突いて目を閉じた。

“ つまらない ” 心の中でそう呟きながら。

~~~~~

ヒュプノスとアレスの戦いは決着がつかぬまま、アレスは周囲を民兵と騎士団に囲まれてしまっていた。

「ハア…ハア……」

「はあ…はあ……」

二人とも息が上がっているが、双方の気迫に気圧されて周りは何も出来ず、持っている武器をアレスにただ向けているだけのままであった。

「いいか！お前たちは手を出すんじゃないぞ！」

ヒュプノスが叫ぶ。

「何の真似だ？」彼にしか聞こえない声でアレスが問いかけた。

「…腕が鈍りましたな？」

ヒュプノスは問いかけには答えずにそう言った。

アレスは彼の言葉に自嘲気味に答える。

「この剣と同じき。あの日、腹心であったお前に裏切られ、城とこの街から追われ、逃げて逃げて、辿り着いたのは忘れ去られた廃教会だった。そこで一年生きたが、その頃には街へ行つて誰が私の顔を見ても、誰も声を掛けてはこなかった。その時に悟ったのだ。皆私の顔ではなく、権威を見ていたのだ。…それに気が付いたとき、この剣の様に、私の心も折れてしまった」

「將軍…」

ヒュプノスが次の言葉を発そうとしたとき、アレスの背後に一人の少女が降り立った。

否、少女と呼ぶには、異質すぎた。

両腕を取り付けられた巨大な機械の腕にしたその少女を、彼は知っていた。

ゾディアックの6の席に座っていた少女、その名は、ストレンジス

民衆は彼女を “ ゴーレム ” と呼んだ。

振り返り、彼女の存在を確認したアレスだったが、すぐに彼女の巨腕に腹を殴られる。

「ッ!!う、ぐ…ッ!!」

アレスは悲痛な声を上げ、その場に膝と手を突いた。

ヒュプノスが駆け寄ろうとするも、 “ ストレングス ” の右手が阻む。

「どういう風の吹き回しだ…?」

「キングの命令に他ならない。貴方がすぐに終わらせないから私が来た。」

ヒュプノスの問いにストレングスはそう言っただけで左手でアレスの体を驚掴みにする。

「う、ぐう…!!」

アレスは苦悶の表情を浮かべる。

身体がミシミシと嫌な音を立てるのを否が応にも感じていた。

「や、やめろ…!」

ヒュプノスがそう言った直後、彼女の頭に声が響いた。

その声の主が誰かを瞬時に察したストレングスは手の力を緩める。(ジュン、その男を此処に連れてきなさい。私はその男と話がしたい。)

「…了解、キング・キル。仰せのままに。」

ストレングスはそう呟くと、アレスを掴んだまま、高く跳躍し、屋根伝いに王城へ向かって飛んでいった。

ヒュプノスは自らの制止すら完全に無視した行動に呆然とするしかなかったが、足元に視線を落とすと、アレスが持っていた折れた片手半剣が残されていた。

中ほどで折れた刀身、くたびれた鍔や柄、しかしそれでも品格を備えたその剣を拾い上げ、ヒュプノスは呟く。

「剣は折れても鍛え直せます…! 貴方が折れたというのなら、私が鍛え直すまでです…!!」

「国教騎士団長殿、逮捕者に逃げられたと聞きましたが、どういうことかな?」

声を掛けられ、見るとそこには民兵隊の高官が立っていた。

顔をニヤつかせながら、民兵に手招きし、それに合わせて民兵達はヒュプノスに銃を向ける。

「この件の責任は重大だと認識している。従って然るべき形で “

責任 “ を取るべきだと…”

「くだらない責任論でこの私に “ 腹を斬れ “ と宣うか。薄汚
いやツめ。」

「貴様!!」

高官が銃を抜いた次の瞬間、高官の銃を握る右の手首が宙を舞つた。

ヒュプノスが目にもとまらぬ速さで切り飛ばしたのだ。

その激痛に高官の悲鳴が木霊し、返り血が民兵達の服に、顔に飛び、目に入った者も居た。

「こ、コイツを殺せ!!」

高官の声に慌てて銃を向けたのを皮切りに、

騎士団員たちが武器を構え一触即発となるも、

「分からののか!!」という騎士団長の一喝で全員が動きを止める。

「この場で争うのは不毛だ!戦力を無意味に消耗しないでいただき
い!!」

その言葉で騎士団員はその場から撤収を開始した。

高官はヒュプノスを睨みつけていたが、すぐに来た車に乗せられ治療の為に運ばれていった。

~~~~~

一方その頃、グランドセントラル郊外

「やっと着いたあああ…歩き疲れて死ぬかと思った…」

岩に腰を下ろしてくたびれるユナとマルチをよそに、アンドレは双眼鏡でグランド・セントラルから立ち昇る黒煙を覗き、一人いぶかしんでいた。

「あの少年とアレスの旦那、無事だといいがなあ……」

(続  
く)

~~~~~

役所のいくつもある窓口では、職員が様々な要件の対応を行っていた。

ステラは長椅子に腰掛けながら、遠くの椅子に座っている子供を見ていた。

歳は10歳くらいだろうか。乳母車の中で眠る赤子と、窓口に居るであろう母を交互に見ていた。

少しして、母親が子供のもとに戻って、何やら話をしていた。

ステラはその家族の会話に耳を向ける。

「メアル、いい子にした？」

「うん！リリエラも泣かなかったよ！」

「ふふふ、偉いわね」

そう言つて我が子の頭を撫でる母親の姿をステラは見つめていた。

~~~~~

「すみません、ご本人の委任状が無い場合はそのような申し出は受け付けはご遠慮させていただいております…」

役所の窓口でトトはまたも出鼻をくじかれてしまっていた。

しかし無理もない。いきなりやってきてトリユー・ゲオルクの戸籍を見せて欲しいなどと言う申し出は断られるのは目に見えていた。

しかし来た以上、すぐには引けずに無理を承知で食い下がる。

「すみません、どうにかならないでしょうか？どうしても何処に行つたかを知る必要があるんです…！」

「申し訳ございません、規則ですので…」

窓口で頭を下げる気弱そうな女性の気まずそうな言葉にトトは諦めて踵を返した。

ステラは良いの？と問いかけるが、トトはいいよ。とだけ言った。そうして役所を後にしようと扉に手を掛けたときだった。

「ねえ、貴方…先生を探しているの？」

「え？」

急に声を掛けられ振り向くと、二人の男女がそこに居た。

歳はトトよりも五つ程上だろうか。

しっかりとそうな女性の隣で、髪に寝ぐせがついたままの男性があくびをしている。

女性は「ちよつと！」と男性を小突いてからトトに向き直る。

「いきなりごめんさい。私も先生のことを探そうと思つてここに来たの。良かったら協力してあげる」

「え、ええつと…」

いきなりの申し出にトトは困惑した。

しかし渡りに船だとも思った。このチャンスを逃す手はない。

「お、お願いします！」

「決まり！じゃあちよつと着いてきてー！」

女性はそう言つて軽快に歩き出し、トトは慌てて着いていく。

男性が「ええ？まだ名前も聞いてないのに…」と言う言葉に「そんなの後後！」と女性が答えるのを後ろから見ながら歩くトトの肩をステラが叩いた。

「トト、信用して大丈夫？」

「この人たちを今は頼ろう。もしものことがあつたらまたお願いすると思うけど…」

ステラは「…うん、わかった」と頷いてトトの隣を歩いた。

手がかりを掴むため、トトの足取りは先ほどよりしつかりとしたものだった。

そうして二人の後ろをトトが歩いていったときだった。

「オイそこのお前！止まれ!!」

後ろから声を掛けられ、トトは振り返る。

民兵だ。「そうだ、お前だ。持っているものを見せろ」と言いながらトトを指さして近づいてくる。

持っているものと言うのはトトが、肩にかけている猟銃のことだろう。怪しまれることを避けるため、トトは布に包んで隠していたのだが、気休めでしかなかったかとトトは焦った。

「ちよつと待ってください！」

しかしステラよりも先に前を歩いていた二人がトトを庇うように前に出た。

民兵隊はその二人に銃を容赦なく向けて言った。

「邪魔をするな！妨害行為で逮捕するぞ！」

「この人は人を探していて、私達が手を貸しているんです！何の罪もありません！」

「貴様らも仲間か！全員膝をつけ！」

女性の言葉に耳を貸さない民兵は銃を下ろさずに言った。

トトや男性は女性を制止させるが、負けじと引く様子を見せない。

このままではまずいと思ったトトだったが、その様子を見てステラが動いた。

「彼らに罪はない。私達も何もしてない。貴方達に何も疑われることはしていない」

三人を庇うように手を広げて真っ直ぐな瞳を向けるステラに、兵士たちは狼狽えた。

そのまま睨み続けるステラの様子に兵士は「もういい、行け！」と言って去って行った。

面倒くさがったのか、

あるいは怯えたのか、

答えはトトにはわからなかったが、とりあえずの安心に息をついた。

その後ろから女性がステラに声をかける。

「なんだかよくわからないけど…ありがとう！えつと…」

「…？」

女性が名前を聞いていなかったことに言葉を詰まらせたのを見て、

ステラは首をかしげたのを見て、慌ててトトは助け船をだした。

「あ、この子はステラって言います。僕はトトです」

「ステラちゃん凄いいじゃない！カッコいいよ！私マイっていうの！トトくんもよろしくね！」

「…ナミマ」

二人からそう言われトトは帽子をとって一礼した。

ふと視線に気づいたトトが目をやるとステラがジーっ見つめている。

「……ステラ？」

トトが首を傾げるとステラは言った。

「トト、私もやれば出来る」

「え？うん…」

「私、えらい？」

「あ…」

ここでトトはステラがどうして欲しいのかが分かって、

「うん。ステラはえらいよ。ありがとう」

と言ったのだった。しかしステラはトトの手を掴み、自分の頭に乗せてから

「トト、もう一回」

ステラにそう言われ、トトは恥ずかしいなと思いつつももう一回。

「ステラ、ありがとう」

と彼女の頭を撫でながら言った。

ステラは満足げに目を閉じる。

自分の胸の奥に暖かくなる何かをステラは感じた。

「さあ、行くよ！学校はもうすぐそこだから！」

「はいー」

マイの言葉にトトは頷いた。

そうしてホーリー・ウッド大学校に着いたトトは二人に案内され、トリューの研究室の前に来た。

しかしドアノブを捻り、マイが頭を抱えた。

「あちやー…先生やつぱり鍵掛けていったみたい。ここまで来たのにごめんなさい」

謝るマイにトトは慌てたが、ナミマがドアの前に立ちガチャリと鍵を開けた。

それを見てマイは驚いた表情でナミマを見た。

「え!?なんでナミマが鍵持ってるのよ!？」

「教授から合鍵を借りてたんだ。提出物をいつでも出せるようになって」

そう言つてナミマは研究室の扉を開けた。

そして部屋に入った彼らが見たのはトリユーが使っている机に腰掛け、分厚い書物を読みふける一人の少女。

白いセーターに、ピンクのスカート、花の髪飾りに、大きな白のキャスケット帽、

整った容姿に赤縁のメガネと赤い瞳が印象的な少女だった。

少女はトト達を待っていたように彼らに視線を映し、口を開いた。

「あら、随分遅かったわね?」

トトは少女の顔を見て驚き、ステラを見て、もう一度少女を見た。思わずぼつりと呟いた。

「…ステラに…似てる…?」

似ていたのだ。

目の前の少女は、髪や瞳の色が違うが、その容姿がステラに瓜二つだったのだ。

(続く)



「貴方は誰？どうやって鍵のかかっている部屋に入ったの？」

真っ先に少女に言葉を投げかけたのはマイだった。

彼女はナミマを押しつけ、少女の前に詰め寄った。

少女はフンと不敵な笑みを浮かべている。

「私はジャンヌ。アナタたちと同じこの学校の生徒よ」

「え？貴方も？」

ジャンヌと名乗った少女はマイの問いかけには答えずに

「そんなことより」と前置きをして持っていた本を見せながら話しはじめた。

ナミマはその本に見覚えがあった。

羊皮紙で作られた大きな蔵書。トリユーが姿を消したあの日、

そのページの一つを取って見せようとしていたあの蔵書と同じものだった。

「あなたたちはトリユー先生がどんなことを研究していたか、知っているかしら？」

「えっ……？」

ジャンヌの問いかけにトトは言葉を詰まらせる。

トト自身はトリユーが学校で教鞭を振るっているという話は聞いていたが、

具体的にどんなことを教えていたかまでは知らなかった。

それはマイも同じだったようだが、ジャンヌは気にせず話を続ける。

「言霊の魔法って知ってる？」

「言霊の……」

「まほじゅ？」

ジャンヌの問いにトトとステラが聞き返した。

「魔法は火、水、風、土、雷の五つ、失われた光も合わせて六大魔法と言われているの。そして、その魔法に必要なのは呪文の詠唱と、杖に準ずるもの。訓練を重ねれば無詠唱も可能だけれど、でも…杖を必要とせず、言葉が呪文と杖を兼ねることができる魔法があるとすれば…」

「言葉を…魔法に？」

「それをトリユーが調べてたの？」

ジャンヌの話にステラが疑問を投げかけた。

ジャンヌはそれに答えるように蔵書を開いて中身を見せた。

そこには不思議な文字の羅列が書かれていた。

しかしトト達が普段使っているアルファベットとは全く違うものだった。

「先生はこの文字で構成される言葉の意味なんかを研究していたわ」

ジャンヌはそう前置きをした上で続けた。

「私ね、この言葉こそが言霊の魔法に繋がる言語だと思っているの」

「あの、それで…トリユーさんがどちらに居るかは、貴方はご存知ないんですか？」

ジャンヌの言葉をトトは遮り、問いかけた。

彼女はトトの方を向いてフンと微笑んでみせた。

「知っているわ。でも…貴方は先生を何のために探しているの？」

「えっ…」

トトは言葉を詰まらせた。

どう説明しよう？突然民兵に襲われ、

手紙を託された上でトリユーという男を頼れと言われ、

アレスと共に民兵やゾディアックからの追跡を逃れて此処までやって来たが、

トリユー・ゲオルクという人間に頼ったとして、この状況は本当に改善されるのか？

また、どうやって今までのことを説明すれば良いのだろうか？

「いきなり学校にやってきて、先生に話があるなんて、そもそも貴方は何処の誰で、何故わざわざ非常勤講師のトリユー先生を御指名なのか

「しらっ？」

「僕は…その…」

「トトはトリユーに用事がある。トリユーの居場所を知ってるなら教えて」

二人の間に割って入ったのはステラだった。

ステラの青い瞳がジャンヌの赤い瞳を見て問いかける。

「ふふふ、勘違いしないでね？ 私は教えないなんて一言も言っていないわ」

「え…じゃあ、トリユー先生が何処にいるのか教えてくれるってこと？」

マイの問いかけにジャンヌは「勿論」と答え、こう続けた。

「でも、先生は知ってるの通り追われている身…、当然だけど大学にも姿を見せていないの」

「先生はそもそも休講、大体そういうときは旅行に行く…」

「いやいやナミマ、アンタもう忘れたの?! 先生の家が爆発事故で、先生は今行方知れずだつて言つてたじゃない!」

「あ…」

ナミマはポンと手を叩き、それを見てマイは呆れた。

トトは二人の会話であの窓が吹き飛び焼け焦げたアパートメントを思い出す。

そんな状況の中だというのに、ジャンヌはやはりどこか他人事かのような余裕が見られた。

「さ、話を戻そうかしら？ 貴方は何故トリユー先生を探しにはるばるここまでやってきたの？ 北にある壁の街グレートウォールから」

「な、なんでそれを…」

「服を見れば分かるわ」

ジャンヌに即答され、トトは後ずさる。

自分が民兵に突き出されることを想像して冷汗があふれ出る。

しかし「安心して」と前置きして彼女は言った。

「民兵には黙っているわ。私も彼らの事が嫌いなもの。そして、トリユーのところに案内してあげるわ？」

「えっ…?」

思わぬ申し出にトトは拍子抜けした。

しかしステラは違った。

「話が上手すぎる。裏があるなら全て話して」

「あら私を脅すの? ステラ?」

フフンを不敵な笑みを浮かべるジャンヌにステラは詰め寄る。

「私は本気。トトを危険に晒すようなことは、絶対にさせない」

二人の一触即発の状態は部屋の空気を支配する。

三人はその様子を固唾を飲んで見守ることしか出来ない。

「…ふっ」

ジャンヌは口元に手を当てて、まるでにらめっこに負けた子供のようにくすくすを笑いはじめた。

ステラは眉一つ動かさずに彼女を見つめる。

「そんな怖い顔しないで」とジャンヌは言った。

「当然だけど条件があるわ、私が欲しいのはトリユー先生の持っているこの本よ」

「はあ!? そんなの私達が決めていいわけじゃない!?」

マイが声を荒げた。ナミマが彼女の肩に手を当てて制止する。

トトは思わぬ条件に狼狽えた。

トリユーが研究しているとする言語の資料だ。恐らく唯一で替えが効かない代物だろう。

ジャンヌはそれを知っていてそんな冗談みたいな話を吹っ掛けているに違いない。

こういうことを言えばあきらめる。

そういう考えなんだろうと、トトは思った。

ステラは振り返り、トトの目を見る。

彼女は何も言わなかったが、その青い瞳は「トトに任せる」と言っているように聞こえた。

トトは言った。

「分かりました。僕の責任でその本を譲ります!」

「ふふふ、交渉成立ね?」

「ちよつ、ちよつとトト君!？」

マイがトトの肩を掴む。

「トリューさんには、僕からちゃんと伝えて頭を下げます。どんなことを言われても、かならず責任は取ります」

「トト君…」

「じゃあ決まりね、行きましようか？トリュー先生が居る場所へ」

ジャンヌに促され、トトは彼女の後に続く。

ステラもそれを見て歩き出そうとしたときだった。

「待って」

呼び止められ、三人は立ち止まる。

振り返ると呼び止めたのはナミマだった。

彼は真つ直ぐに、一人振り返らないジャンヌを見つめている。

「トリュー先生が何処に行ったか。それだけ教えて」

「……」

彼の問いかけにジャンヌは答えない。

彼女が振り返らずにこちらを見ようともしない様子に、ナミマは口を開く。

「君が答えないなら、君のことを民兵に通報する」

「ちよつとナミマ!?!何を根拠に…!?!」

マイがナミマを諫めようとするも、彼の言葉にジャンヌは振り返り言った。

「中央区と東区の境にある、歌劇場よ」

~~~~~

「キング、連れてきた」

王城内、玉座の間。

ストレングスはその腕にアレスを提げてやってきた。

乱暴に地面に放り投げられ、玉座に座る男の前に転がされるアレスはなんとか起き上がり、

男の顔を見た。

キング、確かに彼はそう呼ばれた。

1年前、たった数日で軍事独裁政権を終焉させ、革命政府と銘打った新たな政権下で

殺戮の王（キング・キル）の名のもとに、民兵達に暴虐を働かせている男。

彼は玉座からアレスを見下ろして言った。

「随分と無様な姿に成り下がったものだ。アレス」

「……私を呼び捨てにする貫禄まで身に着けたようだな、カール・アイザー・ラブレス。頭文字を取ってキング・キルとは恐れ入ったよ」

「会えて嬉しいよ、お前の行方はずっと追っていたが長いこと見つけられていなかった。さぞ優秀な部下がよく働いてくれたのだろうなあ」

「……誰も信じずに生きていたからだよ。カール」

突如ストレングスの巨腕がアレスに振り下ろされ、アレスは地面に這いつくばるように叩きつけられた。

「ぐう……ぐうはっ……!!」

苦痛の表情を浮かべながらもアレスはキング・キルを睨みつける。彼はその眼を見て一言、

「……面白い。ふさわしい死に場所を用意してやろうアレス、いや……アレス元將軍」

連れていけと言われたストレングスはそのままアレスを掴みあげ、玉座の間を後にする。

玉座に座るキング・キルは右手で左手を包むように握る。

その左手は僅かに震えていた。

彼はアレスの眼を一瞬見て、そして恐れたのだ。

政権を、地位を、軍人としての名誉を、全てを奪い去ったにも関わらず、

彼が見たアレスの瞳には、未だ闘志が宿っているように見えたのだ。

(五章　　くGrand Central　　了)

Side Story 2 Dullahans
Charriot

~~~~~

「お客さんよ！起きてくれ！ついたよ！」

男に揺すり起こされ、青年が目を開く。

身に着けている衣服の作りや、その顔立ち、長く艶のある黒い髪は、彼が異国の者であると一目で分からせるには十分だった。

彼は東洋は倭ノ國からこの船に乗って海峡や運河を渡り、そしてこの地にやってきたのだ。

もう既に一緒に載せられた荷物達は運び出されていたようで、あとの荷物は彼一人と言うわけだ。

彼は男に「かたじけない」と一瞥してから金の大判を一枚握らせて立ち上がる。

脇に置いていた打刀とライフル銃を腰に差し、赤い鞆の太刀を羽織の内側に背負って船を降りた。

男はそれを見るなり慌てて男を呼び止めた。

「あ、お、おいおいおい！おいさんよい!？」

「ん？船代が足りなかったか？」

青年の言葉に男は首を横に振る

「ち、ちげえよ！多すぎだつてんだ！これじゃあ…」

「ああ、なら良かった。それで美味しい飯でも食べるといい」

「な!?!…あ、アンタ変わった奴だな…。なんかの縁だ、名前を聞かせてくれよ！」

男の言葉に、青年は答える。



「コウガミ アオイ。神を守る葵と書いて、 “ 神守 葵 ” とい  
う」

葵は男に別れを告げてその場を後にし、初めて降り立つ西洋の国の  
景色を見据えた。

家や商店などの建物の作り、行き来する船の造り、この海で採れた  
であろう魚介達に生活を営む人々の着ている衣服や顔立ち、そのどれ  
もが葵の住んでいた町と違って、軽い散策と思っていた葵の歩み  
を遅くさせる。

「…ん？」

船が止まっていない波止場近くの道端で、人が一人カモメに啄まれ  
ていた。

行き倒れか…と葵は思ったが、うつぶせに倒れているその者の背中  
が微かに上下していることに気が付いた。

カモメを追い払いながら男にかけより、膝をついて声をかける。

「もし、もし。口は聞けるか？立てるか？」

「……」

「ん？」

微かな声を聞いた葵は男の口元に耳を寄せる。

次の瞬間、

“ぐぐぐぐぐぐぎゅうるるるるるるる”

「……」

けたたましく鳴り響く腹の虫。葵のものではない。

倒れているその者から発せられた後、声が微かに聞こえた。

「……み、水……」

~~~~~

「いやあーまっことかたじけない！危うくそのまま極楽に逝ってしま
うかと思っていたところであーぎゅるー！」

「……」

焼いた魚にガツガツと食らいつき、ぐびぐびと茶を飲みほしている男の姿を、

葵はあきれた様子で見っていた。

どちらも腹を空かせている彼を見かねた葵が市場で手に入れ、火を借りて彼の為に焼いたものだ。

それを男はありがたいありがたいと言いながらむしやむしやと手づかみで齧りついて骨ごとバリバリと食べてしまっている。

「いやあしかしこの国で獲れた魚は美味しい!!魚を食べたのは久しぶりでござる!本当にこの恩は忘れないでござる!」

そう言いながら何度も頭を下げる男に葵はやれやれと呆れた。

見ると男は袈裟をまとって、傍らには錫杖も置いてあることから彼が倭ノ國の僧侶であることは間違い無かった。

「そういえばまだ名乗っていなかったでござるな!拙者は日華(にちか)か)。見ての通りのしがない僧侶でござる」

「……神守 葵。ただの僧侶が何故こんな遠い西の地に?」

「それは勿論修行でござる!拙者はまだ仏門を下ってふた月と経っていないものであるがゆえ」

「髪も剃らずに外国へ飛ばす寺は聞いたことがない」

葵は素朴な疑問を投げかける。

仏門に下るものは頭髪を剃り、一年は寺に籠もりきりで読経と写経をするものだと言わされていたからだ。

彼のもつともな質問にも日華は動じることなく魚を頬張りながら話す。

「拙者から和尚殿に申し出てこうして國の外を歩き、釈迦の教えを説く旅の許しを得たのでござる。魚たちは御馳走になった。このご恩は忘れないでござるよ葵殿」

「あ、ああ……」

おかしな男だと葵は思った。

日華は手を合わせ「ごちそうさまでした」と言ってから葵を見て、

「何故葵殿はこの國に？」と問いかけた。

葵が答えようと口を開いたそのときだった。

「キヤアアアアアア！」

「騒ぐな！こつちへ来い!!」

絹を裂くような女の悲鳴とそれを黙らせるように響く男の怒声。

二人がその声のする方を向くと、深緑色の服に赤い腕章を付けた男が一人の女性の腕を掴み石畳の地面に引き倒しているところであった。

この国の兵士だろうか？と葵は思った。似たような服装の男達は女性を取り囲み、中には手に手に提げた小銃を向けている者までいる。

周囲の人間は助けるどころかその男達を畏怖するように見て見ぬふりをするばかりであった。

「あれはこの國の民兵でござる。一年前に起きた革命戦争で軍事政権が倒幕して以降、革命政府直轄の民兵団による治安維持が」

「ちよ、ちよつと待った」

日華の話葵は手で制して遮る。

「革命って……？それに軍事政権とはどういうことだ？この國は王政のはずじゃ……」

葵の言葉に日華は「知らぬでござるか？」と葵の方を振り向いた。

しかし葵はそこには無く、日華は周囲を見渡す。

「何だ貴様あ!!」

直後響く民兵の怒声、見ると葵は女性を取り囲む民兵達の前に立って何かを言っていた。

日華は慌てて立ち上がり葵に駆け寄る。

「このご婦人が貴殿らに何をしたかと聞いているだけだ。真つ当な理由であるなら邪魔立てするつもりは無い」

「婦人だど？コイツ娼婦を婦人と言ったぞ？」

「それにコイツのこの服、東洋の黄色の猿じゃないか？」

「世間知らずの田舎っぺだな？」

「ひゃひゃひゃ」

口々に葵をあざ笑う声。

葵は額に手を当ててこう言った。

「やれやれ、困ったものだ……」

「困るなら引っ込んでろーッ!!」

民兵の一人がライフルの銃床を葵の背後から後頭部めがけて降り下ろす。

女性が「危ない!」と叫び、日華も思わず「葵殿!」と言ったと同じ時に、

葵は打刀を抜き、刀の柄を兵士の鳩尾に突き立てた。

「ぐ……お……」

男が腹を手で押さえながら倒れ伏し悶絶している姿に兵士たちは啞然としていたが、一人が「公務妨害だ!!逮捕しろ!!」と叫び、一斉に兵士たちが取り押さえようと飛び掛かる。

葵は打刀を持ち替え、兵士たちの脇腹や脚に目掛けて峰を打ち付ける。

5人は居た男達があつという間に地面に倒れ、その全員が苦悶の表情を浮かべている。

それを見ていた一人が笛を鳴らし、街道に響かせる。

すぐに20人はいる民兵が通りに押し寄せ、葵を取り囲む。

葵は刀を下ろしたまま兵士たちを睨みつける。

その時、

“ しゃん ” と鳴り響いた金属の音。

葵の背後に日華が降り立った。

「先ほどの女性は拙者が逃がした。焼き魚の御恩がある故、僭越ながら助太刀致すでござる」

「…助かる」

笠に手を当てニコリと笑う日華に、葵は応える。

直後、兵士たちが襲い掛かり、葵と日華はそれに応戦する。

葵は峰打ちで、日華は錫杖による殴打で彼らの血を流すことなく倒していく。

兵士たちは一人、また一人と倒れていく同胞を見て悟る。

この者達が只者ではないことを。

ある者は彼らが得物を振る素早さに、ある者は彼らの数を物ともしない身のこなしに恐れおののいた。そしてその全員が彼らの表情を恐れた。

鋭く輝く眼光と、どこか楽しそうに笑うその表情を。

そして只者ではないということ、葵と日華のその動きが互いのことをそう確信させた。

誰一人この二人を止められないのではないか？そんな空気が漂い始めたその時であった。

“ガオオオオオオアアアツ!!”

突如響き渡る轟音にも似た咆哮。

それを聞いた兵士たちは皆震えあがり、血の気が引いたように慌てて立ち上がり始める。

立てない者は肩を借りながらその場から立ち上がり、中には引きずられる者までいた。

葵と日華はその声の主を見定めた。

通りからカタリカタリと足音を響かせて、石畳を歩く “それ

” は、巨大な蜘蛛であった。しかし蜘蛛に目は無く、牙を持つ大きな口が閉ざされたまま、カタリカタリと足音を立てて車を引いていた。

その車に乗り揺られていたのは一人の少女。

否、少女と呼ぶには、余りにも禍々しかった。

歪な王冠を被り、両腕に鎧を、そしてその脚は巨大な車輪と一体になつていた。

その異様な存在感に、葵も日華も思わず固まった。

次の瞬間、

“ドシュツッ！ドシュツッ！”

蜘蛛の口が開かれ、鈍い音を立てて、二つの円盤のような何かが発射され、日華が避ける間もなくそれは体に直撃し、衝撃で吹っ飛ばされて地面に倒れた。

痛みこそあれど、それが殺傷性の無いものだということに悟るのに時間はかからなかった。

しかし体を起こそうとしたその時だった。

「うっ!？」

ずしりとのしかかる感覚。

背中の上に先ほどの何かが日華の上に重石のように乗っていた。

しかし彼の眼にはそれが砲弾や銃弾のようには見えなかった。

丸くて色鮮やかで、ほのかな甘い香りがしており、菓子類に見えたのだ。

しかし日華がそれ以上に驚きを隠せなかったのは、

「…」

「貴様、何故まだ立っている?」

葵がああ攻撃をかわしていたことだった。

日華には彼がどのようなに避けたのかまるで見当がつかなかった。

それを見たチャリオットに呼応するように蜘蛛の口から二発の砲弾が放たれる。

葵は腰の懐中時計を掴み、ボタンをカチツと押した。

すると葵は目にもとまらぬ速さで打刀を振るい、砲弾を真つ二つに切り飛ばした。

葵は刀身を空に振りながらひゅうと息を吐く。

「…メアリ」

チャリオットが呟く、蜘蛛はガゴと口を更に大きく開け、先ほどよりも多くの砲弾をばらまいた。

それらは日華の背中に乗っているものや、先ほどのものよりも小さかったが、ずっと弾速が早く、数も多い。

その制圧攻撃を前に葵は、打刀を鞘に納め、膝をグツと曲げる。居合抜きの構えだと日華は思う。

葵は再び懐中時計を握り、ボタンを押す刹那呟く。

「時間制御術式・加速、五秒」

ボタンを押した瞬間、葵の周りの全ての時間が鈍くなる。

葵は全ての砲弾を掻い潜り蜘蛛の眼前に辿り着き、腰に差してあるレバーアクション式ライフル銃を抜いて、蜘蛛の口目掛けて引き金を引いた。

「二、一、…解除」

ズドオオオオオオオン!!!

葵の言葉の後、蜘蛛の顔面で大きな爆発が起こった。

口の中にため込んである砲弾に葵の放った弾丸が誘爆し、蜘蛛の口腔が爆発を起こしたのだ。

民兵達は口々に声を上げ、爆風に顔を押しさえる。

日華には、それが一瞬の出来事に見えた。

まるで葵が瞬時に蜘蛛の眼前に移動し、ライフル銃で蜘蛛に銃弾を浴びせたように見えた。

葵は銃を片手で一度回転させてから腰に差し、深く息を吸って、吐く。

しかし煙の中から姿を見せた蜘蛛は傷一つついておらず、それが引く車の席に収まる少女も瞬き一つすることなく、葵を見据えている。

「チャリオット様!!」

民兵の一人が叫び、全員が葵を取り囲む。

チャリオット。そう呼ばれた少女は言った。

「報告せよ」

「はっ!この者共は娼婦の取り調べを妨害した為、取り押さえようと…」

“ ガシャ ”

「ひっ!?!」

蜘蛛の口が民兵の方を向き、兵達は狼狽える。

チャリオットは眉一つ動かさなまま、静かに言った。

「そんなことは聞いていない。私の街で好き放題に暴れまわる権限を与えた覚えはない」

「も、ももも、申し訳ございません!チャリオット様!しかし私共は決して暴れていたわけでは」

「言い訳は聞いていない。私に来るまでにたった二人を抑えられずこの体たらく。恥を知れ」

男は何も言えずに固まる。

彼らのやり取りを聞きながら葵は思考を巡らせる。

彼女が街を？まだ年端も行かぬ子供、それも女ではないか。と。

日華は未だに上に乗るこの菓子のような重石から脱しようと思をよじっていた。

「んぎぎ」だの「ぐぐぐ」だのと声を漏らす、徒勞に終わる日華を横目に葵はチャリオットに声をかけた。

「その御令嬢、チャリオットと申したか？私の名は神守 葵。倭ノ國より海を越えてこの地へ来た。先ほどの騒動は失礼した。貴殿と話がしたい」

民兵は口々に葵を罵るが、

葵の言葉が届いたのかチャリオットは民兵達を制して蜘蛛が引く車から降りて地に足をつけた。

そして足と言つていいのか分からないその車輪を転がして葵の元へ近づく。

「興味深い」

日華の背中から重い感覚が消える。

面妖な重石がふわりと浮き上がり、蜘蛛の口の中へ吸い込まれるように入つていき、蜘蛛はそれをごくんと飲み込んだ。

「葵殿ー！」

急に名前を呼ばれ、葵は声のした方を見る。

呼んだのは日華しか居ないのだが、先ほどまでそこに居たはずの彼はいつの間にか家の屋根の上に立っていた。

「かたじけないでござるーこの恩はいずれ必ず返す故ーさらばっ！」

そう言つて日華はシュンと飛んで何処かへと消えた。

慌てて追いかけてやうとする兵士たちをチャリオットは制した。

「あれはほうっておけ。」そうして葵に向き直り、

「倭ノ國のサムライ、お前の話を聞いてやろう。着いてこい」

そう言つて彼女は蜘蛛の引く車に座り、蜘蛛はまたカタリカタリと音を立てて動き始めた。

葵は置いて行かれぬように歩く。

この国で魔術を学び、魔術を知るために。

死に分かれた妻と再会するために。

そんな葵の背中を見送る日華は嬉しそうな笑みを浮かべる。
「アレが悪喰らう鬼と呼ばれた侍か…。いやはや、人間万事塞翁が馬
とはよく言ったものでござるなあ……」

(Side Story 2 Dullahan's Chariot
了)

第六章 〈Insane〉

~~~~~

ユナはふと立ち止まり、周囲を見回した。声が聞こえたのだ。

彼女にとつてとても聞き覚えのある声だ。

「ユナ？」

マルチはユナが立ち止まって辺りを見回しているのを見て声をかけた。

新聞を読んでいたアンドレも、ユナを見て何事かと近づく。

「おいおい、どうした急に？ 民兵のことなら…」

「オツサン、僕ちよつと行きたいところが出来た。一旦別行動してもいいかな？」

「お、おいユナ…、それは……」

「調べたいことがあるだけ。すぐに戻るから、東区の三番街広場で落ち合おう。それじゃ後で！」

アンドレの制止も聞かずに、ユナはそう言い残して通りを駆け出していく。

名前を呼び、止めようとするアンドレを呼ぼうとする声は、市街の雑踏にかき消されてしまった。

彼女の背中を見て、マルチはアンドレに向き直る。

「私、ユナについていく。一人にさせられない。」

「それは…大丈夫なのか？」

「信じて」

マルチは真っ直ぐアンドレの目を見て言った。

彼女のその無機質ながらどこか芯の強さを感じさせる言葉に、アン

ドレは頷く。

「……頼んだ。危なかつたらユナをつれてココへ逃げるんだ。俺の知り合いと言えに入ってくれる」

アンドレはマルチにその場所が書かれた紙を渡して、彼女を見送った。

「さて」と一息入れて、アンドレはグランドセントラルの街道を歩き出す。

新聞に書かれている見出しの写真に載っていたストレングスと、彼女の腕に捕らえられたアレスの居場所を突き止めるために。

~~~~~

歌劇場に続く道を、ジャンヌの案内でトトとステラは歩いていく。ナミマとマイも来るはずだったが、入り用で呼び出されてそちらに行ってしまった、

結局二人でついていく形となったのだ。

ジャンヌはスキップのような、ダンスのステップのような小気味良い足取りで歩く。

その背中にトトは問う。

「ねえ、本当に劇場にいるの?」

トトの疑問にジャンヌはフンと笑う。

信じるだけでも言わんばかりの態度にトトは大丈夫か不安になってきていた。

そんなトトの表情を見てステラは、タタタンとステップを踏みながら歩くジャンヌの前に立つ。

「質問に答えて。私は貴女を信じたわけではない」

「あらそう?彼の言うことには従うのに?」

「トトは今関係ない。トトの質問に答えて」

「私が信じられないの?彼には信じてと言ったくせに」

「っ……！」

ステラの表情に陰りが見え、トトが間に入ろうとしたときだった。「おっ！トトくんじゃないか！」

後ろから突然声を掛けられ、驚きながら振り向くとアンドレがそこにいた。

新聞を読んでいたのか、脇に抱えながら手を振る姿にトトは驚きながらも駆け寄った。

「アンドレさん、来てたんですね！」

「おう、随分遠回りだったけどな！ステラちゃんも元気そうだな！」

そう言っつてステラを一瞥するアンドレを見てからステラは周りをきよろきよろと見回した。

「ユナは？」

「ユナ？ああ、今別行動中。」

それを聞いてトトは少し心配になった。

ステラはトトの気持ちを察してか、きつと大丈夫と言い、トトもそれを聞いて静かに頷いた。

「ちよつと、置いていかれたいの？」

「あ、すみません！」

ジャンヌに言われて、トトは慌てて頭を下げる。

その様子にアンドレが口を開く。

「……ステラちゃん、君…お姉ちゃんとか居たりした？」

ステラは首を横に振る。ジャンヌは笑いを堪えるために口元を押さえた。

「あ、そういうば探してた人ってのは見つかったのかい？」

「……えつと、この人が探すのを手伝ってくれて言っつてくれて……」

トトの言葉にステラは頷く。ジャンヌはそういうことだからと話を切り上げようとしたが、アンドレは食い下がった。

「おいおいおい、トト君そりや一体どういうことだ？探し人は見つからなかったのかい？」

トトは実は…と、この街に着いてからの出来事を話した。

アンドレは黙って聞いていたが、ジャンヌは先を急ぎたいのか苛立ちを滲ませていた。

「だから私が探すのを手伝うって話をしているのよ。人探しが得意な人に協力してもらおうの」

「あ、じゃあ一つ俺に質問させてくれ」

「何？」

アンドレの言葉にジャンヌは振り返る。

ステラの瞳とは対称的な赤い瞳を見て、彼は問う。

「アンタの名前だけ聞かせてくれ」

「ジャンヌよ。兵隊さん」

~~~~~

ユナは自分を呼ぶ声に導かれるように街中を歩き、その声の主を見つけて立ち止まる。

その声の主はユナに向かって微笑む。

ユナの記憶の中に存在する人物。

もう会えないと思っていた肉親。

たった一人の、妹。

「……ルミ？」

「おかえり、お姉ちゃん！」

二人の再会を、少し離れたところからマルチが見つめていた。

ユナがルミと呼ぶ少女に底知れない違和感を覚えながら。

「何故俺が兵隊だど？」

アンドレはジャンヌに問いかけようとするが、しかし彼女の姿はおろかトト達の姿すら忽然と消えてしまっていて、人々の雑踏だけがそこにあった。

アンドレは帽子を被りなおしながら考える。

「兵隊さん」

ジャンヌの言葉を思い浮かべ、残った疑問を燻らせる。

トトにすら教えなかったことを何故彼女が知っているのか。

「知りたいですか？」

背後から投げかけられた言葉にアンドレは身構える。

そこには一人の女性が立っていた。

フードを深くかぶり、その表情はよく見えない。

「えつと…君は？」

「……私の質問への答えが先です。疑問の答えが知りたいですか？」

少し考え、アンドレは頷く。

「……では、こちらへどうぞ」

歌劇場、所謂オペラ・ハウスとも称されるその場所に案内されたトト達は建物の外観の造りに圧倒された。

自分が生まれる前からこの建物で音楽が響いていたのかと想像する時間も与えられないまま、ジャンヌは鼻歌を歌いながらどんだん先を進んでいき、トトとステラはその後ろを急ぎ足で着いていく。

そうして中に入ると、またその中の造りにも目を奪われた。

しかし、当時の活気や美しさは失われており、人の姿は全くと言っていいほど無く、床や照明はうっすら埃を被っている。

「こつちよ」

ジャンヌに促され、トトは建物の奥へ奥へを進んでいく。

ステラはそんな彼の背中を追う。

ジャンヌに着いていく様子が、まるで彼女の鼻歌に誘われているようにステラは感じた。

そうして一番奥にある部屋の扉をジャンヌが開ける。

そこは大舞台のある部屋で、ジャンヌは観客席横の通路をスキップしながらぬけて、舞台に駆けあがってみせた。

「ほら、あなたも」

そう言つて手を差し出すジャンヌに惹かれるようにトトも舞台上がる。

ステラは上がらずに、トトの後ろ姿を見ていた。

トトはそんな彼女の様子に、胸騒ぎを覚えた。

彼女にもう会えなくなってしまう気がした。

「あの、そろそろ教えてくれませんか？」

「何を？」

「その…トリユーさんはどこに？」

トトがそう聞いた次の瞬間だった。

自分の体が床に吸い込まれる感覚に襲われ、トトは舞台の上から姿を消した。

“ 空間転移魔法 ”、ポータルとも呼ばれる高度な魔法によってトトの体は何処かへと連れ去られたのだ。

「トト!!」

ステラはそれを見てすぐに舞台の上に飛んでくるも、もうそこにトトの姿は無かった。

「トト!? トト!!」ステラは必死に名前を呼ぶが、名前の主が返事をすることはなかった。

「あつははははは!!おばかなステラ」

ジャンヌの言葉にステラの左目に炎が灯る。

その眼で睨まれるジャンヌの表情は余裕そのものであった。彼女は白い大鎌を手に取り、右目にステラとは対称的な赤い炎を灯らせた。

「あの子は私がもらうわ、だから貴方はここで死んでちょうだいね？ステラ？」

ステラはその言葉に抜剣で応え、ジャンヌと対峙する。彼女の目に宿す炎が強くなる。

「ジャンヌ、貴方は何者？トトを何処へ連れて行ったの？」

「言わないわ。貴方はここで死ぬんだもの。」

ステラは剣を振るい、ジャンヌの鎌と火花を散らせ、幾度と刃が交差する。

忘れ去られた舞台の上で、二人の少女の戦いが始まった。

~~~~~

「……」

女性に誘われアンドレが辿り着いたのは、中央図書館であった。数多くの貴重な蔵書が眠る場所と聞くが、アンドレはそれを見るために来たのではない。

女性はアンドレに背を向けたまま、図書館の中を進みながら口を開いた。

「元国境警備隊第一歩兵連隊小隊長、アンドレ・マクミリア。優れた近接戦闘能力の高さから、”狂犬”と呼ばれていた……」

「……特にPRしたつもりはなかったんだがなあ」

女性の言葉にアンドレは頭をポリポリと掻いた。

彼女はアンドレに向きなおると、深々と頭を下げた。

「ご紹介が遅れました。わたくし、当館長のメイ。と申します」

「メイ」 その言葉にアンドレの頭の中でキーンと音がしたように感じた。

何かを思い出せそうで、思い出せないような感覚。

どこか懐かしく思えるような、そうでないような、そんな感覚が。「何故俺のことをそこまで知っているんだ？それに、あの白い子だつて…」

白い子、というのはジャンヌのことだ。

女性はずつと俯いて見せていなかった顔を上げ、アンドレはその表情に驚いた。

彼女は、涙を流していたのだ。恐らく此処に来るまでの間も、ずっと。

しかし彼女は右手を上げ、パチンと指を鳴らした刹那、

「ガアアッ!!」

「ッ!!」

アンドレは後ろに飛び、直前まで自分が立っていた場所に人のような姿をした怪物の、

人の体とは思えない程巨大化した爪が空を切っていた。

避けていなければ首は斬り飛ばされていたとアンドレは思う。

しかしそれだけではない。

そこかしこに人とは思えない怪物たちがあらわれ、逃げる間もなく取り囲まれた。

全員が唸り声をあげながら近づいてくる。

アンドレは過去ユナとの旅の道中でクリーチャーに襲われたことは確かにあった。

だがここまでの数に囲まれたことは無かったし、まして今日の前に居る奴らは何故かついさつきまで人だったかのように衣服をまとっているものばかりだ。

「ここにあるのは沢山の貴重な書物。汚さない様に」

メイはそう言って指を鳴らそうと右手を挙げる。

「ちよちよちよ！ちよつと待ってくれよ！なんだって俺をこんな目に遭わせるんだ!？」

アンドレのもつともらしい疑問に彼女は答えた。

「アンゲル様の御命令ゆえ、このような形をとったままでです」

アンドレはその言葉に更に質問を投げかけようとするが、無慈悲にももう一度パチンと指を鳴らされ、アンドレは自分を取り囲む怪物たちに襲い掛かれるところとなる。

「うわうわうわうわ!!?!」

飛び掛かってきた怪物の爪を、牙を、手を、足を、飛んでかわし、床に転がり、四つん這いでジタバタと逃げる逃げる逃げる。

「うおおおおおおああああ!!」

情けない声を上げながら逃げ回るアンドレを涙の絶えぬ目で見るとメイは思う。

(なにゆえアンゲルはこの男を求めているのだ?)と。

彼女の目には国境警備隊で最強と呼ばれた兵士の姿はなく、ただ怪物を前に逃げ回る男にしか見えなかった。

「ハア…アンゲル様に報告ですかね…?」

メイは呟く。男の悲鳴も煩わしくなってきたのでとりあえずささと始末させようかと思いついたときだった。

館内に響く一発の銃声。

直後、恐らく銃撃を受けたであろうクリーチャーの一体が吹き飛ばされて、彼女の足元にごろりと転がった。

「つたく、だからPRした覚えはないんだっての」

「……」

そう言いながら歩いてきたアンドレの右手には黒い大型拳銃が握られている。

銃口から立ち昇る煙が消えないうちにクリーチャー達の攻撃が迫り、アンドレは先ほどの様子とは違い、一切迷いの無い目で引き金を引き、標的の急所に正確に二発弾丸を叩き込む。

クリーチャー達が断末魔を上げ倒れ伏す中、アンドレの背後に飛び掛かる最後の一体に対し、アンドレは左手で散弾銃を抜き、頭部目掛けて発砲する。

一撃でクリーチャーの頭が吹き飛ぶ様子を見たメイは表情こそ変

えなかったが、その目は驚愕を隠せずじいた。

だがこれだけでは彼女の疑念は晴れなかった。

まだこれは「片鱗」でしかない。彼は本気ではないと。

メイはもう一度指をパチンと鳴らす。

その音に呼ばれるように、アンドレの体より遥かに巨大な頭蓋骨が現れた。

角の生えたその頭蓋骨の眼孔はたしかにアンドレを捉えていた。

アンドレは散弾銃の弾を交換しながらメイに問いかける。

「新手か…。コイツの紹介してはくれないのか？お嬢ちゃん？」

「…答える義務はない」

「…そうですかい」

アンドレは懐に散弾銃と拳銃をしまうと、ナイフを抜いて逆手持ちで構えた。

「図書館ではお静かにしないといけないんじゃないのか？」

「ここには魔術で結界が張られている。なにがあっても外にこのことが漏れる心配は無い」

「…：…なんでそうまでして俺をこんな目に？」

「見たいから。貴方の力の強さを」

「…：…これに勝ってことですか…：…たく」

メイの言葉にアンドレは呆れた様子で言った。

それは目の前で自分を狙う巨大で不気味な異形に挑まなければならない自分の不運への嘆きでもあった。

そんな彼とは対照的に、彼女の予測する未来は。

「傷一つ付けられずに敗北する自分が使役する怪物の姿」であった。

(続く)